
あなたは今日から魔神サマ！

神風大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは今日から魔神さま！

【Nコード】

N0096Q

【作者名】

神風大和

【あらすじ】

「貴方は魔王を目指しますか？それとも神を目指しますか？」

「どちらでもない？ああ！魔神様を目指すのですね！」

「いや、違うから！！」

こうして神崎廉也は魔神になるための波乱万丈な日々を過ごす事となった。

待ち受けるは最高神率いる天界！魔王率いる魔界！あと人間ちよいちよいの学園もの！

第一話あなたは魔神サマ!?(前書き)

ファンタジー+コメディ+シリアス=超気まま
的な感じでいきます

第一話あなたは魔神サマ!?

「おい、廉也。これはナンダ?」

そう言つて俺の友達（パシリ?）堂本^{どうもと}実は、目の前にある物をポンポンと叩いた。

「いや、これナンダ? って言われても見りゃわかるだろ。本だよ、本」

「そういう問題じゃないだろう! どう見ても危ないヤツだろコレ!」
そう言つて実がビシッ! と指さした本には確かによくわからん呪文みたいな言語が所狭しと並んでいる。

「ははっははは、まさか貴様恐いのか? 恐いんだろー。ざまーミロ!」

そして、この場面の原因を作つたであろう人物、神崎^{かんざき}廉也は舌を出してヘラヘラする。

ムキームキー、ギャーギャー

「てんめっー! ……はあもういいや。んでなんでこんなもの持つて来たんだ?」

もう言つても無駄だと判断した実はせめてこれを持つてきた原因を突き止めるべく話を換えた。

「おお、流石話が分かるな。伊達に俺の友達^{パシリ}をやつていない」

「アレ、なんか変な訳入つてない?」

「んー? 気のせいだろう実くんよ。それよか、持つてきた経緯を話そう」

「うわ、なんか釈然としねえ」

無視

「そうあれはとても温かい春のことだった……………」
「今、夏休みだろうが」
「はっ、ダメレ実^{みのる}」
「……………」

閑話休題

さてさて、過去を遡り数時間前の朝の事
俺こと神崎廉也^{かんざきれんや}は気だるくテキストに外を歩いていた。
「あちー、アイス食べたいぜ」
ふとそう思いコンビ二に立ち寄ろうと足をとめた時それは空から落ちてきた。

ヒューー、ガコン！

前者は落ちてきた音、後者は廉也^{れんや}の頭に当たった音
「いつて！——、なんですか、コレは？」
そう言つて頭をスリながら落ちてきた正体を確かめる。

本——？

「……………！？まさかコレは……………！！」
恐る恐る、落ちてきた本を触る。
「まさか、まさか……………ついに見つけたぞ……………！デ。ノートを……………」

天高くデ。ノート？を持ち上げて廉也は力いっぱい叫ぶ。

「クスクス」

叫んだ瞬間、不意に後ろの路地から今時女子高生が出てきた。
つまり………叫んだ所をもろに聞かれてしまったのだ。もち
ろんデ。ノート？を持ち上げたままの状態で。

現に女子高生たちは「何言ってんだ、この人」みたいな目で嘲るよ
うに笑っている。

（………うん。まあ、アレだな。自分で叫んどいてなんだが・
………恥ずかしい！！！）

本をおろし赤面の顔を押えながら悶える。

その場面も周りからみれば「何この人、気持ち悪い」なのだが幸い、
先ほどの女子高生以外人影は無いので廉也は不幸中の幸いと、もう
気にしないことにした。

「それにしても……デ。ノートにしては分厚すぎるな」

そう今廉也が持っている本はとにかくバカでかいのだ。

多分デ。ノート？30冊分くらいある（勘）

「うーん、よく見たらヘンな文字びっしりあるし、デ。ノートじゃ
ないのか？」

デ。ノートだったら色々おもしろかったんだがなあ（主に脅す意味
で）と肩を落としてつつも何かすごい物かもしれないとドキドキ半分
ワクワク半分（人はこれを興味津々という）だが何らかののリスク
がある場合一人でいるのはなるべく避けたい。

しばらく考えた末、ピカーンと廉也は閃いた。

「よし、実の所いこゝ」

「………みたいな？」

「ふざけんなよ！！何が、みたいな？だ！！」

実はこめかみに今にもはち切れんばかりの青筋をピクピクとたてている。

「落ち着け実！！そんな怒っていても何の解決にもならん！！」

「いや、お前のせいだから！全て完全無欠にお前のせいだから！！」

「バカめ、ダメレ実^{みのる}」

そう言つて廉也は実に背を向ける。

「おい廉也！つて？？なにしてんの？お前」

実は最初無視していたが、やはり気になるのか、不思議そうに廉也に声を掛ける。

「ふふふふ、決まつてんだろ。本を開けてんだよ！」

なんかよく見たら本の入り口に錠前？みたいなのが付いていたが、廉也が手を翳すと簡単に砕けた。

「バカっ！やめっ！！」

実が止めに入ろうとするが、時すでに遅し。

「ふはははははは、もう遅いわ！！」

そう言つて廉也は勢いよく本を開ける。

パカ、パアアアア！！

ボタン！！！！！！

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・おい、なんか今何か出てこなかったか・・・・？」

「さて、何のことかね実くん。わしはそんな事しらんよ」

バタバタ！！・・・バタバタバタバタ！！・・・バタバ
タバタバタバタバ！！！！

「いやあの、廉也さん？なんかソレすんごい動いてるんですが・・・？」

実がそつと指差すその先には廉也が開けた本を無理矢理閉じている・・・というか本が廉也に閉じられながらも開こうと足掻いている映像だった。

「・・・こんなゴミは・・・お外へポーーーーーッーン！！」

廉也は現実逃避するように外に向かい勢いよく本を投げつける。

そのまま勢いよく窓を閉める。

これで、本はどこか遠くに落ちて万々歳・・・となるはずだった。

「「は？」」

そつ、本は落ちるところかそのまま急上昇旋回しながら再びウターンして戻ってくる。

主に廉也めがけて。

「どわああ！！」

ヒュー、バリーン！！

本は窓ガラスを突き破り廉也に激突！する直前に廉也は避け、その後ろにいた実の顔面に激突した。

「ぶべらっ！！」

ヘンな声を出しながら実が崩れ落ちる。

「ふっ、流石俺」

廉也は自分が避けたことにより実が本に激突された事を気にも留めなかった。

それよりも、気になる事があったからだ。
先ほど飛んできた本の中から人が、詳しく言うと銀髪美少女が本の中から俺の目の前に現れた。

思わず見とれてしまうほどその少女は綺麗だった。

見た目は自分と同年代くらいで腰まで夕に届く銀髪の髪に雪のように純白な肌。

全てが彼女が存在していること事態なにか神が掛っているほど神秘的だった。

そして、その少女は俺にこう告げる。

「貴方は、魔王を目指しますか？それとも神を目指しますか？」

その声も聞いたことがないくらい綺麗で廉也はずっと聞いていたいくらいだった。

だが、その質問の内容は実になんというか突拍子もない事だった。

「うん、どっちもヤダ」

廉也は自分でも驚くくらいすんなりと声が出ることに驚嘆した。

目の前の銀髪少女はそれまで無表情だった顔を初めて困り顔に変化させた。

「え？えーと、それは困りましたね」

さすがにその答えは予想していなかったのだろう。少女は心底困ったように唸り腕をくんで何かを考えている。

廉也は傍観者に徹しており、実は完全にのびている。

そこで何か閃いたのだろう。

銀髪少女が手をポーンと叩いてパアアアと顔を輝かせる。

「なるほどー！さすが選ばれし者様！魔王も神も違う。魔神様になるんですね！」

「は？いや、ちょっと・・・」

「またも突拍子もないこと言われ、流石の廉也でも頭が混乱してきていた。」

「すごいです。私も思いつきませんでしたよ！」

「満面の笑みでエヘへとほほ笑む銀髪少女に少し和みながらも（実際そんな場合じゃない）これではいけない、と廉也は少し声を張り上げる。」

「ちょっとまって！俺は魔王や神や魔神になるとは一言も言っていない！」

「・・・じゃあ、やめちゃうんですか・・・？」

「途端目をウルウルと潤ませて手を胸の所で重ねてお願いポーズをする銀髪美少女。」

「・・・・・・」

ふと天井を見上げたまま廉也が止まる。

そして顔を銀髪少女に向ける。

「喜んでお引き受けしましょう」

（嫌もう無理だから！！こんなの理性保てん！）

心の中での葛藤に結局負けてしまった廉也は否応なしに快諾？した。

銀髪少女はキャツキャツと飛び跳ねて喜んでいる。

「では、早速契約致しましょう！」

「あー、ちょっとタンマ。その前に色々説明してくれるかな？その契約の事やらこの経緯とか」

「そこでようやく銀髪少女はハッ！とした顔になる。」

「あう、すみません。ようやく選ばれし者様に巡り合えたので、ついはいはしゃいでしまいました。申し遅れましたが私の名はシェリルと

御呼び下さい」

「うん、俺の名前は神崎廉也。廉也でいい。えーと、それでシェリル色々説明を願えるかな？」

「分かりましたが、そこに倒れている男性はどうしましょう？」

シェリルの視線の先には未だに伸びている実。

なんかいい夢見ているのか顔が笑っている。

「ああ、あれはゴミだからほおっておけ。あとでちゃんと捨てるから。それよりも説明説明」

「そ、そうですか……。分かりました。では、一から説明して行きたいと思います」

そして、シェリルは口を開く。まるで子供におとぎ話でも話すかのように優しく魅入られる声で。

「まず、貴方様。廉也様は支配者様選ばれし者となりました」

最初っから引つかかるものを感じて廉也は思わず声をあげる。

「その、支配者とか、選ばれし者とかなんだ？」

「ああ、そうでした。この世界ではそう言った物は語り継がれていませんでした。まず、支配者と呼ばれる者はこの世界を天界・人間界・魔界を創設した人の事を言います」

「あれ？神様とかじゃないんだ？」

当然の疑問を廉也は口にするが、シェリルはとんでもないと首をふった。

「あんなもの達と支配者様と一緒にするなんてもう恐れ多いです！神や魔王、人間は全て支配者様に作られたのですよ。この世の全てに【生】という原点を与えられたのが支配者様であり、また廉也様はその支配者様選ばれたのです」

なんかいまの宗教者達が聞いたら、というより全人類がもしこの事実を知ったならば人類の歴史がひっくり返りそうな大事件が起こるに違いないと内心冷や冷やししながらシェリルの話しに廉也は耳を傾

けていた。

「んでも、なんで俺が選ばれたんだ？」

「それは、廉也様が原初の鍵を壊されたからです」

「原初の鍵？？俺はそんなの壊した覚えはないのだが？」

「あの廉也様が拾われた本に鍵が付いておりましたよね？」

「そう言われて本を開けようとした場面を思い出す。」

「あ！あの頑丈そうな鍵か。確かに壊したのは俺だがかなり脆かったぞ？手を翳しただけで壊れたし」

「そう、それこそが選ばれた証拠です。今まで数多の人々それこそ英雄と呼ばれる方々の手にも、渡ってきましたがコレを開けた者は誰一人とておりませんでした」

「そう言つてシエリルは自分が出てきた本を拾い上げる。」

「私は支配者様より使われた使者でございます。といつても地球が生誕したその日からずっと本の中でしたが……」

「えっと……それじゃあ、まさかシエリルは46億歳？」

失礼かもしれないが、廉也は我慢が出来ずに聞いてしまった。

「はい。そう言う事になります。が、本の中は暇なのでずっと眠っております。ですが、その間にも知能は蓄積されていきますのでこの地球の事は隅々まで理解しております」

つまりこの目の前のシエリルという女性はこの地球で唯一全てをそれこそもう途方もない歴史を生きてきたことになる。

色々歴史もおもしろそうだったので今度聞いてみようと思ふ廉也心の奥底に決めた。

「では次は契約の話になります」

「ほうほう」

ようやく話しの核に至る部分に突入し、堅く身構える。

「契約は簡単です。私の血を廉也様が、廉也様の血を私が飲めば契約完了です」

「・・・・・・は？」

さも簡単とでも言うように（実際簡単な事なのだが）言われたが思春期の自分にとってそれは耐えに耐えがたい事であった。

「血・・・・を飲む？・・・・俺が？シエリルのを？・・地・・・・値・・・・智・・・・遅・・・・血！！??」

もう廉也は何が何だかわからない気持ちになりそうだった。

このまま高さ10階のベランダから落ちてでも大丈夫だと錯覚するほどに・・・・

「そうです。血を飲むんです。私はもう準備万端ですが？」

シエリルはおもむろに立ち上がり自分の指を口で噛んで血を滴らせながら廉也の口に近ずける。

ズイズイ、と

「いや、あのシエリルさん冗談はやめてホシイナーなんて」

「何をおっしゃいますか。私は本気でございます。ほら、ズイズイ」最早血の滴る指は口のすぐそば。舌を伸ばしたら普通に届く距離である。

「誰が舐めるか！こんな——ムグツ——！」

大声をだして怒鳴ろうと考えた廉也は大きく口を開けて声を張り上げようとすると口に何かを突っ込まれた。

徐々に口の中に広がる血特有の鉄分の味と仄かに香る甘いにおいと優しく包む込むような味。

思わず目を見開いたまま硬直してしまった。

「さて後は私が廉也様の血を飲めば契約完了です」

そのまま顔をずいずいと寄せられ未だに惚けている俺の首筋に向かつてシェリルは噛みつく。

カプツ！チュー

背筋がゾワゾワと凍りつくのを感じてようやく廉也は意識を覚醒させる。

「ちよっ、なにしてんだ！」

廉也の言葉など聞く耳もたずシェリルは充分吸い終えると満足した顔つきで一言

「大変おいしゅうございました。ですが廉也様体に漲るものを感じませんか？」

そう言われてまだ混乱（理性崩壊の瀬戸際）は解けていなかったが仕方なく体の中へと意識を向ける。

熱いというよりなんか得体の知れないエネルギーが無限にわき出てくるイメージが広がる。

「・・・何だコレ？体からどんどんエネルギーが湧いてくる・・・」

「それこそが契約の証です。おめでとうございます！これにて契約は完了しました」

シェリルはそう告げると廉也の手を取ってガッチリ握手してきた。

満面の笑みで・・・

廉也は未だ釈然としないものを抱えていたがやってしまったことは仕方がないと、案外楽観的に見てしまった。

後からしてみるとこの時断っておけばよかったと廉也は全力で後悔するのであった。

それは遠からず未来のことなのだがこの時の廉也が知る由もない。

第一話あなたは魔神サマ!?(後書き)

第一話でんやわんやに仕上げました。

第二話いろいろご説明が入ります。

第二話異世界情勢と魔神の手引き！（前書き）

本来なら前のと一話にまとめるつもりだったんですがすごくめんどくさくなったので分けました。

第二話異世界情勢と魔神の手引き！

「ところで、魔神とか言っただけで結局俺はどうしたらいいの？」

「ゴホン！それでは魔神になるための必要な情報として今現在の天界と魔界の情勢を教えさせていただきます。まず天界ですが現在最高神をトップに上級神、中級神、下級神とピラミッド形式の序列となっております。そのまた下には天使などがおり時には神よりも強い天使が生まれる場合もあります。次に魔界ですが魔王を中心とした王族と呼ばれる魔族たちを中心に魔物や、たまに霊などを使役出来るものもおります」

「ていうか、神って階級とかあるんだ・・・はじめて知った」

「はい、神は厳格な縦社会であり、今現在800名ほどいます。そして、魔界は神界には勢力的に劣るものの個々の力が圧倒的に強くまた血気盛んな事で知られています。ちなみにこの2勢力はただいま冷戦状態となっており関係は劣悪をさらに極めます」

そこで一つの疑問を感じて廉也は首を傾げる。

「なあ、もう魔王と神がいるなら俺何もしなくてもいいんじゃない？」

その答えにしばしシエリルは顔を俯かせたまま沈黙する。

「・・・そういう訳にはいきません。ご主人様は支配者様選ばれた存在。つまり今最も力を持つのが廉也様です。さすがに直ぐに最上神や魔王と戦う事は難しいかもしれませんがそれも時間の問題です。そしてこの人間界において最も狙われる対象が廉也様なのです。

魔界と天界は軍隊を人間界に送り出すことは不可能とされていますが個々ならば送り込み事が可能なのです。ただし無関係な者を巻き込むことは厳禁ですが」

さらにシェリルはさらに言葉を紡ぐ。

「言い忘れましたが、人間界は現在中立地帯となっております。過去に人間界を巻き込んだ大戦争で関係のない人たちを巻き込んで大量に殺してしまった事が支配者様の逆鱗に触れてしまい魔界、天界双方に人間界立ち入り禁止の戒めを施し、当時戦争をしていた最上神と魔王を処罰してから人間界は中立地帯となっているんですよ」
「ほー、ていうか支配者なんか優しくないか？あとなんで人間界にはそう言った文献や記録が残されていないんだ？」

廉也は気付かない。

だんだん話しがずらされている事に。

「ええ、すごく支配者様は優しいんですよご主人様。この世に【生】という概念を与えた御人ですから。

あと、人間界は一番不安定な時空に存在していますから何度も破滅と再生を繰り返しています。そのため支配者様はおるか天界、魔界の情報もこの人間界においては極々一部の者しか知らないんですよ」

「なるほどなあ」

しかし、先ほどから、廉也はある一つの単語を聞き逃さなかった。その単語とは男ならば一度は憧れる「ご主人様」(誇張あり)という言葉。

「おい、ご主人様ってなんだご主人様って。廉也でいいよ」

さすがに廉也とて「ご主人様」(誇張あり!)と呼ばれるのは恥

ずかしい。

というより盛大に御勘弁願いたい事なのである。

「何を仰いますか。ご主人様は私と隷属の契約を交わしたのですよ。いわば私のあるべき主は廉也様なのです！なので、御主人様と言わせていただきます！」

「え、あれそういう契約だったの！？」

「似たようなもんです！」

「……なら、その御主人様からの命令だ。廉也と呼べ」

「むう……分かりました。では廉也様と呼ばせていただきます」

まさしく渋々といった感じのシエリルだったが、廉也自身、様もとってほしいというのが切実な願いなのだ。

しかし、シエリルの態度を見るとそれは不可能に近い事なので廉也は諦めることにした。

「あ……申し訳ありません。話しがずれてしまいましたね。それで廉也様が魔神になるためにする事はただ一つです。

それは……天界の最上神と魔界の魔王を倒して二つの異世界を束ねる事です」

この時廉也の顔を言葉に例えるのならばまさしく啞然と言った感じだろう。

「でも、御心配には及びません。私と先ほど交わした契約で廉也様は永遠に等しい時を生きたようになりますから時間はさほど問題ではありません。さらに、力も普段より格段に上がっているはずです。先ほども申しましたがいきなり最高神や魔王には敵いませんが今の廉也様ならば天界ならば中級神、もしくは上級神と同等、魔

界ならば2級、3級悪魔ならば互角に渡り合えます。」

「……と言う事はつまり、俺はもう人間ではないという事？」
寝耳に水とはまさしくこのこと。

「人間など最早完全に超越しています。元々あの契約はその器がしつかりしていなければ簡単に溢れてしまうのです。溢れたら最後、その人間は消滅します」

（そんな物騒なものを俺に契約させたんかい！！てかもう俺人間じゃないのかよ！）

などとは言えず心の中で声高らかに叫んだのは世も非情と言う事か。
「はぁ……もういいや。聞きたいことは山ほどあるけどそれは後から聞くことにする。とりあえず家帰って寝たい……」

「ああ、待って下さい。廉也様！せめてこれだけは言わせて下さい！」

そう言われて廉也は渋々後ろを振り返ると窓から差し込む月明かりがシェリルをそっと照らし腰まである綺麗な銀髪が光り輝やいて見えるというなんと神秘的な絵になっていた。

「私は、今、支配者様にも天界にも魔界にも人間界にも属しておりません。ただ一人廉也様についていきます。例えこの先が地獄であろうともずっとお付き致します」

そしてシェリルはまるで天使のような……いや、天使ですらも想像を絶するような微笑みで俺に笑いかけた。

それに答えるように廉也も口を開く。

「ああ、これからずっと（……）よろしく頼む」

そして廉也はシェリルに向かって手を差し出す。

最初はシェリルも困惑していたがその意味を理解したのか躊躇いも

なく手を握る。

「はい！こちらこそ、これからもずっと）．．．）よろしく願います！」

時間は廉也達が去って数分、^{みのる}実の部屋には不気味な笑い声が響いていた。

「ふふふっ、そうか。そうだったのか．．．くくくっ、やっと見つけたぞ！」

^{みのる}実は天高く拳を突き上げるとさらに思いを爆発させる。

「さあ！やっと見つけた！チョココロネの食べ方を！！．．．．．
ぐう」

「なあ、シェリル」

夜の帰り道

廉也とシェリルの二人を照らすのは月明かりのみ
廉也はシェリルを視界に捉えながら問いかける。

「なんでしょうか、廉也様」

「俺とお前の存在を今現在知ってるヤツっているのか？」

「いませんね。あの部屋に倒れていた殿方以外は見られたり勘づかれた覚えはありません」

「そうか、ならこれからずっと隠れてもいいという事だな？」

「少しばかり怒られるのかな？と廉也は思ったがシェリルは意外と表情を崩さずに淡々と告げた。

「私としては別に構いません。ですが、廉也様の力はそこらへんの人間と比べると蟻と核ミサイルほどの違いがあります。人間の目は欺けても魔族や神、天使の目を欺く事は不可能です。よって隠れるのは構いませんがすぐ見つかると思いますよ？」

その死刑宣言みたいな言葉に思いつきり項垂れる。

「そうか、隠れるのは無駄か……んー、もう何がなんだか分からん」

「大丈夫ですよ。基本人間界は不可侵ですから、下手に襲ってくる敵はいません。ゆっくり強くなりましょう」

「うん、そうだな」

（とりあえず本気で頭痛いから早く家帰って寝よ……）

第二話異世界情勢と魔神の手引き！（後書き）

廉也くんすごくお疲れモードです。

次回予告

彼奴がでてきます。

第三話夏休みと奴と裸の女王様！

チュン、チュン

窓から差し込む気持ちのいい朝日が廉也を起こす。

「う．．．ん。くー、よく寝た」

ググーと背伸びをしてふと自分が何も服を着ていない事に気付く。

「あれ、なんで裸なんだ．．．？まあ、いつか？」

フンフフン♪と鼻歌交じりにベットからおりようと腕に力を入れると手の方から

ムニユ、ムニユと

なんとも心地よい触り感触が帰って来た。

さらに（というか無意識に）手に力を込める。

ムニユムニユムニユムニユムニユムニユ．．．．．

「ああ．．んん」

さらに布団の下からくぐもった卑らしい声が響いてくる。

「．．．．．ああああああ！！！！！！！！！！」

ヘンな奇声をあげながら急いでベッドを下りて神速の速さで服を着る。

「あ、廉也様おはようございます」

シエリルは目をゴシゴシしながらぺこりと頭を下げた挨拶する。

「あれ、私なんで裸なんでしょう。まさかシちゃいましたか？」

「俺が聞きたいわ！ていうか胸隠せ！服も着ろ！」

シェリルはあくまでマイペースにベットから降り服を着る。

「はあ、まさか46億年守り続けてきた貞操をここでなくすとは思いませんでした」

「いや、シてないから！絶対シてない！」

廉也は全力でそのアレを否定した。

シェリルはこの状況を明らかに楽しみジワジワと廉也を追い込んでいった。

閑話休題

それから数十分そこには汗だく特盛りの廉也の姿があった。

「すまん、俺が悪かった」

「いえ、そんな謝られても困ります。ほんの冗談ですから」

クスクスと笑うシェリルを見て廉也は苦虫を噛み潰した顔になる。

「ですが、もしやるとき優しくお願いしますね♪」

「いや、絶対やらん！」

廉也は一つため息つくと朝ごはんを作り始めた。

今日の朝食は手っ取り早くパンのトーストとスクランブルエッグとウィンナーを焼いたやつだ。

廉也は料理は出来るかと言ったら苦手ではないものの、かと言って得意という訳でもない。

所詮当たり障りのない料理を作れるぐらいというぐらいなのだ。だがコレは意外とシェリルには好評だったらしく

「料理なんて知識では知っていましたが実際食べてみると全然違いますね！」

という反応である。

この気休め料理でこの反応なら本格的な料理を食べた時はどうなるんだろうと廉也はこれからの食事の時間が楽しみになった。

「ああ、これよりも100倍くらいおいしい料理は世の中に五万とあるぞ」

それにシエリルは心底驚いたという顔をして

「そうなんですか、世界は広いですねー」

と自分が一番世界を見てきたくせにそんなことを呑気に言ってしまうから思わず廉也は笑ってしまった。

それにシエリルは特に気にとめた様子もなく話題は廉也の事に移る。

「廉也様はご両親はいらっしゃらないんですか？」

「ああ、うちの親は去年交通事故で亡くなったよ。いるのは妹だけさ」

シエリルは廉也の親が交通事故で亡くなった事を知ると明らかにシユンと落ち込んでいた。

「すみません、変な事聞いてしまつて……」

「いや、大丈夫さ。かわいい妹も生きている事だしね」

さつきまで落ち込みはどこへやらシエリルは廉也の妹の事に興味津々であつた。

「廉也様の妹様はどんな方なのですか？」

「うーん、かわいい事にはかわいいんだけどな。どうも性格に一難あるんだよ。今はまだ田舎叔母の家に預けられてるよ。いつも夏休みの時はこっちに泊まりに来るんだけど今年は遅いな」

そう言つて廉也はカレンダーを見る。

今はまだ8月の頭だが本来の妹なら夏休みが始まつた直後に来るのだ。

だが、今はそれが幸いした。

廉也は目の前を見る。

そこには銀髪美少女のシェリルが座っている。

先ほど裸……を見て気付いたのだがどうやらシェリルは着やせるタイプらしく脱いだらその凶器にもなるダイナマイトボディに変身するのでどう考えても廉也の理性は持たない。

さつきは理性、煩惱云々より羞恥が勝ったので良かった？が次からはそうはいかない。

そういう意味で妹が来てないことはまだ幸いと見れた。

（しかし、我が妹の性格を考えると女性がいること事態問題だ……）これは早急に手を打たねばな……と考えている所に

「廉也様の妹様ですか。会うのが楽しみです」

「そ、そうだな」

「ああ、お兄様、お兄様、お兄様。はやく、早く、速く、逢いたい……」

ゾクッ！

体中に駆け巡る悪寒。
冷や汗が止まらない。

「っ！そうか、そろそろか……」

廉也は自分の死期はそう遠くないと悟った。

「？どうしたんですか、廉也様」

「いや、なんでもない。こつちの話だ。それにしてもシェリル暇だな」

少しでも気を紛らわそうとシェリルに話題を振る。

「そうですね、あ、そういえば廉也様は宿題というものはしないのですか？良ければ手伝いますか？」

「ふふっ、魅力的なお誘いだが、残念ながら宿題は7月に終わらずタイプなんだよ。なんか嫌な事は気になって仕方がない性格だからね。そして8月はたっぷり遊ぶ！！」

思いつきのガッツポーズ。

「廉也様は優秀なんですね！それでは、異世界の話をしましょうか」

「あゝ、そのことなんだが妹が来たらその話はくれぐれもしないでくれよ？」

「はい、心得ています」

シェリルは笑顔で頷いた。

その笑顔も世の男性を魅了するほどのトップクラスの笑顔だったが、一瞬クラツときたのは秘密。

「まず、天界の事です。最高神アルゼウスを筆頭に上級神50・中級神200、下級神559という勢力となっており、天使長ラファエルなど天使でも神に匹敵するクラスが存在します。いえ、天使の方がそこらへんの神よりも賢く強いのかもしえませんが。特に先ほど上げた天使長ラファエルは要注意です。」

「次に魔界ですがこちらは魔王ルシファーを中心に王族とよばれる魔族達が存在しその下に悪魔・魔物となりますが、王族の間でも階

級は悪魔として用いられます。特級悪魔、一級悪魔、二級悪魔、三級悪魔、四級悪魔……十級悪魔までが存在します。また、天界とは違い絶対実力主義となっており、もちろん魔王を倒したらその倒したものが魔王となり、王族を倒したら悪魔は王族となります。魔界に反逆という言葉はありません。なぜなら日常が下剋上だからです。力なき者は力強き者に従い能力ある者が強くなる権限がある。魔界はそういう所です。一旦話は終わりますが何か質問はありますか？」

「なあ、その魔王とか最高神とかいう奴らはどんな力を持っているんだ？」

「たった一人で人間界を滅ぼすほどの力を持っています。さらに運が悪いことに魔界、天界近頃争いごとをしてなかったので戦力を過去最高と言われるまで蓄えております」

その言葉を聞いた瞬間、口に含んでいたお茶を思わず吹き出してしまいそうになった。

「ゴホツゴホツ！はー、そんなに勝てるのか？今更ながら不安になってきたんだが……」

「現状では不可能ですね。訓練をしようにもここらへんでは大騒ぎになりますからどうしようもできません。時間だけはあるんですけどねえ」

「訓練とかヤダ。めんどいし」

「っ！さすがにそういうわけにはいきません！廉也様は——
そう言いかけた時
ピンポン

「兄さん、楓が参りました」

奇しくも地獄行きのゴングが鳴り響いたのであった。

第三話夏休みと奴と裸の女王様！（後書き）

くくくつ！

妹をこの話で組み込むつもりが、次話に持ち越すな

第四話妹が来た！誤解が解けない、みんなでご飯を食べよう！（前）

「兄さん、楓が参りました」

その声を聞いた瞬間、悪寒を通り越して廉也の体中に戦慄が走る。

「っ！シエリル、今から何言っても話し合わせてくれ。いいな？」

「？はい、わかりました」

シエリルは分かっているようで分かってないような表情で頷いた。

「兄さん？いるんですか？」

「いるいる、今いくから」

廉也は急いで玄関に向かい鍵を開ける。

「もう、兄さん。いないかと思いましたが」

そう言いながらドアを開けた女性

シエリルほどではないものの長い艶やかな黒髪に整った顔立ち、廉也とは違い目はパッチリ大きく、それでいて凜としてしっかりとした顔立ちの美女

神崎楓それが彼女の名

「ああ、ごめん。ちょっと取り込んでいてな」

そう言いながら今世紀最大の難関、シエリルが待っているリビングへと歩き始める。

「ふうん、そうなんですか・・・兄さんどうしたんですか？早く開けてください」

楓はリビングにつながる扉の目の前で立ち止まっている廉也に疑問符を浮かべる。

「お、おう。今開ける」

廉也は深呼吸すると思い切って扉を開けた。

「あ、廉也様御帰りなさいませ。そちらは妹様ですか！とってもお綺麗ですね」

チラリと廉也は隣の楓を見やる。

視界の先では目を見開いたまま頭から足の先にかけて石化している楓の姿があつた。

そして首だけをギギツ、と廉也の方に動かし満面の笑み（額に青筋ができてピクピクしている）を向けながら

「に・い・さ・ん？誰ですか？この女性は？」

「先に言っておく。誤解だ。あと目が笑ってないぞ・・・」

「何が、誤解なんですか！こんな女連れ込んで！しかも外国人ですし！」

「はい、いつもお兄さんにはお世話になっております。シェリルと申します」

「ちよつ！お前は黙っておけ！！」

「ふ、不潔です！！見損ないました兄さん！」

キツ！と廉也を睨みつけると出て行こうとする楓を廉也は慌てて手を掴んで引きとめる。

「だから、誤解だつて楓。シェリルは親戚なんだ」

手を振りほどいて逃げようとしていた楓の動きがピタツ！と止まる。

「・・・外国人の親戚がいるとは聞いてませんが？」

それに言葉を詰まらせそうになるが冷静を保つ。

「ああ、俺も驚いたからな。だが、うちの親は世界各国を移動していたんだ。別に不思議じゃないだろう？それに彼女の両親からもよく頼むつて言われたしな」

「・・・本当ですか？兄さん」

涙目の目をウルウルさせながら楓が問いかける。

「ああ、ホントだ。な？シエリル」

「はい、本当でございます」

「そ、そう。なんだあ。ごめんなさい。取り乱してしまつて」

「いや、いいんだ。俺も先に言つておけばこんな事にはならなかつたんだしな」

そう言つて廉也は楓の頭をそつと優しく撫でる。

それに気持ちよさそうに目を細める楓。

遠くで見つめていたシエリルは微笑ましそうに見つめているのであった。

「さつきはごめんなさい。シエリルさん」

楓はシエリルに向かい頭を下げる。

「いえ、滅相もございませぬ。私のほうこそ急に押しかけてしまい廉也様に迷惑をかけましたから」

チラツと廉也のほうをみてにつこりと笑うシエリルに廉也はバツの悪そうな顔をする。

「う、うん。まあそういう事だ。てか、楓。今回は来るの随分と遅かつたな」

すると凜としていた少女の表情はみるみる気まずそうなに表情に変化した。

「あー、はい。今回は随分と叔父さんに止められてしまつて……」

廉也はため息一つ吐くと長らく見ていない叔父の事を思い出す。

叔父、その響きに嫌な事しか思いつかない。

結構昔、両親が海外へ出向いて家を空ける事になった時、当時桁外れの手腕で膨大な系列チェーン店を持っていた叔父、狭間健次郎に

楓と同じくお世話になったことがある。

最初は二人ともとても可愛がってくれたんだが時が経つにつれ叔父は楓しか可愛がらなくなった。

自分としてはそれでも別に構わなかった。

元々自由奔放な性格だった廉也は自分のこの性格も影響しているのだろうと考え特に気にも留めなかったが、中学1年の頃急に叔父から出ていけと言われ着の身着のまま外に放り出された。

しかし、叔母はいまだにとても優しく過去に困っていた俺を見て色々と工面してくれた。

そして、親が亡くなった今何故か両親の全財産引き取り手となった廉也はこれを気に晴れて独り立ちとなったのだ。

だが、実際叔父を恨んでいるか？と言われたら迷わずNOと答えるだろう。

叔父にお世話になったことには違いないし、楓は今でもお世話になっているのだ。

しかも、楓の場合はとてもかわいがってくれているので感謝してるくらいだ。

「ははっ、大変だったな。楓。何も、毎年来なくてもいいんだぞ？」
「そんな！私は兄さん逢う事を楽しみにしているんです！」

途中あうという単語に違和感を感じたが廉也は特に気にとめないようにした。

「そうか、まあそこまで言うなら俺も大歓迎だよ。愛する妹のためだ。困ったことがあるなら何でも相談しろよ？」

「そんな、愛してるなんて・・・」
クネクネと恥ずかしそうにしている楓を余所にシェリルに声をかける。

「なあ、シェリル。ちょっと、楓と話しといてくれないか？俺は昼ごはん夕食の買い出しに行ってくる」

「分かりました。行つてらっしゃいませ、廉也様」
その声にハツとした楓が異を唱える。

「いえ！兄さん。私も一緒に行きます！」

「うーん、そう言つてもおもしろいことないぞ？」

「絶対、一緒に行きます」

廉也は困つたように視線を空中に彷徨わせる。

やがて、ピタツとシェリルに視線を固定すると

「なあ、シェリルお前から何か——」

「廉也様、私もその買い出しとやらに行きたいです」

全てを言い終える前に言葉を重ねてきたシェリルに思わず呆然と立ち尽くす。

そして廉也は悟つた。

ここは敵陣真つ只中だと……

食材の買い出しに出かけて数分、廉也一向は近くのスーパー付近にある中華料理店に来ていた。

あの後、結局二人に押し込まれ同行を許してしまった。

そして、どうせみんなで出かけるなら外で済ませようという事になり現在、あまり人気は無いが、料理の腕は天下一品の中華料理店の店内に入り四人掛けの席に座つた。

しかし……よくよく考えてみると昔から楓は一度言つたら聞かない性格だった事を思いだし思わず苦笑してしまった。

そういう廉也もなんだかって根底は楓と瓜二つなのだが、このことに気付くのは永遠にないことだろう。

「おう、いらっしやい！つておおー！廉也、ようやくお前にも春が来たか・・・しかもこんな美人二人組を・・・おじちゃんうらやましいぜ」

あきらかに気性のいいおやじ、秋元俊造はオイオイと泣きまねをしながらこちらをチラチラとこちらを覗き込んで楽しんでいる。

「おいコラ、おやじ。勘違いすんな。右は妹、そして左は親戚だよ」
「はじめまして、廉也の妹の楓と言います。いつも兄がお世話になってます」

「はじめまして、シェリルと言います」

「ういうい、はじめまして！秋元俊造だ！おやじと呼んでくれていいぜ。ちなみに独身だ」

そして、抜け目ない俊造は握手を求め、手を伸ばそうとしたその瞬間、後ろからすさまじい殺気が飛んできた。

思わず俊造が「ヤバッ！」と呟く。

「あ・ん・た？私というものがありませんが何が独身だって？ヘラヘラしやがって・・・」

ビクッ！と体を震わせて俊造は後ろを恐る恐る見ると自分の自慢の妻、秋元麗美が仁王立ちで殺気を振りまいていた。

彼女自身も気が強い顔立ちの美人なので中々こちら辺では人気が高いのだ。

さすがに、楓とシェリルにはさすがに敵わないが・・・

ひとしきり夫を殴り終えた麗美はこちらに振り返りニンマリ意地悪気な微笑みをむけ

「はあ、それにしても春ねえ……」

「だから、違うつて！」

最後までおちよくられた廉也であつた。

疲れ切つた表情の廉也の目の前にやつと料理が運ばれてきた。

廉也はカレー、楓はオムライス、シェリルは四川風中華炒めとなっている。

「……なあ、その兄妹。おまえら、見た目は似てないけど中身はそっくりだな……」
シェリルちゃんだけがまともだよ」

「ああ、俺の妹だからな。だが、うまい。特にこの絶妙なスパイスがなんともいえん」

「ええ、そうですね。オムライスもこのフワとろの卵がデミグラスソースとよく合います」

そうここは中華料理店とかいってるが基本何でも作る。

しかも、中華は言うに及ばず洋食、和食どれをとつても天下一品なのだ。

なんでこんなにうまく作れるんだ？とこの前聞いたが、「なんか作れたから」との回答が返つてきたので腹部に一発お見舞いしてやつた。

こんなにおいしいもの「なんか作れた」で出来たら世の中も料理人は何をしているの？という話だ。

「あい、どうも。てか、シェリルちゃん良い食いつぶりだな」
シェリルの前に築かれ始めた料理の皿の数々

思わずドン引きしそうなぐらい料理を食べている。

「ふえ、そうですか？でも、とってもおいしいですよ。私こんなおいしいの初めて食べました」

まあ、そうだろうと廉也は思う。

あの朝食簡単料理で感動していたのだ。

ここの料理を食べてしまえばそれこそ癖になるだろう。

実は二人をここに連れてきたのはそういう狙いもあった。

シェリルのこの幸せそうな顔、それだけでもお腹いっぱいになりそうだった。

「くうっ！おじちゃん感動した！いくらでも食べな！今日はサービスだ！いいだろ？麗美」

「もう、仕方ないね。あんたは」

「兄さん？どこ見てるんですか？」

シェリルの幸せそうな顔を見ていると楓が睨みつけるようにこちらをのぞきこんできた。

「いや、別に。ただ、シェリルは良く食べるなあって」

「ふうん、兄さんは良く食べる女性の方が好きですか？」

「いや、だからなんでそんな話になる……」

あの後さらに何品か食べたシェリルの目の前には山のように築かれた皿があった。

もちろん、サービスとは言われたがさすがに悪いと思ったのでお金は払った。

（もちろん、かなり割引されたが……）

それにしても、シェリルがあそこまで食べるのは予想外であった。

第四話妹が来た！誤解が解けない、みんなでご飯を食べよう！（前）（後書き）

ごめんね？本当はもう少し長くしようと思ったんだよ？

そしたらね、眠くなったの。

僕ね、もういいかな・・・っておもったの。

あと今回自信ありません！！

第五話妹が来た！誤解が解けない、みんなでご飯を食べよう！（後）

スーパー店内

廉也が歩きながら二人に問いかけた。

「さてと、二人とも何か食べたいものないか？」

「辛い食べ物がいいです」

横合いから即答する楓

「真夏に辛い物か。ははっ、楓らしいな。いいぞ、シェリルもいいか？」

「はい、私はなんでも大丈夫です」

そう。この妹、楓は辛い物が大大好物なのだ。

それこそ、年がら年中食べている。

朝の食卓には毎日必ずキムチが出て、さらに一日なにか辛い物食べないと禁断症状？が出るほどに。

「うーん、献立はなにがいいかな。まっ、適当に考えるとするか」
廉也はそう考え決断すると早速食材を買い物がこに食材を入れ始めた。

「あら、廉也くん。こんな所で会うなんて奇遇ね」

聞き覚えのある声音。

思わず顔をあげるとそこには、ふわふわの天然パーマのショートヘア、おっとりとした優しい目、背は160cmぐらいで、おっとりとした印象だがその実、中身はかなりしっかりしている。

廉也が入学した学園の先輩三鷹美鈴がニコニコしながらこちらを見つめていた。

「あ、先輩。お久しぶりです。奇遇ですね」

「兄さん？こちらの方は？」

楓が説明を求めるような目をこちらにむけている。

「ああ、こちら俺が通っている明桜学園生徒会の先輩三鷹美鈴先輩だ」

「あら、こちら妹さん？とてもかわいいわね。彼女かと思ってちょっと嫉妬しちゃったじゃない」

「こんにちは、いつも兄がお世話になっています」

楓は少し頬を赤く染め洗礼された挨拶を交わす。

「うん、礼儀正しい。廉也君とは大違いね。見た目も中身も」

「それどういう意味ですか・・・」

「さあてね。言葉のまんまよ」

廉也のジト目を飄々と交わす美鈴。

「お二人は仲がいいんですね」

そんな二人を羨ましそうに見つめていた楓がこれまた羨ましそうにつぶやく。

「そう？そうね。だって廉也君は私のお気に入りだもの。生徒会に引き入れたのも私だし」

「ええ、あの時は驚きました。会って二言三つでいきなり「生徒会へ入れ」でしたもん」

そう意外かもしれないが、廉也は一応生徒会に入っているのだ。しかも、会って二言三つ交わしただけの相手に無理やり連行。

最初は嫌々だったが今では完全に馴染んでしまい結構楽しんでしまっている。

他の学校ではあまりそういう事は無いというのが明桜学園ではそんなこと日常茶飯事だ。

生徒会は基本会長以外は自由に役員が選んでいいという事になって

いる。

もちろん両者任意の場合のみだが……

そこでふとシェリルがいないことに廉也が気付く。

「あれ、楓。シェリル知らないか？」

「え？シェリルさんならそこに、ってあれ？いませんね」

色々な所に視線を巡らすがどうも近くにはいないようで見当たらない。

「トイレか何かかな？」

「兄さん、失礼ですよ！」

楓が思いつきり廉也の足を踏みつける。

「いつて！！ってあれ、そんな痛くないな」

「兄さん、いつからこんな頑丈になったんですか？」

心当たりがありすぎるので何とも言えない廉也

「あー、すみません先輩。もう一人紹介したかった親戚がいたんですが、何処かへ行ってしまったようで」

「そう？別にいいわよ。廉也君にも会えたことだし。今度は紹介してね、それじゃまたね」

バイバイと手を振る美鈴に苦笑しながら廉也は手を振り返す。

「……綺麗な方でしたね」

「んー？お前やシェリルには敵わないさ」

「……兄さんそれ意識して言ってるんですか？」

「ん？何が？」

「もういいです……」

そう言っているとツーンと余所へ向いてしまった楓はスーパーを出るまで一言も廉也と口を聞かなかった。

スーパーを出た時、それまで何処かへ姿を消していたシェリルはヒョッコリ姿を現した。

「シェリル何処行つてたんだ？」

「すみません、廉也様。後ほどお話します」

そう言つたきりシェリルも一切口を開かなくなつた。

そして廉也は思った。

（何このデジャブ・・・！）

数分後。あのままちよつと気まずい空気の中家へとたどりついた廉也達はそれまでの気まずい空気などどこかへ吹き飛び雑談に花を咲かせていた。

「シェリルさんは随分と日本語が堪能なんですね？」

「はい、子供のころからずっと日本に憧れていたものでしたから。おかげで随分と話せるようになりました」

「そうなんですか。日本は楽しいですか？」

「はい、とつても。毎日が驚きの連続です」

「それは良かったです。どうぞ楽しんでいてくださいね。あと、よろしければシェリルさんの故郷の話をしてくださいませんか？」

廉也は隅っこで完全除けもの扱いだったが、故郷と言う単語にぶるつと身を震わせた。

（シェリル、大丈夫か？）

だがこの廉也の心配は杞憂だったらしい

「いいですよ。私の故郷はニュージーランドの静かな町で・・・

・・・」

そこから並べられる数々の嘘八百

廉也も本当にそうなのではないか？と思ってしまっほ言葉巧みな話術。

おかげで楓もすっかり信じ込んでしまっていた。

（ていうか、なんかこの二人かなり仲良くなつてないか？）

隅っこにいた廉也は観察眼が鍛えられたのか知らないがあまり人に懐かない楓が珍しく懐いている。

いつも他人に接する楓は礼儀正しいというよりどこか冷めているのだ。

そして必要最低限話そうとしない。

それがどうだろうか。

シエリルと話している時は自分から積極的に話題を振っている。

（楓も成長したんだなあ）

しみじみと隅っこで感心していた。

いまだに口を聞いてくれなかったが………

あれから日も暮れ始め廉也はいそいそと夕飯の支度をし始めた。そこでふと思い出す。

「おーい、シエリル。お前料理できるよなー？」

「あ、はい。知識はあるので問題ないと思います」

そう言いながらシエリルは台所へと参入する。

「あれ、楓は料理しないんですか？」

「あー、楓は料理は出来ないんだ。なんか、絶望的にね」

天は二物を与えないとは誰の言葉だったか。

まさしくソレを具現化してるのが楓といえるだろう。

「す、すみません。出来ないんです………」

楓はソレに赤面で俯き気味に答える。

楓自身も料理ができないことを大きなコンプレックスとして抱いていた。

家庭科実習の時、皆に期待されるという重いプレッシャーの中、実は料理出来ませんと言えない自分がどれほど憎かったのか。

だが、そういう時はいつも友達が手伝ってくれているので幸い料理が出来ないというレッテルを貼られる事は避けている。

やはり持つべきものは友達と言う事か。

「というか、シェリルさんは料理が出来るなんてすごいですね」

「ええ、一応嗜む程度ですが……」

と言いながら野菜をすさまじい速さで切り分けている。

とても嗜む程度とは言わない。

実際廉也よりも早い。

ちなみに今回の料理はチゲ鍋

なんかもうメンドクサイなーと廉也が考えていたのもあるが一応シェリルが大食いという事が発覚したので鍋の方が楽かと結局、廉也のメンドクサイというのが根底にある。

あと、楓のためにいろんな野菜を混ぜたタコキムチを作る。

格段に好きという訳ではないのだが、なんだか楓が来たらコレを作るといのが習慣になってしまった。

一通り野菜と肉を切り終えたら（寸分の狂いもなくシェリルが切り終えた）大皿に乘せリビングの机へと運ぶ。

特製だし汁と香辛料を足したスープが沸騰し、その中へと色とりどりの野菜、豚肉、豆腐などを入れる。

「わあ、おいしいですね」

「ああ、そうだな。シェリルがいて助かったよ」

「いえ、こんなことでいいなら毎日やらせていただきます」

「そうか？それは助かる」

そんな他愛もない会話

「兄さんのタコキムチもおいしいですよ」

「そ、そうか。シェリルには劣るがな」

たった一日で追い抜かれた感ハショックを隠してくれない。

「いえ！そんな事ないです！確かにシェリルさんもすごいと思いますが……」

そんなシェリルはというと鍋やその他料理にガッツいて至福のひと時を過ごしていた。

一通り料理も食べ終え再び雑談に戻ろうかという頃

「すみません。廉也様少しお話があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ん？別に構わんが。楓少し待っていてくれるか？」

「あ、はい。私は大丈夫です」

楓をリビングへと残し、二人は玄関を越え外へと出る。

「で、話ってなんだ？」

シェリルのただならぬ雰囲気ハ廉也も自然と真剣な面持ちになる。

「廉也様、落ち着いて聞いてください。あのスーパーで出会った女性がいまいたよね？」

「ああ、美鈴先輩か。ていうか、なんだ。お前あの時いたのか」

「はい、見えないところからみておりましたから。単刀直入に申し上げます」

それから一度口を閉じ、再びゆっくりと言ハ聞かせるように口を開く。

「その美鈴と言う方。天使です」

第五話妹が来た！誤解が解けない、みんなでご飯を食べよう！（後）（後書き）

この後、運命が急速に加速する・・・かも

ここで緊急報告

受験のためしなく更新が滞るかもしれません。

もし、その時は生温かく見守ってくれと幸いです。

第六話漆黒の翼と純白の翼

「弱い！弱すぎる！！」

漆黒の重装備に身を包んだ男はそう叫んだ。

髪は銀髪で目は溶岩を連想させるように赤黒い。

顔は凜々しく十中八九の女性が美少年と答えるだろう。

しかし、その体の鎧は血で赤く染まり、顔も所々に血が付いている。

「くははは！俺を殺したければ神でも連れてこい」

そう言つて純白の翼を生やした女性を、炎を纏った剣で切りつける。刹那、そのまま女性を真つ二つすると思われた炎剣は不可視の風によつて阻まれる。

「っ！天使の加護か。しかし、ここまで強いのは初めて見たな」

初めて男に興味の色が滲んだ。

「早く死になさい！汚物が！！」

顔に似合わず汚い言葉を吐く天使は翼を広げ男に肉薄する。

「面白い、受けて立とう」

天使の剣が光り輝き、その場を侵食する。

それに対抗するかのように男の手に持つ炎剣もより一層勢いを増す。二つの魔剣が相対し周りの大地、空間をも巻き込む。

グガガガガガガ！！ズザアアア！

耳を切り裂くような鋭い音。

さらに二つの魔剣は勢いを増す。

「てめえ、本当に天使か？」

男の疑問に天使は疑問を持つて答える。

「あなたこそ、本当に悪魔ですか？」

次第に二つの剣の勢いは薄れ再び二人に間合いが開く。

「ucci、埒が明かねえな」

悪魔はそう言つて天使から背を向ける。

「ちよつと！何処行くのよ！？」

「ああ？興醒めだ。どうせ終わんねえしな。お前も帰れ」

「ちよつと待つ——！！」

「ああ、言い忘れてた。俺の名前はガルド。お前は？」

突然悪魔は振り向いたかと思えばこれまた突然、名前を聞く。

「あなたに答える名前などない・・・と言いたいところですが名乗られたからには名乗らなければなりませんね。私の名はラファエルです」

「なるほどな。ならその強さも納得だ。一級悪魔の俺とともに殺り合う天使など誰かと思えば天使長ラファエル様とは恐れ入ったぜ。楽しかったよ。じゃあ、またな」

ガルドは一方的にそう告げるとさっさと消えてしまった。

「・・・・・・・・」

後に残るは先ほど戦つた時出来たクレーターと悪魔と天使の死体少々。

目を周りに向ければ広い不格好な大地のみ

ここは魔界と天界のちよつと狭間にある空間

キルゾーン
戦場

ここでは昼夜問わず小規模衝突が繰り返されている。
もちろん魔界と天界の二つのみの衝突。

一人周りに誰もいない中で（いることにはいるが、ほとんど死人）
ラファエルは心の中で怒鳴りつけていた。

（何なのよ！！本当にむかつくわ！あのガルドとかいう悪魔もそうだし、神も神よ！下級神、中級神如きが偉そうに！！私は最高神様直属の天使長よ！何さまのつもりよアイツ等！）

ラファエルは行き場のない怒りを爆発させるかのように何も大地へと向けた。

この日戦場には轟音とともに無数のクレーターが出来たという。

その時ガルドは一人魔界の総本部へと帰っていた。

「おい、ガルドお前今まで何をしていた？」

同僚の一級悪魔リゼルが厳しい目つきでガルドを射抜く。

「ふふつ、ラファエルと戦った」

「・・・・あの天使長ラファエルか？」

リゼルは目を見開く。

「ああ、中々強かった。この俺が仕留めきれない、というよりこの俺と同等だからな。噂は本当だったよ。神にも匹敵する強さ、最高神からもらったと思われる神器光剣デュルクセル」

神器とは元々神にしか持てない代物だ。

それこそが神の証しと言ってもいい。

その神の称号にも等しい神器を一介の天使になど授けるなど絶対にあつてはならない事なのだ。

しかし、何事にも例外は存在する。

最高神が認めた天使だけはその神器を授けられるのだ。

だが、天界が出来て数千億年。天使で神器を授けられたものなど片手で数えられる程度しか存在しない。

それ故に今回のラファエルが神器を授けられたというのは魔界ではまことしやかに囁かれていた噂だったのだが今回ガルドが戦ったこ

とにより皮肉にもそれが証明されてしまったのだ。

「はあ、前々からバカかと思っていたが、まさかここまでだったとはな。もう俺は知らんぞ。それよりも魔王様が御呼びだ。いくぞ」

リゼルドは言い切る前に踵を返し、魔王が待つ城へと急ぐ。

ガルドはというと先ほどの戦闘が後を引いているのだろう。

いまだに顔は緩み満足気な雰囲気醸していた。

それにリゼルドは苦笑一つで表情を引き締めた。

途中会った侍従悪魔に案内され見慣れぬ会議室へと招かれた。

「魔王様、ガルド様とリゼルド様がいらっしゃいました」

侍従悪魔が先行して口を開く。

「うむ、入れ」

ゴゴゴゴッ

見た目に違わず重厚そうな音が鳴り響く。

「どうぞ」

そう言うのと先ほどまで先行していた侍従悪魔は一步下がり道を空ける。

「失礼します」

一步、その部屋へと入った瞬間空気が一変する。

今まで感じた事のないプレッシャー

思わず立ちすくみ脂汗が額を支配する。

「どうした？入らないのか？」

それともこのプレッシャーで入れないのか、リゼルドにはそうとしか聞こえなかった。

それもその通りだろう。

何せここにいる悪魔達は皆、この国を支配する10人しかいない特級悪魔達。

さすがに全員とまではいかないが、それでも8人と異例ともいえる多さだ。

その中でもさらに群を抜いて存在感を示す男。

丸い円卓の上座に堂々と座り腕を組んでリゼル達を見つめている。

魔王、ルシファー

リゼルの頭の中に一つ単語がポカンと浮かんだ。

歴代最強の魔王と呼ばれ今の特級悪魔全員でかかっても倒しきれなかったという伝説を持つ御方。

リゼルとガルドは自分を奮い立たせ一歩また一歩と重い足取りで進む。

そしてやっと指定された席へとたどり着くのに成功する。

「ふふふ、ようこそ。特級悪魔へ」

リゼルとガルドは最初言われたことが理解できなかった。

思わず「何言ってるの、あんた」と言いそうになったほどである。

「いや、何。最近お前らが強くなったと感じてな。この際特級悪魔に引き上げようかと思うんだが、どうだ？」

しばらく呆然としてたりゼルだがすぐさま頭をフル回転させる。

「いえ、とてもうれしい御話でございますが、まだ私は未熟者。そんな者が特級悪魔となってしまうては魔界が乱れてしまいます」

「ふむ、お前は？」

そう言っつてルシファーは先ほどから押し黙っているガルドへと視線を向ける。

「自分も同じ考えです」

しつかりと決意のこもった目と言動を見てルシファーは頷く。

「分かった。今回お前達の特級悪魔にする件は先送りするでしょう。お前らが強くなったと思った時また来い」

「申し訳ございません。魔王陛下。せつかくの御誘いを」

「くつくつく。いや、いいさ。實際称号なんてどうでもいいからな。いい称号を持っていたてもいざという時、使いものにならないければ意味がない。それよりもこれからが本題だ。そのために上級悪魔を取り仕切るお前らと呼んだ」

「「？」」

二人の頭の上のクエスチョンマークがありありと浮かぶ。

「私はね。天界と戦争をしようかと思う。今度こそ、存亡を賭けた戦いをね」

特級悪魔達は皆その事を理解していたようで動揺は少ない。

しかし、指揮官とはいえ一介の上級悪魔に過ぎない二人は目を見開いたまま硬直していた。

「驚くのも無理はない。しかし、そろそろ部下達の機嫌も悪くなってきたな。今まさに一触即発なんだよ」

「魔王陛下。それはまだ早計かと思われます」

魔王に対して口応えとは何事かと皆一斉に口を開いていたガルドへと視線を集中させる。

「続ける」

ルシファーにガルドは負けじと頷く。

「私は先ほど、天使長ラファエルと戦ってまいりました。そして自分の実力の無さを痛感致しました。彼天使ラファエルは上級神にも負けず劣らずの強さだと聞きます。しかしそんな彼女と同等かそれ以上の力を持つ者達が50人以上いるのです」

ガルドは一旦そこで言葉を区切る。

「ほう。あのラファエルとな。それで貴様はどうするべきだと思う？」

「はっ！私はもう少し魔族や魔物の練努をあげるべきかと思います」
魔王は一旦薄く目を閉じる。

リゼルはガルドがここまで考えているとは思わず狐につままれたように硬直している。

「ふっ、いいだろう！お前の意思くみ取った。もう下がってよいぞ」
二人はそそくさと礼をして急いで外へと出る。

「はあ……」

今年最大級のため息

「お前、なんてこと言ってるんだよ！！」

リゼルはあの時呆然としていて気付かなかったが良くよく考えると魔王の口答えするなどあの場で殺されてもおかしくないことなのだ。

そして何気にあれじゃあ「魔王は役立たずです」と言ってるようなものだ。

「いや、すまん。俺も途中から記憶がない」

「アホ！バカ！間抜け！」

数々の罵りの暴言を吐きまくったりリゼルは再びため息一つした。

「しかし、お前があとここまで考えていたなんて思わなかったぞ。少し見なおした」

「ああ、俺もラファエルと戦わなければあんな事言わなかっただろう。それほど強かったからな」

「……そんなものか？」

「ああ、そんなものだ」

「魔王陛下。では天界侵攻は中止という方向でいいのですね？」

胸を強調するような露出した衣装を身にまとい男を惑わすような顔をした女性が魔王に向かい確認を取る。

「ああ、それで構わん。皆もそれでいいな？」

特級悪魔皆一様に頷く。

ここに反対する者は誰一人としていない。

みんな一度、この魔王ルシファーに叩きのめされているからだ。伝説は案外本当の事だったらしい。

「うし、それじゃあ次の報告」

「はい、魔王陛下。たった今。支配者に選ばれし者を人間界で発見したとの報告が上がりました」

その報告に百戦錬磨の悪魔達が珍しくざわめいている。ルシファーも興味深そうにその報告に耳を傾けていた。

そして、一言

「くはっははは。面白い！！俺が出向いてやろっ」

第六話漆黒の翼と純白の翼（後書き）

ハイハイー！！

え？受験のためにやめたんじゃないのかって？
知ったことか！！

第七話敵の敵はまさかの味方（前書き）

今回は長いぜ！

第七話敵の敵はまさかの味方

なあ、実よ。^{みのる}憂鬱だ……」

「いや、しらんし」

「なあ、実よ。^{みのる}どうしたらいいと思う？」

「いや、だからしらんって」

「なあ、ミノル……」

「だから何がよ！！行つとくけどお前家に来てからそれしか言っていないからな！」

「あれ、そうだっただけか？」

ベットで先ほどからだらしく寝ている廉也がひょいっと体を起こす。

ここは廉也の家では無く廉也の家から数十分歩いた距離にある実の家だ。

何故ここにいるか、というのは話せば長くなる話だが長くなるので色々省略することにする。

端的言えば廉也は昨日の事がショックすぎて廉也は実の家に上がり込んで来たのだ。

ちなみに実も一人暮らしをしている。

何故か？と聞けば「なんとなく」という答えが必ず返ってくる。

「ああ、そうだとも。いい加減、話したらどうだ？」

「エー、実に話すとかマジあり得ないんですけど」

「お前はどこの女子高生だ……」

廉也はいつものように冗談を飛ばしているが、いつもの切れがない。それが、実には痛いほど分かった。

（コイツは、廉也は。いったい何に悩んでいるんだろう）

できれば力になりたい、実の脳をさつきからその考えが掠める。
朝、珍しくインターホンを鳴らして入ってきた廉也はまさしく抜け殻だった。

そのまま無言のまま実が先ほどまで入っていた布団へと潜り込む。
いつもなら突っ込んでいる筈。

しかし、今日の廉也は今まで見たこともない姿だった。
それほど彼にショックを与えた人物とはだれなのか？

覚えがあるのは銀髪のシェリルとかいう女性

あの夜。実自身本に激突されて記憶が曖昧だったが、廉也がちよくちよくその後の事を話してくれたので大体の予想は着いた。

単純明快にコイツは厄介事に絡まれている。

それが廉也を中心としたものなのか、それとも廉也がその渦に飲み込まれただけなのか。出来れば後者であってほしいと
実はそう思いながら虚脱している廉也へと目を向けた。

「なあ、それ話し合いとかでどうにかならないのか？」

そんなことで解決する話しなければまずここまで落ち込むことではないだろうと実は自身の不甲斐無さに顔を鎮めてしまう。

「話し合い……。そうか！その手があったか！」

ベットから起き上がるとそのまま急いで玄関へと廉也が直行して行く。

実は突然の事で訳が分からないという顔をしている。

「ありがとな！実、今度奢るよ！」

そう言つとそのままボタンツと玄関のドアを開けさつさといつてしまった。

後に残るは終始おいてけぼりの青年一人

「もう、くんない！」

心優しい？青年は大声でそう叫んだのであつた。

シャアアアアア

閑散とした部屋。

唯一時を動かしているのはシャワーの音のみ。

部屋を見渡してもテレビどころか机すら存在しない。

唯一あるものとすれば冷蔵庫とベットのみだろう。

そして部屋に木霊していた音もいつかは鳴りやみ、再び静寂が空間を支配する。

ガチャ

やがてバスルームからタオル一枚だけをはおって姿を現した女性あまり凹凸が激しいという訳ではないが出るところはしっかり出ており、それでいてスレンダーな体つきというとても魅惑的な体をしている。

この部屋の主、三鷹美鈴はため息一つ吐くとベットへと倒れ込んだ。しかし、何故ここまで部屋が殺風景かと言えば彼女が天使だからなのだろう。

天使自身欲というものはあまり存在しない。

それは元々、天使という生物自体が天の使いという役目を負っているからに他ならない。

よって天使というものは欲を持たないというのは周知の事実なのだ。

そして、やがて来る睡魔へと身をゆだねようとした刹那、突如彼女が所持している唯一の近代科学の象徴——携帯が鳴り響く。

美鈴は携帯を忌々しめに睨んでいるとやがてその発信者の名前を目にする。

着信 神崎廉也

その瞬間、不機嫌な表情は何処へやら。美鈴は得物を見つけた猛獣の如く凄惨な笑みを浮かべる。
すぐさま携帯を手に取り電話に出る。

「あ、先輩ですか？」

まさか自分が出るとは思っていなかったとでも言いたそうな言動に少しだけムツとする。

確かに美鈴は緊急時以外は気付いたとしても出ることは滅多にない。その緊急時もこの高校生活の一年と半年合わせて二回ほどしかない。でも、廉也は美鈴のお気に入りなのだ。

電話がかかってきたらなるべく掛けなおすようにしてるし（かかってくること自体少ないのだが）その緊急事態も彼からの電話だ。

なので、今回廉也の行動は彼女にとって不本意と言わざるを得ない。

「あら、珍しいわね。貴方から電話をかけてくるなんて」

少し冷たく、突き放すような態度に廉也も電話越しとはいえ鼻白む。

「あー、はい。すこし話したいことがありますて」

その言葉は美鈴が待ち焦がれていたもの。
とはいっても恋とかそっちの話ではない。

美鈴はこの時を少し楽しみにしていた。
彼が選ばれた時、美鈴は気配を敏感に人間界に突如現れた巨大な存在を感じ取っていた。

しかし、どこか懐かしい感じがするかと思えば正体を確かめてみれば、
よもや彼女のお気に入りだったとは。

これが人間界でいう神の気まぐれならば美鈴は神に平伏しただろう。
もちろんそんなつもり美鈴にはこれっぽっちもなかったが。

そして、おそらく廉也は美鈴の正体に気付いた。

また、気付いたのにも関わらず強襲してこないのも廉也らしい。

「いいわ、学校の屋上で待ってる。あのシェリルとかいう女性は連れてこないでよ？これは条件ね」

しばらくの沈黙

「・・・分かりました。シェリルは連れて行きません。それでは、学校で」

「ええ、それじゃあ」

電話を終え彼女は制服へと着替えると・・・..
ベランダへでてそのまま真っ逆さまに落ちて行った。
後には純白の羽が残ったという・・・..

廉也は猛ダツシュで大地を駆け抜ける。

目指すは明桜学園

シエリルとの契約時に身体強化までされていたらしく最初本気で走ったときには大変な目にあつた。

今は少し速さを抑えたとはいえボルト並みの速さを保っている。

やはり体力も相当あるらしく息切れを起こす前に学園へと着いてしまった。

明桜学園

今は夏なので見かけることは無いが、春になるとここら一帯は桜で埋め尽くされる。

それは一つの風物詩となっており毎年、多くの人をにぎわせている。無駄に大きい校門を抜け学園内へと入り、スタスタと速足に屋上へと向かう。

その間に誰にも会わなかった事は幸いと言えよう。

やがて屋上へとつながる扉へとたどり着きドアノブへ手を掛けた瞬間、強烈な違和感が廉也を襲う。

吐き気と眩暈を催しながらも気合でドアノブや回す。

ガチャ

鍵は空いていた。

屋上へ入ると先ほどの強烈な違和感が嘘のように無くなり廉也はしばらく頭の上にクエスチョンマークを浮かべながらしばらく呆然としていた。

「あれ、意外と早かったのね。私も今着いた所よ」

風は吹いてはいなかったが、屋上から気持ちよさそうに外の風景を眺めていた美鈴は廉也を見て微笑んだ。
髪が風にユラユラと揺れソレを片手でそっと押さえながら笑う美鈴は驚くほど絵になっていた。

「どうしたの、廉也君？何か話があるんじゃないのかしら。それとも告白かしら？」

美鈴は意地悪気に笑う。

「ええ、俺も告白ならよかったんですけどね。でも今回は違います。廉也はそう告げるとより一層顔を引き締める。

「・・・先輩は天使ですか？」

「ええ、そうよ」

あまりにも直球すぎる質問に即答する美鈴。

「・・・・・・・・・・」

言葉を失う廉也

「信じられないかしら？ならこれでどう？」

そう言つて美鈴は自分の何倍もあるつかという純白のシルエットを背中に映し出す。

しかし、それはシルエットではなく正真正銘の翼

その翼は穢れを一切知らないような純白で煌々と光を放っている、それがひどく残酷なまでに美しかった。

「・・・・・・・・やっぱり、天使かあ」

グシャグシャと頭を掻きわけてめんどくさそうに呟く廉也に美鈴は訝しげな視線を向ける。

「あまり驚かないのね？」

「充分驚いてますよ。先輩が天使だったなんて天地が引つ繰り返り

そうです」

そして彼は冗談めかしに笑った。

「……………拒絶したりとかはしないの？」

「拒絶するよりも、受け入れた方がずっと楽です」

「……………ふふっ」

沈黙から一転、同時に笑う二人組。

一見、傍から見れば仲の良いカップルにしか見えない。

しかし、次のその言葉はささやかな風景を打ち壊すには十分すぎた。

「ふふふ、でもね。貴方には死んでもらうわ」

刹那——白銀の光が廉也を貫く

「っ!」

廉也は驚愕のあまり目を見開いたまま硬直している。

「…………あら、魔法障壁張れたの？いえ、その様子だと無意識？無意識下でこれほどの壁を張れるなんて、やっぱり選ばれし者は伊達じゃないという事かしら」

美鈴は不敵に嘲笑うかのように廉也を見る。

未だ動けない廉也の瞳には恐怖という二文字が張り付いたまま離れない。

美鈴の手には白銀の剣が握られておりそれは今まさに廉也を貫こうとしていた。

しかし、それは廉也の目の前で正体不明の壁によって阻まれ、今なお力の拮抗が続いている、迸る光の閃光。不透明な抑止力は揺るぎもしない。

魔法障壁と言う名の鉄壁

だが、その防御力は悪魔ならば二級悪魔、天使ならば高位の加護、最高の評価を下すならば中級神の盾にも匹敵ほどの障壁。

もはやそれは人の領域など等に越えている。

ソレを無意識下で行う事がどれほど出鱈目な事か、廉也は理解できていない。

いや、それをいうならばこの状況自体理解することが難しいだろう。

目の前のちよっぴり意地悪で悪戯好きでみんなの和ませ役でとても面倒見がよい学校の先輩が自分を殺さんと刃を向けいている。

それは無情なほど現実。

頬をつねっても痛いだけの世界。

やがて青年はゆっくり口を開く。

「天使、俺は美鈴先輩と話しに来たんだ。お前と話してるほど俺は暇じゃない」

「はははははは！よく言ったわ、廉也君！それでこそ、あなたよ。もっと私を楽しませて」

美鈴の哄笑が木霊す。

さらに白銀の剣もそれに呼応するかのように爆発的な勢いで廉也を圧倒して行く。

さすがの魔法障壁も揺らぎ始め、その波紋が廉也をも揺るがす。

廉也の焦りは広がり、顔には焦燥の念がこみ上げる。

落ち着けと、廉也は自分自身に言い聞かせた。

最早この状況は手遅れに近い。

いや、すでに手遅れなのであるう。

しかし、廉也は焦ってはいるが、恐怖や悲しいといった感情はない。それは何故かと聞かれたら分からない。

だが、廉也はこの時確信を抱いていた。

この先輩はどこまでも、面白いことが好きなのだ・・・。

（ならば、それに付き合ってやろう。勝負は一瞬。間違えれば死ぬが、まあいい賭けだ）

目の前の事に再び意識を集中させる。

来るべき瞬間を見逃さないように。

「考え事は終わったかしら？」

そんな廉也の心情を読み取ったのか美鈴がこちらに語りかけてくる。

「ああ、終わったよ。天使。お前を倒して美鈴先輩と話さしてもらう」

さらに白銀の剣は勢いを増す。

並みの攻撃どころか上級の攻撃であってもビクともしない魔法障壁が決壊寸前と思われるほどに揺らいでいる。

それが彼女と廉也の差だろう。

その差は底なし沼かと思うほどに深く遠い。

だが、今は負けるわけにはいかない。

決意を秘めた眼差しへと変換した瞬間、世界は一変する。

力の拮抗は崩れ白銀の剣は廉也の奥深くへと侵入する。

この勝負全体を見るならば美鈴の圧勝だろう。

しかし、この一瞬たった0、000001秒

世界は廉也に微笑んだ。

魔力の流れ、大気の淀み、風の声、切り裂くような音、最後その全てを支配したのは廉也だった。
次の瞬間、爆発するかのように廉也の体から力が漲る。

白銀の光に対抗するは真紅の雷撃

具現、衝突、拮抗。

世界はまばゆい光に包まれ、大地を赤く、白く染め上げる。

歪みの中の異変

真紅の雷撃は白銀の光を瞬く間に消し、全方位から女性に殺到する。

ドオオオオオン！！！！

耳を劈くような轟音

土煙が舞う中、舞台リングに立っているのは少年ただ一人

「・・・・・・・・・・」

しかしその彼は無言でさらにその先にいるものを見つめ続けている。
「ケホッ、ケホッ。驚いたわ。まさかそんなものまで扱えるなんて、思ってもいなかったんだもん」

所々服は破けてはいるが体には特に外傷といった外傷は見当たらない。
い。

普通の人間ならば確実に死んでいたにも関わらず彼女には傷一つない。

それは彼女が天使という事を差し引いてもなおありえない事なのだ。

それなのに彼女は無傷。

顔には驚いたという表情が残留しているが焦りや恐怖といった感情は微塵も出ていない。

しかし、彼女は妙に満足気な顔をしている。
「うんうん。まあ、及第点といった所かしら」
「・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

意味が分からないとしている廉也を余所に美鈴は説明口調に口を開く。

「実をいうと、私あなたの實力を見たかったのだ」

「廉也君は気付いているかどうか分からないけど、貴方はとくに修羅の道にはいつちゃってるのよ。それはもう後戻りはできない道に、ね。だから私はあなたを試した。本当にその道に入る者に相応しいかどうかも含めて。勝手かもしれないけれど貴方には正直生きていてほしかったの。そしてこの道を潜り抜けてほしいとも思っているわ」

「先輩・・・・？御怪我はよろしいので？」

その言葉に次は美鈴が疑問符を頭に浮かべる。

「・・・・・・・・ええ、御覧の通り大丈夫よ？」

「良かった。本当に。自分でもあんなの出るとは思いませんでしたから。無事なら安心しました」

本当によかった、と思っているのを余所に美鈴は思いの外頬を赤く染める結果となる。

「へえ、心配してくれてるんだ？あんな事したのに？」

あんな事とは先ほどの戦闘の事だろう。

美鈴自身あんな失礼な事をしたのだから嫌われて当然と思っていたのでこの反応は予想外であった。

「そんなこと関係ありませんよ。先輩も色々考えて行動したそうですし、許すことにしますよ。实际いい経験だと思っています。少しですけど、力の使い方を把握できましたので」

そう言つて手のひらにバチバチツと真紅の雷を鳴らす。

「すごいね。あの数分の戦闘でそこまで扱えるようになったの？」

「ええ、といつてもほんの一部だと思いますけどね。この壁のようなものもある程度仕組みは分かってきましたし」

「その壁は魔法障壁っていうのよ。主に悪魔や人間が扱う魔法ね。といつても人間で扱えるのはほんの一部分のみといった所かしら」

人間というのは基本、魔力を持たない種族だ。

ほぼ皆無に等しい。

しかし、その中にもやはり魔力を有する人間は存在し、そんな者達はある組織にかなり重宝されている。

「けれど、あなたほどの魔法障壁を張れる者は悪魔にしか存在しないと思うけど。天使や神は基本、それぞれ加護といったもので体を守っているわ。その加護も個々によつて種類も形質も威力も質量も全て変わっていて・・・まあ結局才能の世界ね」

（そして彼は私に一撃とはいえ打ち勝つて見せた。さすがの私もアレには度肝を抜かれたわ）

先ほどの戦闘を思い浮かべる。

巨大な魔法障壁を張り巡らす廉也に対し美鈴は単純に力押し（色々工夫はしたが）

そして、壁が崩れるほんの数瞬前

あるうことか廉也は自分で壁を解除したのだ。

まんまと廉也の策に嵌ってしまった美鈴は攻撃の勢いを弱めてしまふ。

その油断したほんの一瞬で彼は真正面から美鈴を押し返したのだ。しかも、その威力はこれまでとはけた違い。

流石の美鈴も少し焦ったが、すぐさま防御態勢をとり無傷で生還を果たした。

（流石は選ばれし者といったところね）

「というか、先輩はいいんですか？俺を殺さなくて」

「ん？私は確かに貴方を殺すつもりだったけど今はそのつもりは毛頭ないわよ。面白くなりそうだしね」

それを聞いた廉也はかなり苦い顔をする。

「でも、天界はどうなんですか？」

「私、天界なんて興味ないわ。だって墮天使だもの」

（だ、墮天使……）

いや、確かに廉也は天使にしては自由奔放そう、シエリルから聞いた天使とは随分と印象が違うなと思っていた。

しかし……これは

「……あの先輩。それは本当の事で？」

「本当よ。といっても私の場合は墮とされたというより自分から墮ちたというのが正しいかしら。私みたいな性格に天界は少し酷つてものよね。階級に縛られて面白いことも起きやしない。だから人間界に堕ちたのよ。結果は良くも悪く……今はとびきり良い方向に転んでいるわね」

廉也は思った。

（俺も自由奔放だと思うが、この先輩には負ける）

「それで、面白そうだから私も廉也君と協力することにするわ」

「そ、そうですか。先輩が付いてくれるなら心強いですよ」

ため息一つついた廉也は美鈴を見る。

その服は所々が破けておりスレンダーで綺麗な肌が惜しげもなく公開されていた。

美鈴は特に気にした様子はなくいつもの、のほほんとした雰囲気に戻っている。

廉也は所在無げに視線を彷徨わせる。

なにか羽織るものをあげかったが生憎今はそんなもの持ち合わせていない。

「ん？何処を見てるのかな？」

このことに美鈴はとくに気付いており、焦る廉也を面白おかしく観察していた。

「くっ、いえ何でもありませんよ……」

そんな廉也に満足したのか美鈴は言う。

「でもね、廉也君。私は確かに貴方に協力するけど多分あまり意味をなさないと思うわ。魔界と天界はすでに貴方達の事を気付いている。貴方の運命は貴方の手でしか切り抜けない。私は協力する。でも行動するのは全て貴方、廉也君よ」

少し棘のある言いかたに感じられたが今の廉也はそれを真摯に受け止めた。

「分かっています」

「うん、ならよろしい。大丈夫よそんなに気張らなくても。私が付いている限り最高神か魔王でなければ貴方を殺せないわ」

あまりの自身に満ちた態度の美鈴に廉也は苦笑する。
「いや、本当よ？ 本当の事なんだから」

「ところで先輩」

「なにかしら？」

「学校とか大丈夫なんですか？ 結構轟音とか屋上の所々が破損していますか」

「ああ、それなら心配いらないわ。この学校全体に人避けの結界と屋上にはさらに強力な結界を敷いているから」

（だから屋上に入った時あの何とも言えない気持ち悪さに苛まれたのか）

感慨深げ思い出す。

「うん、このまままずいから戻しておかないとね」

パチン

指を鳴らす

ただそれだけの動作で屋上は時間を逆再生するかのように壊れた部分は元に戻ってゆく。

逆再生が終わった後には何の変哲もない屋上が出来上がってしまった。

「本当に先輩は何者なんですか」

「堕天使よ」

青空が蒼く輝いていた。

第七話敵の敵はまさかの味方（後書き）

うおーーたーー！ー！ー！

天使！天使！残り何話で夏休み終了させようかなあ

とりあえずあれとあれは書くつもりでいるのでお楽しみに

第八話海にでもいこうか生け贄は多い方がいい

「平和だな」

「「平和ですね」」

廉也の呟きに残り二人の美少女が同調する。
美鈴先輩の一件が理想的に終わって数日後

シェリルにも美鈴先輩のことを話し「それは良かったですね！」と
いつてくれた。

彼女もこちらの世界で味方ができるのは心強いらしい。
そんなひよんなで色々あったが今に至る。
だがしかし

「暇だな」

そう暇なのだ。

平和はいいことだと廉也は思う。

だが暇は良くない。

暇と言うのはそれだけで怠惰な生活になる。

「楓、言う事があるんじゃないんですか？」

「あ・・・うん。そうだねシェリルさん」

廉也はある言葉に後ろ髪惹かれた。

（あの妹が呼び捨てで呼ばれているのを容認している・・・？）

呼び捨て自体は別段特別というわけではないだろう。

だが、あの楓に至ってはそれは許されない。

楓は自分が許した相手でなければ名前を呼び捨てで呼ばせないのだ。
しかもこれまで楓が呼び捨てを許した相手を廉也はまだ3人しか知らない。

と言う事はつまり……シェリルが信頼されているという事がよく考えれば姉と妹に見えなくもない（見えねえよ）

小さな事で感動していた廉也を余所に楓はシェリルに後押しされながら意を決したように口を開く。

「あの！兄さん！海行きませんか！？」

そこまで大声で言わなくても……と思うほど特大級の大声を出した楓は顔を赤くして俯いている。

シェリルは「よく頑張りました」と楓の頭を撫でている。

こうしてみると本当に姉妹のように見える。

「いいぞ別に。というか水着とかは大丈夫なのか？」

廉也として別にどうでもいいというよりむしろ大歓迎であった。

「やったあ！水着ならこの前買いましたから大丈夫です！」

この前というところあの美鈴先輩の時だろう。

廉也はあの時の事を思い出す。

家に電話したところ丁度シェリルと楓二人で出かけるとのことだったのでシェリルに楓をよろしく頼むと頼んで特に気にしていなかったが今にしてみるとあの時買いに行ったのだろう。

そして、キャツキャツと飛び跳ねて異常に喜ぶ楓に廉也は珍しい物でも見るかのような視線を送る。

「そんなに嬉しいか？」

「はい、とっても！兄さんと海に行くなんて小さい頃以来ですから。迷惑でしたか？」

ウルウルとした瞳に赤面した顔を向ける楓に廉也は苦笑一つで答える。

「いや、大歓迎だよ。早速行くことにしよう。そんでもって海の家で何泊かしよう」

（どうせ、暇だしな）

「いいんですか?!」

「ああ、どうせやることないしな。シェリルもいいよな?」

「はい、もちろんです。私も水着を買いましたので」

「えっ? って当たり前か。シェリルもいったんだしな。それなら楽しみだなあ二人の水着」

廉也は楽しみの込めた眼で二人を見つめるとだんだん二人の顔が赤くはれてくる。

楓の場合は赤い顔をさらに赤くさせる。

「なんてこと考えているんですか! 兄さんは!」

「変態ですね」

「なんでそうなる!!」

廉也は理不尽だ! と思うと同時に得体の知れない予感に背筋をゾクリと凍らせる。

途端机の上に置いてあった携帯のブザーが鳴る。

恐る恐る携帯を覗き込むと差出人の名前の所に三鷹美鈴の文字が。理性が告げていた、この携帯は開けてはならないと――

だが開けなければ殺されるとこれまた廉也の理性が告げていた。手を空けたり握ったりと廉也は携帯の目の前で見えない敵と戦っていた。

結局死への恐怖には負けてしまったが……

しょうがなく廉也は携帯を手に取り開ける。

美鈴からのメール

文章は

もちろん私も連れて行ってくれるのよね？

体のあらゆるところから嫌な汗が流れ出てくるのを感じ廉也は心の奥底で叫んだ。

(うあああああああああああああああああああ！
！！！！！！何これ！なんで知ってるの！！盗撮機とかでもあるのか！！！！)

もちろんそんなもの無いことは重々承知である。

いまさっき話したことなのだ。

盗撮機仕掛けていてもここまで早くすることはできない。

（ならば天使は遠距離読心術でも持っているのか？後でシェリルに聞いてみよう）

もちろん答えはNOだった。

「兄さん？大丈夫ですか？」

心配そうに楓が廉也に声をかける。

「……い、いや、あのその」

それでも今の彼にはそんな言葉でも返せる余裕はない。

彼は分かっていた。

彼女、美鈴の事を

彼女はやるって言ったら必ずやる子だ。

最早美鈴が行くことは誰にも覆しようのない事実。

つまり今の廉也は目の前に美少女二人を説得しなければならない。

悪魔に囁かされて廉也は思いついた。

（そうだ、実も生贄にしよう）

こうして三時間ほどして彼女達を説得した廉也は真っ白に燃え尽きていたという。

ちなみに生贄にされた実は後日、血の涙を流すこととなる。

美鈴との通話

「先輩、なんで俺達が海行くこと分かったんですか？」

「あなたの事なんか全てお見通しよ。私は堕天使なんだから」

いや、堕天使関係ないんじゃない？と突っ込もうとした廉也は強い殺気を感じて黙り込むこととなった。

こうして美女三人、生贄人二人（おもに美鈴の生贄）の海水浴旅行が始まることとなった

第八話海にでもいこうか生け贄は多い方がいい（後書き）

今回は短めというか文章なんかおかしい？

まあいいかw

次回はハーレム？海水浴が始まります。

ハーレムにする気なかったんだけどなあ

若さゆえの過ちというのは怖いな

あと遅れましたが評価ありがとうございますこれを糧に日々邁進していききたいと思います。

第九話波乱の幕開け

ザアアア

押し寄せる穏やかな波

吹きつける暖かな風

廉也一向は海へと来ていた（もちろん美鈴と実（生贄）込みで）
美鈴が来る事によって楓とシェリルに一波来るかと内心びくびくしていた廉也だったが、以外に三人とも早く打ち解けてしまった。
だが廉也達の不安は収まらない。

「なあ、実。当然来るよな？」

小さく廉也が問いかける。

「いやまずお前おれに謝れや」

実は廉也に批難の視線を向ける。

「……ごめん？生贄は多い方がいいかと」

「あ、謝るんかい。しかもなんで疑問形！あと生贄ってなに？？もういいけど……それよりも来るってのはナンパか？」

久しぶりに連続突っ込みを見せた実に廉也は歓声を上げる。

「おー、連続突っ込みとは流石だな実」

「いや、根源お前だから」

「フンフフーん。それよかナンパよ。絶対くるだろうなあ」

そういつて廉也は横を見る。

そこには三人の美女がたっている。

右からシェリル、楓、美鈴

今はまだナンパはされていないが飛びぬけた美女三人に少なからず注目が集まっている。

「ああ、ていうかまだ水着つけてないのに注目されるとかどんだけよ」

「うん、だがしかし。俺らがいなくても先輩がいれば安心だけだな」
「なあ、廉也もしだぞ？美鈴先輩は別として無抵抗の妹やシェリルさんが襲われたらどうするんだ？」

「肉片に変えて、ゆつくりミンチにする。ここら辺はちょうど精肉工場があるらしいんだ。ああでも、海水をたらふく飲ませて海の藻屑にするのも面白い」

実は後に語った。

あの時の廉也の顔はまさしく悪魔だったと……

「お、お願いだからそれだけはやめてくれよ」

腹の奥底から声を絞り出す実に廉也は一言

「無理」

廉也と実が遠くでひそひそと話していたころ

（お兄様と御学友は何を話しているんでしょう）

楓は遠目に廉也と話す実を羨ましいと思っていた。

「さあて、私達も着替えるとしますか」

美鈴の掛け声に二人とも頷く。

「あ、兄さん！私達は向こうで着替えてますね！」

「うーい、了解」

手を振りながら答える兄に楓は少しだけ頬を赤く染める。

「あら、何で顔が赤いのかしら」

美鈴が意地悪気に微笑むのを楓は少しだけ慌てながら返答する。
「あ、え、いや。あの、その・・・何でもないです!!」
そう言つて楓は一足先に更衣室へと走り去つていった。

「青春してるわねえ」

腕を組みながら上品に笑う美鈴。

「そうですね。楓は廉也様になるとは可愛い所がありますから」
シエリルは楓の後を追うように走つて行く。

「私も丸くなつたもんね」

人知れず自称気味に笑うのであつた。

廉也達は一足先に着替えが終わり砂浜にビーチパラソルを立てていた。

ちゃんとシートを張りその隣にはイスもある。

「うん、完璧だな」

それに実も同調する。

「しっかし準備終わると暇だな。女性陣はまだ掛かりそうだし少し泳ぐか？」

「ふざけんな。お前に泳ぎでというかスポーツで勝てたらオリンピック出られるわ」

実は最近よくそういうのを感じるようになってきた。

絶対埋まりそうもない実力の溝と、とてつもなく大きく分厚い壁。

（最初からそんな感じだったから今更驚かないけどね！）

そして実もまた大きく変わろうとしていた（諦めの意味で）

とりあえず何か飲もうとおもった実はクーラーボックスを開けるがその中身に驚愕して数刻ほど時間が止まってしまった。

「どした、実」

廉也が心配？？そうに声をかける。

クーラーボックスにある違和感を一つひょいっと取り上げ廉也に見せる。

「なんでビールがあるんだよ！」

「あー、深く追求するな。持ってきたの美鈴先輩だから」

「・・・・・・・・・・そうか」

実は諭されたように追及しなかった。

何故かって？

ならここで学校事情を説明しよう。

現在うち（明桜学園）の最高権力者は校長でも理事長でもない。

三鷹美鈴副生徒会長だ

噂によれば理事長と校長をちよるまかし超法規的権力を手に入れたという。

裏の権力者として三鷹美鈴は恐れられている。

武勇伝によれば気に入らない不良集団を適当な犯罪でっち上げて退

学処分にした事もあるらしい。

そういう裏を知らない新入生や生徒にとっては絶大な人気を誇っているが裏を知る生徒達には畏怖と畏敬をもって恐れられたり尊敬されたりしている。

まあ、なんだかんだ根はやさしい先輩だと実は思っている。とりあえずいままで先輩に逆らった者はいなかった。

目の前の男、廉也が現れるまでは……

ジューズを飲みながら女性陣を気長に待つことにした廉也はイスに腰掛けながら何も考えずボケーとしていた。

実と話そうとしたらビールを片手に持ったまま固まっていたので話しかけることはしなかった（なんか気持ち悪いし）

ジューズを一口含むと違和感を感じたが、どうでもよかったので缶に残ったジューズを一気に啜る。

「っ、頭がクラクラするな」

疲れたのだろうか、そう思いイスの背もたれに体を預ける。

「お待たせ廉也君。あらどうしたの？」

「いえ、少しだけ疲れているようですが大丈夫です」

「兄さん、大丈夫なんですか？」

楓も心配そうに声をかける。

「ああ、大丈夫だ。心配いらないよ」

そう言って楓の頭を撫でようとして視線をシェリル、楓、美鈴の三

人に移した瞬間。思わず見とれてしまった。

美鈴は白を基調とした水着にシンプルながらも大人の色気を醸し出している。楓は赤いフリフリの水着に未だ発展途上の胸が相まって絶妙なプロポーションを誇っている。シエリルは紫色の布の水着がもう……頭痛い。

先ほどから頭がクラクラして気分が悪い。

「あら、廉也君これ」

美鈴は何かに気づいたように呟く。

「何ですか、先輩」

美鈴が先ほど廉也が飲んでいたジュースの缶を手に取りズイッと廉也に見せる。

「先輩、こんな真昼間からビール飲んじゃ駄目ですよ？しかも全部

」

「コレ飲んだのあなたよ？流石の私でも白昼堂々飲まないわよ。失礼ね」

「え？？？」

「いや、だから貴方がジュースと間違えて飲んだのはお酒よ。しょうがないわね。楓お水買ってきてくれるかしら」

「あ、はい。分かりました。兄さん待っていてくださいね」

急いで走りだす楓を見送りながら廉也は気付く。

（あれ、先輩。楓のこと呼び捨てにしたか？）

だが今の彼にとってそんなことどうでもよい。

「早く、水を……」

急いで駆け出してみたもののよく考えてみれば自販機が見当たらない。

しょうがなく楓は海の家へと足を向ける。

「それにしても兄さんはお酒を飲むとはどう考えているのでしょうか？」

文句を言いながらミネラルウォーターを買い最初とは違いゆっくりと歩き出す。

そこへ忍び寄り三人の影

「やあ、きみ。かわいいね」

「え？」

気付いたら三人の男に囲まれており逃げ出そうと一歩踏み出すと道を阻まれる。

「すみません、急ぐ用があるので通して下さい」

「いや、そういう訳にはいかないね。どう？俺達とお茶しない？」

そう言つて男の一人が無理やり楓の腕をつかむ。

残り二人のは下卑ひた視線で楓を嬲っている。

「いや！・・・助けて兄さん！！！！」

その声は聞き届けられた――

遠くが騒がしい、何かあったのだろうか？
嫌な予感が頭をよぎる。

遠くそして声も聞こえないような距離だったが、その声だけは確かに聞こえた。

「いや！……助けて兄さん！！！」

その瞬間、廉也は一迅の風を身にまとい声のした方へ駆け抜ける。そこには妹とその妹を取り囲むように男どもが三人群れている。

「っ！！」

もう何も考えられない。

廉也は楓の元へとたどり着くと楓を掴んでいた男の腕を引き離す。

「なんだお前は！！」

だがそんなこと廉也の耳には入らない。

ただ一言

「お前ら、生きて帰れるとは思っなよ………?」

現れた感情は怒りではない。

憎悪と明確な殺意

こいつらは俺のかけがえのない存在に手をかけようとした。

ああそれだけで——死に値する。

楓は呆然としていた。

助けて、ただその一言でまるで瞬間移動したかのように一瞬でここまでの距離を走ったのだ。

こみ上げてくるものは涙。

兄はこれほどまで自分の事を思っていてくれたのだろうか？一時期は嫌われていると思ったこともあった。だけど自分が困ったら兄はいつも駆けつけてくれた。

そんな兄が好きだった。

そんな兄が大好きだった。

その兄を愛していた。

そして、兄は今また自分のために戦ってくれている。

それがどうしようもなく嬉しく、そんなことを思っている自分が悔しい。涙がとめどなく溢れてくる。今の自分にそれを止める術は無い。

力が溢れてくる。

それはまるで無限に湧き出てくる泉の源泉
体から溢れるわ神秘の魔力

自分はいま初めて明確な殺意を抱いている

眼の前の下衆野郎どもに

「さあ、死んでもらおうか」

男たちに魔力は分らない。

人間だから当然だろう。

しかし、強大な魔力は容赦なく男どもを侵食する。
それは拷問。

体を侵食魔力は相手の血肉を容赦なく食らう。
声は出ない。

先に喉を潰してもらったからだ。
だが、死にはしない。
起こすのは精神崩壊。

全てをくらい尽くし、最後には魂までも喰らう。
廉也はこの魔力の使い方を知らなかったが体が勝手に動いた。
男達三人は白眼を出して失禁しながら気絶している。
これだけでも十分譲歩したつもりだ。
本当ならばその身を意識があるまま八つ裂きにし海の藻屑にしている。

じきに目を覚ますだろう。
廃人として……だが

隣では楓が泣いている。

廉也は優しく楓の頭を撫でる。

「もう大丈夫だよ。みんなの元へ戻ろうか楓」

「……いえ、もう少しこのままでいさせてください」

楓は廉也の腰に手をまわして抱きつく。

迷うことなく廉也は楓の頭を撫で続ける。

『熱い所邪魔して悪いけど、ここら辺一帯に精神操作の魔法施しておいたからさっきのは心配ないわよ』

『はい、ありがとうございます。先輩』

頭に直接響く声。

天使や悪魔は念話と言つのが出来るらしい。

だが使用できる距離が極端に短くあまり使われないらしい。

『それにしてもえげつない魔法を使うのね。戒めの廻なんて』

『へえ、そう言う魔法なんですか。意味が分からず使っていましたよ』

『・・・まあいいわ。結構難しい魔法何だけど・・・』

『ん？なにか言いました？』

『いえ、何でもないわ。それではまたあとでね』

ため息が聞こえたような気がしたが気のせいだったか？

『はい、ではまたあとで』

念話が終わり楓を落ち着かせるためにベンチのある場所へと移動する。

（それにしても殺してしまったか・・・）

実際には死んではないのだろうか。

だが精神の崩壊は肉体の絶命と同意義だ。

そして廉也は初めて人を殺めてしまったのかもしれない。

重く推しかかり・・・はしなかった。

この小さな少女に手をかける奴はなんびと足りとも許さない。

たとえそれがどんな惨撃を生んだとしても。

それこそが・・・今は亡き両親と約束した俺の決意だ。

PS
実^{みの}くんは放置です♪

第九話波乱の幕開け（後書き）

みのるっちはどこまでもあれですな。
というわけで第九話ですがそろそろ感想ホシイナゝなんて

第十話対極の果てに

生と死

悪と善

真と嘘

全て対極に位置し、また二度と顔を合わせることはない存在

そして今ここにもう一つの対極が存在した。

魔王と最高神

それは対極に位置するが、決して顔を合わせないという訳ではない。特にこの二つの存在においては例外だろう。

幼馴染

ライバル

好敵手

ともに起きともに寝とともに磨き合いともに過ごした存在。

魔王は嗤った。

「くくつ、それにしても俺らが再び顔を合わせる事になろうとはな
最高神もそれに同調するかのよう微笑む。

「そうだね。僕達が再び会う時は戦場かと思っていたよ」

「まあ、今回は親友として飲もう」

「ああ、そうだね」

互いの杯に酒を注ぎ込む。

それを最高神は一気飲みする。

「ア——、うまい！天界じゃ禁煙禁酒だからね。きついったらありやしないよ。家臣の神もうるさいしね」

「ふふ、大変だな天界は。それに比べ魔界は自由だぞ？実力絶対主義だからな。弱きものは強き者に従う。まあもちろん秩序はあるが

な」

「いいなあ、魔界は。最近天使達もうるさいよ」

「ああ、あのラファエルとかいう天使か。あいつには私の部下も酷くやられたな。何でも天使なのに足癖が悪すぎる！……だそうだ」

「はははははは！それは言えてる！最高神の僕をけつてくるんだもの。あの子は相当だよ。ちょっと天然な所もあるけど見てて飽きない」

何か面白いことでも思い出したかのように大爆笑する最高神に魔王も笑う。

「でも、神器まで上げたそうじゃないか？いいのか？」

「あの天使は強いよ。多分神の中でもトップ20には入る」

「ほほう、お前がそう言うならば本当だろう。ぜひ手合わせ願いたいな。まあ魔界はあんまり関係ないが……」

「止めてくれ、ルシとサシで勝負できる奴なんてこの世界には2〜3人しかいないよ！」

冗談めかしに言うルシファアにアルゼウスも笑って答えるがピタリとルシファアは嗤いを止める。
訝しむアルゼウス。

「なあ、アル。その2〜3人誰だ？」

久しぶりに本気な眼差しのルシファアにアルゼウスも姿勢を整えて真面目に答える。

「まず最初に二人。俺と支配者」

「残り一人は？」

「……選ばれし者、神崎廉也」

その名前を聞いた瞬間アルゼウスは見たことのないルシファアの凄惨な笑みに顔をひきつらせる。

「おい、ルシ。何を考えている？」

「いや、なに簡単な事だよ。私が直々にその選ばれし者の力量を測ってやるだけだ」

バン！！机が真つ二つに割れる。

割ったのはアルゼウス

「本気か？」

「ああ、俺は本気の事しか言わない。お前が一番理解しているだろう？」

ルシファアが本気ならばアルゼウスも本気。

魔界と天界は古来より、支配者に選ばれし者が人間界から出たのであれば全ての世界に新たな秩序がもたらされると言い伝えられている。

故に新たな秩序というのはこれまでの秩序の崩壊

それは魔界、天界、人間界が消えてしまうかもしれないのだ。

滅ぼすべき最優先対象

滅ぼさなければこちらが滅ぶ。

ルシファアが言っている事は正しいだろう。

だが皆一様に敵の力量が全く分からないのだ。

それに支配者の使いの女性。

未知数な事柄が多すぎる。

魔界と天界は今和平にちかいものを結んでいる。

全ては選ばれし者を倒す為だ。

しかし、人間界に軍を送れば世界（支配者）が介入する。

それだけは絶対にふさがなければならない。

だから情報共有の意味も込めて条約を結んだのだ。

これで魔界と天界の距離が近づけばいいとアルゼウスは思っていた。

もちろん、ルシファーとは思いは同じだろう。

「もし、俺を止めるならば親友としてではなく最高神として来い。さもなくばお前を殺す」

答えないアルゼウスを一瞥すると部屋から出ようと背を向ける。

「じゃあな、アル。楽しかった。また会えたら会おう」

振り返らず手だけを振るルシファーをアルゼウスは無言で手を握り締めながら見送った。

今宵は宴、月は踊り狂い、闇は世界を包み込む……………

第十話対極の果てに（後書き）

はい、なんとなく書きあげました。

運命は螺旋、空を赤く染め上げ、時代は混迷を歓迎する。

第十一話善き理解者

陽光が差し、辺り一面を明るく照らす。
眼の前に広がるは大海原とそれに比べればちっぽけな砂浜。
だがそこには小さな樂園があつた。

キヤツキヤツ

浜辺で戯れる三人の美女

「ふあゝ、ねみ」

その傍らで廉也はゴロンと横になる。
丁度、いい風が吹いてきて心地よい。

実？そこで死んでるよ？

先ほど2対2のビーチバレーで徹底的に痛みつけられた実は砂浜で
白く燃え尽きていた・・・

一部始終

「いくわよゝ、堂本君」

「嫌です、来ないでください！」

喋るのは美鈴、打つのはシェリル。楓は後ろのビーチパラソルでお
茶を飲みながら休憩している。

「兄さんゝ、頑張ってください！」

「おう、まかせとけ」

「誰か、俺に声援は？」

「「「「「.....」」」」」

シ——ン

「え、何コレ？いじめ！？」

「……ゴホン！行きます堂本さん」

「え！？なんで俺！？」

シエリルのボールが高らかに上がる。

ちなみに配置としては廉也が前、実が後ろとなっている。

ヒューー………パアアアン！！！！！！

バレーボールではまずならない音が辺り一帯を支配する。

「………へ？」

ボールは迷うことなく音速の域で実に到達

「ぶべらっ！！」

変な奇声を発しながら（あれ、なんかデジャヴ）後方数十メートルにわたって吹き飛ぶ実（笑）

あとはもう御覧の通り

「ドンマイ実」

「………なんで俺だけ？」

「さあ？」

実は彼自身もすごく驚いていた。

この目の前に倒れている実も意外とスポーツは出来る方なのだ。

それを格段に上回る女性陣の身体能力

さすがの廉也でも背筋が凍った。

一回目のサーブは実の顔面サーブで防いだが二回目からは無しの手づくし。

結果女性陣のすさまじい猛攻に男二人は完封負けしてしまった。

まあ、一番ダメージが大きいのは実だが……

「しかし、シエリルさん……容赦ないな」

「ああ、一番すごかったな」

二人とも何かを思い出すかのように虚空を見据える。

一番大人しい顔して一番強かった。

特にあの目にもとまらぬ弾丸サーブ

その時だけは美鈴先輩が可愛く見えたような気がした。

「あら、二人はもういいのかしら？」

突然の背後からの声にビクツと体を震わせる二人

「「ちよつとトイレに」」

「トイレはそつちじゃないわよ？」

「「……」」

「いいから座りなさいな」

美鈴の促しに渋々応じる二人

「それで、美鈴先輩なにか話ですか？」

廉也が先陣を切って口を開く。

「ええ、それと堂本君は廉也君とシエリルちゃんの事知っているのよね？」

「……先輩も何か関わっているんですか？」

「あら？言つてなかったかしら？わたし墮天使なのよ」

衝撃の事実に関口を開けたまま硬直する実

るぐらいならこちらとしても歓迎だ。

けれどソレも全て廉也が決めること、そこまで実も我がままではない。

「ん？俺としては別に構わんよ。手伝ってくれるのはありがたいしな」

廉也にしては珍しくまじめだ。

それほど真剣に自分の立場を考えているという事だろう。

「そう、なら決まりね。後は・・・廉也君少し来てくれる？」

「え？あ、はい。構いませんが。それじゃあ、妹達を頼むぞ実」

「おう」

語尾に、もし楓に何かあったらお前を殺すと聞こえたのは気のせいだろう。

「・・・・・・・・ちかれた。寝よう」

目の前にはショートヘアで少しパーマがかかった見目麗しい美女一人

みんながいた場所とは結構離れた岩場
まるで逢引しているカップルみたいだ。

本来ならば諸手をあげて喜ぶたい状況だが状況が状況だけにそんなことは出来るはずもない。

そして美女はこちらを振り返りしつかりと彼を見据える。

「廉也くん。これからどうするつもり？」

「どう・・・とは？」

「これから全ての事よ」

やはりそれしかないのだろう。
廉也は考える。

（やべ、なんにも思いつかね）

「うーん、成るようになれでいいんじゃないですか。無理動く必要もなさそうですし」

「ふふっ、相変わらずね。一つだけ忠告しておくけど早く強くならないと死んじゃうわよ？」

意地悪気に微笑んでいるが目が笑っていない。

「それじゃあ話は終わり。妹さんとシエリルちゃんが妬いているから早く戻った方がいいわよ？」

「先輩もでしょう。それじゃあ一足先に失礼します」
軽く会釈して小走り気味にみんなの元へ戻る。

ビーチではまだシエリルと楓が遊んでいた。

実がないのに気がつきシエリルに「実は？」と聞いたところ「何か変な事を叫んで遠くの方へ泳ぎに行かれましたよ？」との返答が返ってきた。

実は無視して廉也は少し遊ぶことにした。

（丁度、いいこと思いついたしな）

「おい、シエリル。ちょっと来てくれ」

手を振りながらシエリルを呼ぶ。

「何でしょうか、廉也さま」

髪は水で濡れ運動していたせいか顔はほんのり赤くいつもの数十倍卑猥にみえてしまう。

しばらく見つめてしまつて動かなくなった廉也にシエリルはキョトンとしている。

「ジュルリ……」

「?・・・廉也様?」

「ゴホン!!!!いや、大丈夫だ。それよりもちよつと俺の前に来てくれ」

危うく理性が煩悩に支配されてしまふところだった。

シエリルは迷うことなく俺の前に歩み寄る。

「ここでするしいですか?」

「ああ、グツジョブだ。それじゃあ、行くぞ!!!!!!」

目の前のシエリルの腰を掴み（柔らかかった!）思いつきり海の方へ・・・ポーン

シエリルの「きゃああああ」という絶叫が木霊す。

そして　ドボン!

上手く着水したのかこちらへスイスイ泳いでくる。

「さて、楓ちよつとおいで」

チラリと楓の方を見ると明らかにびくつ!と小刻みに震え首をフルフルと横に振っている。

「大丈夫、優しくするから」

「嫌です!断固拒否します!」

ジリジリ・・・お互いに距離を測り合う二人
その時

「あ・・・」

廉也が間抜けな声を出して楓の後ろを指さす。

「え?」

楓が何事かと振り返る・・・もちろん畏だが
気付いた時には空の上というまさに絶叫マシーン

「いやああああ」

楓の絶叫が大海原に木霊す。

（しかし、楓もこんな幼稚な手に引つ掛かるとは・・・

まだまだだな！！）

それから数十分後二人とも投げられるのに慣れたのか今では喜々と
して投げられ？ている。

「ちよつ、もう無理・・・・・・・・」

夕日を背に力尽きる廉也

そこへ歩み寄る影一つ

「あら、楽しそうな事してるわね」

「あ、美鈴さん何処行っていたんですか？」

「ちよつと野暮用だね。それよりもそろそろ夕食にしないかしら？
日も暮れてきたことだし」

「そうですね・・・・・・・・そろそろ戻って夕食にしましょうか」

美鈴の問いかけにシェリルが同意する。

「・・・・・・・・おし、帰るか。腹減った」

廉也の合図をきっかけに皆、宿に帰る準備を始める。

何か忘れているような気がしたが・・・・・・・・周りは特に変わったこ
とがなかったので廉也は特に気に留めない事にした。

後になってこの時どうして思い出せなかったのかと後悔・・・・・・・・

・はしなかった。

宿に戻り（庭付き家自体を貸し切っている）荷物を一通り置くと庭
に出てBBQの準備をする・・・・・・・・といっても彼の場合はやるこ
となしにボケーとしているだけだが。

料理人の達人レベルが二人（美鈴も出来ると言う事が昨日発覚した）もいるのだ。

はつきりいつて自分の出る幕などない。

着々と料理を切り終える二人を余所に廉也は縁側に座り夜空を眺めていた。

「なあ、みのある……って！！ああ！！」

そこでやつと実がない事に気付く。

「……………まあいつか」

幸い場所は知っているので自力で来るだろうというのが彼の予想だ。その予想は良くも悪くも当たる。

「何をしているのですか？廉也様」

後ろを振り返りるとそこにはシェリルがいた。

「いや、ただ星を……ね」

「そうですか」

そういつてシェリルは廉也の横に座る。

「……こうして二人でいるのも久しぶりだな」

「ふふっ、そうですね。あ後は色々ありましたから」

クスリと笑うシェリルに廉也も頬が緩む。

「あの時は大変だったなあ。いきなり魔神になりましたっ！だなんて頭がおかしい人かと思ったよ」

「む、それは失礼ですね。私は至極真面目ですよ、でも本当にあの時出会った時はすごく嬉しかったです」

あの夜、二人が出会ったときのように月明かりが二人を照らし草木はそれを引き立てるように踊り、揺れて、幻想を演出する。

二人は無言のまま互いを見つめ合う……………

「ゴホン！いいところ邪魔して悪いけど準備が整ったわよ」

美鈴ののんびりとした声に廉也とシェリルは弾けるように顔をそむける。

「あらら、二人とも顔が赤いわよ？」

さらに嫌味を続ける美鈴に廉也は睨みつけようと顔をあげる。

そこにはどう考えても面白がってるようにしか考えられない美鈴の表情が浮かんでいた。

何故かそこに無情の悔しさと諦めがこみ上がって来るのを感じる。

「はあ、勘弁して下さい先輩」

「私はそのままの事を言っただけよ？それよりも早くご飯食べましよう」

美鈴は強引に廉也の手を引き連れて行こうとする。

「おい、シェリルも早く来いよ」

シェリルは無言のままコクンと頷いた。

それに廉也は一抹の不安を抱いたが、美鈴の異常な力に（何処からこんな細い腕の中から力が出るのだろうか？）無理やり連行されていくのであった。

廉也が美鈴に連れて行かれるのを見ながら先ほど胸の奥でチクリと感じた痛み。

なんだろう、この気持ちは。

何故美鈴が廉也様の手を握ったことで胸が痛くなったのだろう。分からない。

漆黒の闇に佇む影四つ
そのうちの一人が呟いた。

『
．．．．．見つけた
』

第十一話善き理解者（後書き）

くくくくっく!!

さあ、どうだ!!（何が!？）

感想下さい）

第十二話魔王降臨

運命に巻き込まれし哀れな人間よ

貴様はいつたいこれからどうする？

死以外に選べるものはあるか？

ソレを決めるのは私ではない

この物語を終わらすのは私ではない

全ては貴様の手にかかっている

哀れな人間よ

運命に見定められし哀れな人よ

その喉笛をかみちぎられる前に覚醒せよ

急げ、敵は目の前だ

陽気な音

誰もが幸多く微笑み笑っている。

その中でもさらに異質さを醸し出している集団がいた。

「海と同様にかなり注目浴びてんなあ。あの三人」

実の呟きは最もだろう。

現在五人は旅行先の夏祭りに来ている。

何でも市単位でやるお祭りらしくかなり規模が大きい。

海岸沿いからみても端から端まで光が所狭しと輝きを放っている。

しかし、その輝きにも負けないくらい三人の異様さは際立っていた。

三人に共通してしていることはまず一つ

美女で浴衣を着ていることだ。

まずどこから持つて来たのか？と突っ込みたくなる。聞いたところによれば美鈴先輩がくれたらしいのだ。というか廉也達（美鈴を除く）は今日ここで祭りがおこなわれることと自体知らなかった。

なぜなら場所やら何まで全て美鈴が手配してくれたからだ。それに関しては感謝していたが、いかんせん色々トラブルが多すぎた。そして、今まさに新たなトラブルが起きる寸前だろう。

日本人に見える楓と美鈴だけならばこんなに注目を浴びなかったはずだ。

しかし、外国人であるシェリルが加わることによって三人の美顔がさらに引き立てられている。

どれをとっても美しいという言葉しか出ない。

いや、最早美しいを通り越して畏怖すら感じられる。

行く先々で人混みが見事真つ二つに割れてゆく。

皆一度立ち止まりその顔を惚れればと見ている。そのためか只でさえ渋滞しやすい道がさらに渋滞して「おい、何止まってんだ！」「うるさい！前の奴が止まってんだよ！」と言う具合にみんなのイライラが溜まるという悪循環が出来上がってしまった。

しかし、当の本人達は気付いていないらしく色々な出店を見て回りはしゃいでいる。

「兄さん、何してるんですか。置いていきますよ」

周りの男たちの視線が廉也（実も含む）を貫く。

「お、おう。今行く」

少し怖じ気つきながらも廉也と実は三人の後を追う。

途中にナンパを仕掛けてくる男どももいたが三人には指一本触れさせないまま御退場願った。

もちろん廉也とて殺しが好きなわけではないので殺してはいない。

先日美鈴と戦ったときに覚えたあの雷撃を使っており、話しかけようとした人には仲良く気絶してもらっている。

かなり使い勝手がよく廉也は一人で感心していた。実もだんだん気付き始めたらしく「俺にはやるなよ」と念を押してきたので廉也は苦笑一つに「やらないよ」と答えた。

さすがにこれを友人に使うのは気が引ける。

「というか美鈴先輩。何処行くんですか？」

「ああ、そういえば言ってなかったわね。この先の広場で花火が打ち上げられるのよ。今はそこに向かって移動中」

「へー、花火も打ち上げられるんですか。とっ……………」

その言葉途中でクイクイと袖を引っ張られる。

振り返ると新雪のような色合いの浴衣を着たシェリルが廉也を見つめていた。

「どうした、シェリル」

「アレが食べたいです、廉也様」

するとシェリルは向こうの屋台を指さした。

「ん、じゃあ美鈴先輩先行っててください。アレ買ったらすぐ追いつきますので」

「そう？分かったわ。いくわよ楓ちゃん堂本君」

楓は名残惜しそうにしていたが廉也が「すぐ追いつくから行って」と言ったら納得したのか駆け足で美鈴の元へと走って行った。

「さて…………と、じゃあ行くかシェリル」

「はい、廉也様！」

この屋台はどうやら林檎飴を売っているらしく廉也は「なつかしいなあ」と呟きながら列へと加わった。

しばらくして順番が回ってき、林檎飴を三つ購入する。

一つはシェリル二つは楓三つは美鈴先輩にだ。

「廉也様は食べないのですか？」

「ああ、俺は甘い物が少しばかり苦手だからね。実は俺みゆ以上に甘い物嫌いだけどね」

楓の場合は辛い物も甘い物もOK（もちろん辛い物方が大好きなわけだが）で美鈴の場合はこの前学校の生徒会室で一人でケーキをワ
ンホールも食べていたから大丈夫だと思う……..
あのシーンを思い出すだけで気分が悪くなる。

「そうなのですか」

意外でしたと言わんばかりに目を見開く。

「はあ、俺そんな甘い物好きに見えるか？」

「は！すみません！私そんなつもりじゃ……」

「ふふつ、冗談だよシェリル。どうだ？林檎飴はおいしいか？」

シェリルの頭を撫でながら優しく問いかける。
「はい、この世のものとは思えないくらいに。この飴の中に林檎が入っている事自体興味がそそられます」

少々過剰なシェリルの評価に廉也は苦笑で答える。

「そうか、それは良かった。じゃあ美鈴先輩と合流しよう」

シェリルの手を握り足早に広場へと向かった。

祭りの風景を一望できる展望台

明かりは何一つないがそれでもはつきりと見ることができる。

普段ならばここにも大勢の人が訪れるのだろうが今夜ここに訪れる人は誰一人としていない。

辺りは異様な狂気に静けさを保っている。

『さあ、準備は整った。我々も祭りを始めるとしよう』

漆黒のローブを被った男？は残り三人に演説するかのように両手を広げながら嗤った。

シエリルは内心かなり焦っていた。

外見の表情は何でもないような無表情を貫いているが蓋を開けてみればてんやわんやで混乱の真っ只中にいた。

この混乱の原因は多分この握られている手だろう。

そこに握られている部分に視線を移すと自分でもわかるぐらいに顔が赤く膨張して熱い。

廉也は何も気づいていないというのが唯一の救いだろう。

（何なんですか、一体）

こうしている間にも意味のわからない心のボルテージが急上昇していく。

多分この胸の高鳴りは握っている手を放せば静まってくれるであろう。

しかし、手を放そうとするたびに自分の何処から惜しい、離したくない、と声が響いてくる。

（理解できません）

ヒュー

突如どこからか風が靡く。

燃え上っていた頭の思考回路はそれだけで冷めていき冷静さを取り戻す。

廉也も周りをしきりに気にしている。

（どうやら、廉也様も気付いているようですね）

「廉也様」

小声で囁く。

「ああ、分かっている。空気が変わったからな。美鈴先輩も恐らく気付いていると思うが……。いずれ来るだろう。ひとまず俺たちだけで向かう。行けるか？ シェリル」

「はい、問題ありません」

そう言っただけで向かい側に位置する山へと足を向ける。

風と共に靡いてきた声

『山の山頂、展望台にて待つ。応じなければ分かっているな？』

こちら辺の山でなお且つ展望台があるとすれば一つしかない。

向かい側に位置する小山の事だろう。

そして、明らかな脅迫

応じなければこちら辺の人々を皆殺しという意味だろう。

そうすればもちろん秩序が介入してくる。

どれほど高位な神、悪魔、天使、魔物でも秩序には逆らえないし、抗えない。

つまり敵はソレ全てを承知して仕掛けていているという事。

（やりにくい相手ですね）

シェリルは舌打ちしたくなるような気持ちを抑えながら廉也とともに走る。

握っていた手はいつの間にか離れていた。

「ここか……」

山の展望台にたどり着いた二人を待ち受けていたのは100メートルくらい開けた空間と綺麗な夜景であった。

だが、警戒は怠らない。

敵は恐らくこの山に足を踏み入れた瞬間から気付いているだろう。結界がこの山自体を覆っているからだ。

そしてこちらを値踏みするような粘つく視線。

（勘だが四人つてところか？）

それは当たっていた。

刹那——暗黒の空間から出てきた四人

「気を付けてください、悪魔です」

シエリルが注意深く相手を睨む。

（悪魔……か。初めてみるが……）

全員が黒いローブを被っており、顔はおろか性別すらわからない。まあ、関係無いことだが……

しばらくの沈黙の後、悪魔の一人が前に出た。

『お前が神崎廉也、隣は支配者の使いで間違いないな？』

「そうだが、まずは自分から名乗るのが礼儀ではないのかな？」

それに反応するように四人の悪魔が薄気味悪く嗤う。

『これから死ぬ者に名乗る名など……無い!!』

こうして戦いの火蓋は切って落とされた。

悪魔達は何処から出したのか分からない武器をそれぞれ手に廉也へと襲いかかる。

一人目は槍、二人目は剣、三人目は鞭、四人目は杖恐らく魔法使いか何かだろう。

迫りくる敵を目の前に廉也は一步も動かない。

槍をもった悪魔は少し躊躇いを見せたがそれも一瞬の事、槍は容赦なく廉也を貫く。

勝利を確信した悪魔達は次の瞬間信じられない者を見るかのように眼を見開く。

槍は廉也を貫く事はおろか触れることすらままならないまま真つ二つにへしおれたのだ。

「なんだ、悪魔と言っても弱いんだなお前ら」

廉也は何もしていない。

いや、もししたというならば魔法障壁を展開したことぐらいだろう。されど魔法障壁。

廉也の魔法障壁は二級悪魔の攻撃では傷はおろか触れることすらできない。

つまりこの敵は少なくとも二級悪魔かそれ以下と言う事になる。端的にいえば……敵にすらならない。

驚愕で固まっている敵に真紅の雷撃を喰らわす。

男と思われる悪魔は『ぐえ』と小さな悲鳴を残して絶命した。

残り三人

だが最早、勝負は決していた。

廉也が雷撃を纏った時点で勝負は決まっていたのだ。

押し寄せるは恐怖

迫りくるは死

刹那——大量の赤い雷撃の嵐が空気を切り刻む。

さらに雷は意思を持ったかのように三人の悪魔達へと殺到する。

剣を持った悪魔はある程度捌いているようだったが明らかに雷撃の数が多すぎる。所々に傷が付きソレを庇うように戦っているものだからさらに傷が広がる。だが、身体能力はさすが悪魔といったところかずば抜けている。

残りの鞭と魔法使いらしき敵は最初の一撃でこの世から消えている。

『さすがは、選ばれし者と言ったところですね』

剣で雷撃を上手く捌きながら悪魔の女性？がこちらを見る。

「まだ、喋る暇があるのか？」

『無いに決まってるじゃないですか』

随分と親しみやすい悪魔だなと思いつつ何故か雷撃を止めてしまう。相手もそれに疑問を張り付けた顔で答える。

『なぜ、止めたんですか？』

「いやね、お前が話せる悪魔だと思ったからだよ。ローブ取ってくれるか？」

不承不承ながらも分かってくれたのか、悪魔が頭のローブを脱ぐ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず絶句してしまった。

そこに現れたのは美しいと言うよりも可愛いという方が似合う黒髪の美女であった。

この女性が悪魔という事実を否定したいくらいである。

シエリルを見る。

相変わらず無表情だ。

「名前は？」

「アリシア・リーデルト」

「アリシアか。じゃあ質問だ。お前は誰の命令でここに来た？」

「魔王様、と言いたところですが私は独断でここに来ました。残り三人は分かりませんが……それと元々貴方にも興味がありましたから」

「それは光栄なことだ。で、結果どうだった？」

「楽しかったです！」

「………た、楽しかった？」

予想の斜め上をいく突飛な回答に廉也は呆気にとられ、声が上ずる。

「あ、はい。私達悪魔は基本、戦闘狂が多いので。だからあまり死という概念に拘らないんですよ」

「ほお、それは初耳だ。そうなのか？シエリル」

「いえ、私も初めて聞きました。私は倫理には精通していませんので。詳しいのは随時情報が入ってくる情勢ですね」

「そうか………ならコレは魔界による宣戦布告でいいのか？」

その問いかけに首をブンブン横に振り否定するアリシア

「違います！今回は我々の独断なので。本来ならば魔界、天界は様子見という方向になっていますから」

「そうか、それは良かった。じゃあ、サヨナラだ。アリシア」

言い終える直前に雷撃を腕にまとい振りぬこうとする。

雷撃で貫く事も考えたがそれは面倒なので腕に纏うという行程を選んだ。

アリシアの顔は終始満足気だ、ソレに舌打ちする。

こんな満足気な表情をされたら殺しにくい。

しかし、無情にも雷撃はアリシアに狙いを定めその首を狙う。

バシユッ

——真紅の雷撃が消えた。

辺りは静寂に包まれアリシアはいつまでたっても訪れない死に疑問を寄せていた。

アリシアは閉じていた目を恐る恐る開くと目の前には選ばれし者、神崎廉也が目を見開いて彼女の後ろの虚空を見つめていた。

少女は知っている。

この気配を。

嘗て魔界の悪魔達を震え上がらせた史上最強の悪魔を。

だが、少女の口からその言葉は出ない。

やがて、もう一人の銀髪の女性が答えた。

「魔王、ルシファー」

巻き起こったのは驚愕

シエリルが発した名前

「魔王、ルシファー」

最初は何の冗談か、と思った。

ゲーム序盤で出てくるラスボスがどこにいるのかと

ならばこれはフェイクで本物は別に……考えられない。
そんな思考を切り捨てる。

これがフェイクだとしても廉也は潜り抜けられないだろう。

いや、こんなのがフェイクならばそれこそ何の冗談だ。

上空に佇む漆黒の男はその存在だけで日本列島を滅ぼすことが可能
だろう。

それだけではない。一週間もあれば世界すらも滅ぼせる。核兵器な
ど目の前の男に言わせてれば赤ちゃんの玩具かそれ以下なのだろう。

「こんなので物語が終わるのならば失笑ものだな」

誰かが呟いた。

「いや、そんなのはつまらない。つまらなさすぎる。そうだろう？
魔王ルシファー」

廉也は二度驚愕する。

誰かの呟きかと思っていた言葉は自分がいっていたからだ。

「くくくつ、ならばどうする？神崎廉也」

答えは単純明快

「お前を殺す」

合図は互いの殺意

廉也は全力で魔法障壁を幾重にも展開する。

パチン

ただそれだけの指を鳴らすだけの動作で魔法障壁は崩れ去る。

何重にも張り巡らしたのにも関わらず、だ。

「ぐっ」

魔王は未だ一步も動かない、周りに幾つもの赤黒い炎をつくり何百の矢となって廉也を襲う。

それを廉也が持ち前の身体能力でかわし、捌きながらルシファーに肉薄し、接近戦を演出する。

片方は真紅の蓮華、片方は漆黒の煉獄互いに打ち消し、混じり、交ざる。

それは儚いイルミネーションのように彩られていく。両者一步も引かぬ殺し合い。

小さな拮抗、大きな亀裂。

だが徐々に真紅の蓮華が押されていく。

技能、力、能力、その全てを圧倒している漆黒の煉獄は最早誰にも止められない。

「その、程度か！神崎廉也！」

「ダメレ、魔王！」

そんな死闘の中、罵り合いの中でも二人は笑みを浮かべ会っている。炎は確実に廉也の体を侵食してゆく。

腕、足、胴体、顔、そのどれもが傷だらけだ。

口の中も鉄の味しかない。

廉也は走馬灯のように今までの事を思い出す。

.....

（やべ、何も出ねえ！！！！）

思わず自分を笑ってしまった。

どうやら自分はまだ死ねないらしい。

だが、この状況は100%死ぬ。

そう言ってる間にも赤黒い炎は廉也を串刺しにしようと魔法障壁を壊して伸びてくる。

生憎そこは直撃コース

「——っ！！終わったな」

「終わらせないわよ？」

突如飛来してきた光の突風

この突風により全ての魔法が吹き飛ばされる。

ルシファアの魔法障壁と煉獄の炎はおるか廉也のまで吹き飛ばす。廉也だけはこの状況を薄々勘付いていた。

二人の間に舞い降りたのは一人の堕天使

その両眼がゆつくりとルシファアへと向けられる。

「懐かしい気配に誘われてみれば、まさかあなたとはね？魔王ルシファア」

今回何度聞いたかわからない名前を言いながらゆつくりとルシファアへと近づく美鈴。

「ははははは、久しぶりだな。まさか、人間界にいたとは……
……」

「ふふふっ、意外でしょう？でも暇つぶしにはもってこいだわ」

ルシファ―は自分の髪をワシヤワシヤ掻きむしりながら

「確かに楽しそうだ。よし、帰るぞアリシア。いくら俺でも天上の担い手とは戦いたくないんでね」

「へ？え？」

そう言つて大きなブラックフォールのような穴を目の前に形成するとアリシアを掴みあげえヒョイとその中へと放り込む。

あとから「キヤアアア！」と声が聞こえてきたのは気のせいだろう。

「それじゃあ、またな。神崎廉也と天上の担い手よ」

それだけ言い残すと魔王は漆黒の闇の中へと紛れこんで消えた。

止まっていた時が動き出すように風が優しく吹いてくる。

どうやら美鈴は結界ごと魔法をふっ飛ばしたらしい。

あの後廉也とシェリルと美鈴は無事楓と実に合流した。

ちなみに廉也の怪我や衣類の損傷は全てシェリルが直してくれた。

攻撃魔法は出来ないらしいが治療魔法と物に対してのみ時間逆再生ができる能力があるらしい。

ただし、時間逆再生能力は一日3回のみで壊れてから24時間以上経った物には使えないとの事だ。

そんな訳でただいま綺麗な打ち上げ花火を五人で観賞している。

色とりどりの花火が夜空にミスマツチしてとても美しい。

（だけど、こうしていられるのも全て美鈴先輩のおかげなんだよなあ）

そう思うといくら感謝しても、し足りない。

「美鈴先輩」

「なにかしら？」

「ありがとうございます」

キョトンとした顔の美鈴はその言葉の意味を理解したのか優しく微笑む。

「どういたしまして」

そんな中この中で唯一状況を知らない楓だけが廉也の隣でどうかしたんですか？という顔をしていた。

P S、林檎飴は魔王がおいしく頂きました。

第十二話魔王降臨（後書き）

魔王も大概戦闘狂ですね。

あと1〜2話で夏休みが終わります！！

ああ、それと感想の関税自主権撤廃しましたからどんどん来て下さい。

え？嫌だ？ははあ、あなた方も随分とDSなのですね。

だが御安心を！！俺はDMだ！！！！

第十三話魔の愛情（前書き）

アリシア大好きだ――！！！！！！

第十三話魔の愛情

渴いた大地

ソレを潤すのは多大な鮮血

この大地を埋め尽くすのは憎悪

強き者こそが正義

ならば弱きものは悪なのか？

悪などではない、ただ罪なだけだ。

・・・何度この答えに行きついたのだろうか。

一度や二度ではない。

弱きことこそが罪、そこに一生を懺悔で費やしても埋まらない差がある。

絶対的な力、圧倒的な正義

いくら勉強に励んだとて、いくら血の滲む努力をしたとて、天賦の才には敵わないのだ。

戦術に戦略が負ける事も多々あった。

あの魔王ルシファーが良い例だろう。

特級悪魔10名と今は亡き魔王が総出で挑んでも勝てなかった存在も、何千年も昔の事なので最早伝説と化しているが決して偶像の話ではない。

「はあ・・・」

いくら考えても答えなど出るはずもない。

答えこそないのが答えなのだから。

彼女はそう思いながら薄暗い廊下を歩いていた。

彼女の名はドルカス・マジステイル・リーデルトこの魔界で10名しかいない特級悪魔の一人だ。

艶やかな腰まである黒髪に豊潤な胸、顔は凛々しく妖艶で見るものを惑わすような危うさを兼ね備えている。

「それにしても魔王陛下は何処へ行つたのかしら」

昨日高笑いしながら魔王城を歩いていたから嫌な予感しかないが、流石に人間界に行くことは無いだろう。

先日の会議で選ばれし者については様子見と言う事で決まったはずだからそれだけは絶対に無いはずだ。

そんなことを思案しながら歩いていると前から元気よく此方にかけてくる少女を発見する。

「お母様!!」

そう言つて抱きついてきた少女

母親譲りの艶やかな黒髪を一つに結つてポニーテールにして、顔は凛々しいというよりも可愛いらしく16歳にもなるのに未だ無邪気さを残している。性格も無邪気なのはいいが純粹無垢の戦闘狂というのがたまに傷だ。戦闘狂は多分父親譲りだろう。

「あらあら、この子は。何処へ行つていたの?心配したのよ?」

「ごめんなさいお母様。少し人間界へ行っていました」

「・・・アリシア?ちょっと其処らへん詳しく教えてくれる?」

アリシアの顔が非情に引き攣っている。

自分でも分かつている。

今自分の表情は冷たく冷静に嗤っているだろう。

「お、お母様?」

「ああ、もういいわアリシア。そのバカに聞くから」

そう言つてドルカスの能力が虚空の空間を固定する。

「そろそろ出てきたらどうですか?魔王へ・・・か!!」

次の瞬間固定していた空間を握りつぶす。

「ちよっ！！おま、殺す気が！？」

慌てて出てきたのは魔界を統べる王、ルシファー

「魔王のあなたはこのくらいでは死なないでしょう？それよりも説明してくれるわね？」

空間から慌てて出てきたルシファーはドルカスに跪くような形で対峙している。

「あの、立つてもよろしいでしょうか？」

「だめ。貴方には反省してもらわないと」

「俺、魔王なんだけど？」

「私はその妻ですが？」

「はい・・・・・・・・すみません。あの、アリシアは？」

「アリシアなら何処かへ行きました」

「さ、さいですか」

「ふむ、端的に言うただただ面白そうだから行っただと？」

あの後ルシファーの話を聞き終えたドルカスは未だ跪いているルシファーに軽蔑の眼差しを向けていた。

傍から見たら何処のSM夫婦かと

「・・・・・・・・その通りです」

ドルカスの額に青筋が刻まれる。

「まったく・・・・・・・・貴方と言う人は・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・あくまでです」

「死んどきますか。自分の娘も巻き込んでからに」

ルシファーの頭に空間を固定する。

その時だった。

「お母様！お父様を責めないでください！」

ドルカスの横合いから飛び込むようにして抱きついてきた愛娘アリシア

「お父様は私が付いてくるのに反対したんです！ですが私が無理やり付いていきたいと言ったばかりに」

愛娘の必死な懇願に胸の奥から温かいものがせり上がってくるのを感じる。

「アリシア………」

「はぁ、分かりました。今回は許すことにします」

「ドルカス、愛してるぞー！ー！ー！」

その言葉に手を取り合って喜ぶ親子

（まったくこの子たちは………）

「それで、どうだったんですか？選ばれし者神崎廉也の力は」

「「楽しかった（です）！！」」

いや、分かっていた。

こうなることは予想できたはずだ。

だが、だがしかした。

この親子は………

「？どうしたんですか？お母様」

その事を知ってか知らずか持ち前の天然で首を傾げるアリシア。ルシファアは後ろでニヤニヤ笑っている。

「はぁ、アリシアあなたは外で遊んでいなさい」

「はい！」

満面の笑みで頷き走り去ってゆくアリシアを見送った後、ルシファ―がドルカスの横の席に着く。離れるように距離を取るドルカスを無理やり抱きよせ耳元で甘く囁く。

「愛しているよ。ドルカス」

「なっ！！！」

ドルカスは白く艶やかな肌を完熟トマトのように赤く膨張させ俯く。

「くくくつ、かわいいなあ。さすが俺の嫁だ。だれにも渡さん」

「・・・・・・・・・・はあ、それであな。本題は何ですか？」

（さすがは俺の嫁だ。分かっているな）

ルシファ―がこうして甘く囁く時いつも頼みごとがあるときにするのだ。

もちろん、プライベートでもたくさんやるが、さすがにこんな公共の場でしたことは何度かしかない・・・・・・・・

「ああ、アリシアを人間界に行かせようと思う」

大体予想がついていたのか、呆れたという顔でドルカスがルシファ―の瞳を覗き込む。

「理由を聞かせてもらっても？」

「勿論だ。俺とお前の子供だからな。理由は単純、アリシアにはたくさんの世界を見てもらってほしいと思っている。あの神崎廉也という少年もな」

「利用するのですか？自分の娘を」

ドルカスの厳しい視線がルシファ―を貫く。

「いいや、あいつには学園生活を楽しんでほしいと思っている。勉強にも励めると思うしあいつが一番欲しがっている友達も出来るだろう。だが、利用という概念が抜け切るとは思っていない。俺は本

心から娘の幸せを願っているよ」

娘の幸せ

愛と言う名の結晶

自分勝手唯我独尊だった彼に唯一生まれた感情
生を受けると言う名の奇跡

アリシアが生まれた時初めて泣いた。

自分が壊すこと以外出来ることがあったのかと……

寝台で寝ていたドルカスはそれを見て優しく微笑んでくれた。

だから彼はこの世のどれよりも愛おしい存在アリシアとドルカスに、
ずっと幸せで笑っていてほしい、ずっとずっと永久に永遠に
生まれて子の方この瞬間が唯一父親として出来ることだと感じた。
多分今の自分の顔はすごく真面目なんだろう。

「ふふっ、わかりました。アリシアを人間界に送ることを許します。
アリシアも喜ぶと思いますよ」

「ああ、喜んでくれたらいいな……」

これより二週間後アリシアは明桜学園へと赴くことになる。
まだ見ぬ世界へと胸を躍らせながら……

第十三話魔の愛情（後書き）

アリシア大好きだ――――！！！！！！
感想を下さい

第十四話夏の終わり

「起きてください廉也様。もう10時過ぎておりますよ?」

「ん? うん・・・おはようシエリル。もうそんな時間か」

寝ぼけながらも時計の針を見ると確かに10時を少し過ぎていた。

「はい、おはようございます」

シエリルは甲斐甲斐しく廉也を起こしながら微笑の挨拶を交わす。

閑散とした空気

今この空間には自分とシエリルの二人しかない。

もう一人いるべき女性は先週涙ぐみながらこの地を後にした。

「楓はいないんだっただ」

思わずポツリと呟いてしまった事に廉也は慌てて口を閉じた。

恐る恐るシエリルを見ると相変わらず微笑んでいる姿が目飛び込んだ。

「ええ、でもいいじゃないですか。また冬休み?という期間に来ると言っておりましたし」この日本に住んでいる人々にとって何気ない単語疑問形になってしまうのはシエリルの愛すべき所なのだろう。

彼女は確かに歴史を隅から隅まで、言語、生命体のほとんどに精通している。

ただ、彼女の知識も独自の発展を遂げて出来た言葉には滅法弱いのだ。

先ほどのを例えるなら学校を知っているのに夏休みや冬休みを知らない、もっと分かりやすく言うならば細かい事まで知らないという事だ。

それでもシェリルの知識には矛盾点多すぎる。

だがそれも彼女なのだからなどの理由で廉也の脳内には可愛い所もあるもんだ、という事で一つの良さに加算されている。

「はははっ、冬休みか。それじゃあ、また忙しくなるな」

「そうですね。楽しみです」

朗らかに笑って頷くシェリルに廉也も救われたような気持ちになった。

この日世界は晴天だった。

少女の眼には綺麗な景色が広がりその景色のパズルを一つ一つを取ってもどれも色あせることは無く美しく映った。

初めて人間界に降り立った時とは全く違う雰囲気

明るく、活気があり、皆が笑顔で幸せそうにしている。

「んー。気持ちいい」

大きくググツと背伸びをしながら魔界からの転住者アリシアは青天の青空の元、転住の地、自分の活動の拠点ともなる中高層集合住宅^{マンション}の屋上で一人涼しい風を満喫していた。

「あ！そうでした。ご近所に挨拶に行かなければいけないのでしたね」

父母から言われていたことを思い出し、アリシアはさして慌てる様子もなく光の粒子とともにその場から消えた。

再び光の粒子が相まみえたのは空白のページを切り取って部屋中に張り付けたかのような何もない真っ白な部屋だった。ある物としてもベットと机とイスぐらいと到底年頃の乙女とは思えないほどの殺

風景な部屋に一人佇んでいた。

「え……と……確かここに……ああ、ありました」

白い包み紙を巻いた箱を手に取り喜々として外への扉を開け放つアリシア。

向かうは隣の住民が住む部屋

左の部屋は確か空き部屋だったはずなので、右の部屋へと足を向ける。

茶色い落ち着きのある扉の前で少し緊張した面持ちのアリシアが立ち止まる。

すうー、はあー

深く深呼吸をする。いわゆる初体験の事なので失敗は許されない。意を決したアリシアは持ち上げた右手をインターホン……ではなく扉へと連打する。

ダンダンダンダンダンダンダンダン！！

その勢いまさしく借金取りが如く（非常に近所迷惑）

まあ、アリシアの脳内の知識にはインターホンという概念は存在していないのでこれはしょうがない事ではあるが。

暫く轟音が鳴り響いた末、扉越しでも分かるほどのドタバタした音が近づいてきた。

「今、行きます！今行きますから、止めてください！！」

どうやら留守ではないようだ、アリシアはホッとした。

やがてガチャリと扉が開く。

中から出てきたのは如何にも大人しい、悪く言えば暗いといった雰囲気少女が出てきた。

前髪に隠れて顔は見えないが肌は白く透き通ったように美しい。

長い前髪がこの少女の魅力を大きく損なわせていることにアリシアは少し残念に思った。こんなことを考えている場合ではなかった、と再びアリシアは目の前の少女に眼を合わせるとこの少女が怯えている事に気付く。

そんな恐い態度は取っていないはず……最悪のシチュエーションがアリシアの脳裏に浮かぶ。

これではいけないと気を取り直して声を張る。

「こんにちは、今日隣に引っ越してきたアリシア・リーデルトと申します」

丁寧なお辞儀を交わすアリシアに目の前の少女も幾分表情を和らげる。

コレを期と見たアリシアはさらに畳みかける。

「こちらは私の故郷の名産品です。どうぞ、受け取ってください」
完璧だ……。この少女の反応をみれば一目瞭然。あきらかに先ほどとは違う好意を寄せてくれている。こうしてアリシアの初御近所付き合いは成功に終わったのであった。

「では、私はこれで」

颯爽と自分の部屋へと歩みを進めたアリシアに背後から声がかかる。

「あの！アリシアさん！私の名前は北条晶菜です。これからよろしくお願いします！」

「ええ、こちらこそよろしく願います。晶菜」

振りかえらず肩越しに顔を向けるアリシアは子供っぽい無邪気な顔に一瞬だけ大人の魅力が入り混じっていた。

颯爽と去っていく少女を見送りながら晶菜は一人呆けるように佇んでいた。

最初ドアが壊れんばかりに叩かれた時は借金取りが部屋番号を間違えて自分の部屋を叩いているかと思った。

恐る恐るドアを開けると、艶やかな黒髪をポニーテールのような髪型で後ろに束ね、およそ借金取りには見えない少女が一人がこちらを窺うようにして立っていた。

年は自分と同じくらいで無邪気さを残す顔はとても愛嬌がありすごくかわいらしい。

そして話してみても分かった事だがかわいらしい顔とは裏腹に心の根底はすさまじく芯が堅い。

決して揺るぐことのない瞳がそれを証明していた。

さらにとても優しいときた。

こんな暗い自分とは大違いだ。

「はぁ………」

世界とは何故こんなにも無情な現実を見せ付けるのだろうか。

部屋に戻りながらそういえばと、お土産を貰っている事を思い出した。

なんでも故郷のおみやげという事なので少し楽しみだ。

名前が外国人の名前だったから故郷も外国だろう。

白い包み紙を開けると何やら意味の分からない言葉が羅列していた。まあ、外国の製品なのだから地元の言葉だろうと特に気に留めなかった晶菜は箱をパカリと開く。

「……明太子みたいなやつかな？」

箱の中に入っていた赤い物体

明太子に似ているソレはなんか微妙に動いている。
「……………って動いてる！！??」

モゾモゾ…………ギョロリ

その箱の中で蠢く赤い物体と眼があつた。
暫く見つめ合う一人と一匹（他数匹）
無言で蓋を手に取りパタリ閉める晶菜

「うん、見なかったことにしよう」

あと、後でアリシアに文句を言おう。

うん、これは絶対に…………決定事項。

挨拶が成功に終わった事でアリシアは晴れやかな気持ちになつていた。

「ふふふふっ」

もう、なんだか笑いが止まらない。

このような気持ちになつたのはあの神崎廉也と戦つた時以来だ。

あの夜は今でも忘れられない。

迸る閃光、金属と金属が打ち合う事によって生じる摩擦の火花、その感触は今でも残っている。

まだ太陽が頂点に差しかかる真昼間だが何もやることがないので寝るしかない。

明日は始業式とかいう始まりの儀式でアリシアが本格的に学校へ通うのはその次の日となる。

別にアリシアとしては一刻も早く学校に行きたかったので始業式からでも構わなかったのだが、なんでも始業式は挨拶だけで終わるらしいので来ても意味はないそうだ。

という明日は学校が始まる始業式なのだがアリシアは行かないことになっている。

「つまりませんねえ」

そう言いながら気持ちの良い睡魔へと身を委ねるアリシアであった。

第十四話夏の終わり（後書き）

やっと夏休み編が終わりました！
次章からは学園編をお楽しみください。

第十五話 始動

透き通るような青空

緑は青々しく、白で統一された威厳ある校舎は入学希望者には憧れを、在校生には誇りを抱かせる。

そして今、目の前で演説している学園長　おののまえかつらぎ 煌乃前葛城も明桜学園の数多くある名物のひとつと言えるだろう。

「皆、夏休み御苦労だった！！週末にはテストがあるので各自しっかりと実力を発揮出来るようがんばれ！以上！」

壇上が上がって一分も話さずに颯爽と帰る様はさすがは校長といった所か。

長つたらしい演説などは嫌いならしくいつも話すときは一分もかからない。

その事と彼の威厳ある体と顔つきにより生徒間での校長の人気はとても高い。

次に壇上が上がってきたのは二年副生徒会長三鷹美鈴だ。

壇上に上がった美鈴はしばらく視線を彷徨わせた後、廉也に視線を固定する。

廉也としたら、これほど迷惑な事はない。

終始ニコニコ微笑みながら演説を終えた美鈴は最後まで廉也に対して意地悪気な視線を外さなかった。

周りの視線が痛い、というかすごく苦痛だ。

（本当に人の迷惑も考えてほしいだけだなあ）

そんな考えが無駄だということは分かっているのだが、願わずにはられない廉也であった。

そんな感じで予定よりも早く始業式は終わり廉也は生徒会室へと向かった。

大して残した仕事は無いのだが、いつもの日課というやつなので他意はない。

「あれ、もうみんな集まってたんですか」

生徒会室には一足先に生徒会メンバーが勢ぞろいしていた。

「おう、仕事がたんまりあるからなあ」

パソコンのデスクトップ向かっていた一人の男が振り返りながら廉也の質問に答える。

「それは信哉だけです。みんな夏休み中に終わらせています。神崎くんに至っては夏休み前に終わらせているんですよ？」

口を尖らしのパソコンと睨めっこしていた男性を咎めた女性の名は生徒会書記三年柊葵^{あおい}、パソコンの前で座っている男は生徒会長三年^{みず}水野信哉。

「ほらほら、信哉くん？手を動かさないと一生終わらないわよ？」

「へい、了解致しましたよー」

美鈴が笑顔になると信哉は360度回るかのような速さで再びパソコンのデスクトップへと体を向けた。

やはりこの生徒会・・・いや、この学校での最高権力者は美鈴先輩のようだと改めて認識した廉也は思わず苦笑する。

「ああ、廉也くんいい所に来たわね。丁度話そうと思っていたことがあったのよ」

美鈴に促され近く席へと座る。

「それで、何でしょうか？」

「ふふ、そんな身がまえなくてもいいわよ。簡単な事だから」

廉也は知らずと体が強張っているのに気付くとバツが悪そうに姿勢を正した。

それにしても簡単な事とは一体何をするのだろうか？

「実わね、シエリルちゃんを学校に入れようと思うの」

「は？」

予想の斜め上をいく美鈴の言動に廉也は狼狽する。

「ああ、もう入学手続きは済ましておいたから明日から登校ね」

「いや、ちよつと待って下さいよ先輩。なんかもう意味分らないんですが……」

「あら、簡単な事じゃない。明日から学校に来るだけよ？」

何を言ってるんだコイツみたいな顔をされて若干へこむ廉也

「まあ、別に先輩がいつていうなら構いませんが、一応本人に確認します。だめだった時は諦めてくださいよ？」

「その時は正直に諦めるわよ」

「いやあ、これでうちの生徒会もまともなヤツがいなくなったなあ」
笑いながら話しかけてくる信哉に廉也は意外そうに目を見開く。

「全部知ってるんですか？」

「ああ、もちろん。といってもお前が選ばれし者と言う以外は知らんがな」

「なるほど、それにまともな奴がいなくてどどういう意味ですか？」
その問い掛けに葵が答える。

「その言葉のまんまの意味だよ。私は吸血鬼、信哉は狼男ね」

癖の無い赤毛を揺らしながら人懐っこい笑顔を廉也に向ける葵。

「……まんまですね」

廉也としても別段驚きは無かった。

前々から二人の事はそれっぽいなあ、と思っていたわけであって廉也は今回の事で確証を得たにすぎなかった。

信哉は何かとむさ苦しく仕事が長引き夜になると急に吼える事があったし（そのたびに葵から罵倒されている）、葵にしても十字架をやけに嫌がる節があったし、血を見ると途端に眼を輝か舐めようとするし、太陽が昇っているときはいつも具合が悪いのだ。

まあ、驚きが完全に無かったかと言えば嘘になるが………

「あら、あまり驚かないのね？けどそちらの方が好都合ね」

「そうですね。こちらから話すことは特にありませんが、廉也は何かある？」

廉也はしばらく腕を組みながら色々思案する。

そこでどうでもいいことを思いつく。

「この学園ってどのくらい人間じゃない人がいるんですか？」

「うーん、ほとんど人間じゃないわよ？」

その言葉に思わず絶句する廉也

「だってそうでしょう？勉強も運動部も他校に比べ圧倒的なのよ？人間じゃない方がおかしいじゃない」

確かに美鈴の言葉は的を射てる。

この明桜学園は偏差値75以上運動部に至っても全てにおいて全国レベルなのだ。

まさしく文武両道を極めた理想の学校と言えるだろう。

その学園の大半が人間ではない。ばれたら大問題ではないのだろうか？と廉也は焦った。

「ふふつ、それなら安心していいわよ。ちゃんと其処らへんの規則は厳しいし自分のコントロールも出来ない亜人達はこの学園にはい

ないから」

「そうですか……って先輩は心が読めるんですか？」

「顔に出てるわよ。まあ読もうと思えば読めるけど」

真顔で言う美鈴に廉也は冗談ではないと悟った。

「そんな所でいいだろう。今日はもう早めに帰ろうぜ」

いつの間に移動したのか廉也の肩に手を置きながら喋る信哉

「信哉は仕事終わったの？」

葵のジト目に胸を張って信哉が答える。

「勿論だ！俺を誰だと思っている。ホレこのように」

「……どう計算したらこの答えになるのかな」

「ビクッ！！！」

ゴゴゴッとは何処からともなくBGMをならしながらガシッ！と信哉の頭を鷲頭上する葵の表情はさながら阿修羅像といった所だった。

「やり直し、分かってるよね」

「はい！すんませんした！！」

すぐさまデスクトップに向かった信哉の顔にはしっかりと恐怖が張り付いていた。

「まったく、あのバカは」

その始終を見ていた廉也と美鈴は本人達は分からないぐらいに生温かい目になっている。

「二人のコントはいつ見ても飽きないわね」

「失礼ですね、美鈴さん。誰があんな毛むくじゃらなんかと……

……」

「ガ——ン」

向こうで落ちこんでいる狼男を無視して葵は罵倒の言葉を次々に口にする。そのたびに落ち込んでいる信哉を見ると廉也は哀れでならない。

「葵先輩、そろそろいいんじゃないですか・・・？信哉会長も落ちこんでいますし」

横目で信哉を見てみると眼から涙を流していた。

「・・・まあ、廉也くんがそういうなら許してあげようかな」

「クスクス、面白いわねえ」

片手を口にあてながら上品に嗤う？美鈴に葵は少し顔を赤らめる。その光景に首を傾げ疑問符を呈している廉也。

「さあ、信哉くんは居残りとして私達はどうする？解散と言う事でいいかしら」

「そうですね。いい感じに時間が潰せたのでそろそろ帰りたいと思います。シェリルにも今日のことを伝えないといけないので」

「私はもう少し残りますよ。信哉がさばらないように見張つとかないといけないので」

解散という言葉聞いて秘かに狂喜していた信哉の希望はここに碎かれた。

とある男女二人の帰り道

傍目から見れば彼氏彼女に見えなくもない。

「・・・美鈴先輩の家ってこっちでしたっけ？」

「あら？知らなかったの？私と廉也君の家結構近いのよ」

「そうですか」

それ以来ぱったりと話題が止んでしまったこの状況を廉也は不思議と窮屈とは思わなかった。

それ以上に得体の知れない安心を密かに感じる。

多分だが、絶対強者足りえる美鈴の隣だからこそ感じる安心なのだろうと廉也は推測した。

しかし、唐突な質問によってその雰囲気は終わりを告げた。

「ねえ、廉也くん」

「何でしょうか、先輩」

「あなた、自分が弱いと感じているでしょう？」

「・・・・・・」

「あー、少し違ったかしら。廉也君ルシファーと会ってから少し変わっているわよ。時折暗い顔したり呆けている事が多くなったり」

「ははっ、気付いてましたか・・・・それは正解ですね。はつきりいって自分とあの魔王の力量の差には絶望を抱きましたよ。明らかに手加減されてましたし」

自嘲気味に自分を笑う廉也に美鈴はゆっくりと首を振る。

「そうね。ルシファーは明らかに手加減していたわ。多分力の100分の1も出していないわね。本気を出したらこの小さな島国は軽く吹き飛んでいる・・・・ってこんな事はどうでもいいのよ。つまり私が言いたいのは貴方は強くなる気があるのかっていう事よ」

廉也を真摯な目で美鈴は見つめる。

最初は若干戸惑いを見せていた廉也だが、次第にその眼は決意に固

まっっていく。

「はい、強くなりたいです。できれば全てを守れる力を」

「ふふっ、全てを守りたいなんて強情ねえ。でも気に入ったわ。私が鍛えてあげる」

「いいんですか？」

「もちろん。そのかわり覚悟しなさい。私の特訓は厳しいわよ」

「ははっ、お手柔らかによろしくお願いします」

日は天高く昇り二人を煌々と照らしていた。

第十五話始動（後書き）

あばばば

投稿しちまったZE

後悔はしてないZE

これからどうしようかな

書きたいこといっぱいあるんだよなあ

廉也君の能力とか美鈴っちの腹黒さとかさ。あと最高神とか天界も
書かないとなあ

………メンド（笑）

冗談でう、喜んで書かせていただきます！

第十六話 運命の螺旋（前書き）

俺はなんてバカなんだ!!

バレンタインデーに風邪をひくなんて!!!!!!!!!!
くそう。。。。

俺が風邪をひいている間にみんなはおいしいイベントを・・・・・・
え？美味しいじゃない？甘いイベントだって？消えうせる!こんの
リア充がああああ!!

そんな思いで仕上げた作品です。

内容はバレンタインデーとはまったく関係ありません（笑）

第十六話運命の螺旋

くるくる回る運命の螺旋。

紡ぎ紡がれ紡ぎ合う。

そして今ここにもう一つの運命の糸が出会いを告げる。

「早く行きましょう！廉也様」

「OK、少し落ち着けシェリル」

「これが落ち着いていられますか！廉也様と同じ所に行けるなんて夢みたいです」

そんなシェリルの珍しい姿に少し苦笑しながらも大事な一言を付け加える。

「学校にいくんだから制服つけないと駄目だろ？いくらなんでも私服は拙いしな」

そこでようやく気付いたのかハッとした表情になる。

「そうでした、私としたことが迂闊でした」

先ほど廉也から手渡された制服（ちなみにこの制服は昨日帰って来たときに配達されていた）に一瞥するといそいそと着替え始める。

「……………つて、ここで着替えるな！！！」

「え？駄目なんですか？」

「駄目だ！男の前でそんな簡単に素肌をさらすな！」

少し古い考えかもしれないが、これからのことも考えるとなるべく変な行動は無くしていかなければと廉也は思う。

「大丈夫ですよ。こんな事廉也様以外しませんから」

それはそれで駄目だ、と廉也は厳しく言いつけシエリルは渋々と言った感じで隣の部屋で着替えるためリビングを後にした。
しばらくして………

「お待たせしました」

「お、それじゃあいくか」

やはりこういう事も予め予測して時間に余裕を持たせたのが功を奏したようだ。

ちようどいい具合になった時間を見て二人は玄関の扉を開けた。

起きたら朝だった。

本当に何の変哲もない朝。

頭が覚醒して行くうちに朝日がアリシアを照らす。

「っ、ヤバイです。早く支度しなければ」

急いでベッドから降り手早く歯を磨き朝食を食べ制服に着替える。
ときどきうつらうつらとなるがそのたびに頭を振って気合を入れる。
ちなみにこんなアリシアは一週間寝続けたという記録を持っている。
それほど睡眠に強欲なのだ。

この人間界には目覚まし時計と言う便利な道具があるのだが、人間界に来たばかりのアリシアがそれと出会うのはまだまだずっと先の

お話。

迫りくる睡魔と闘いつつ準備を整えると時計を見る。

時刻は7時40分……なんとか予定に追いつきホッと胸を撫で下ろしながら玄関のドアを開ける。

外に出ると不意に隣の部屋の扉が開いた。

どうやら隣人の女性も出かけるようだ。

確か名前は――

「晶菜……でしたか。おはようございます」

後ろから突如声をかけられた晶菜はビクツと体を震わせるが次の瞬間アリシアの姿を見て安心したかのような表情になった。

「ああ、リーデルトさんですか……ってええ？」

しかし晶菜はアリシアの姿を見て安心した表情から驚愕の表情へと色変わる。

そんなアリシアも晶菜の姿を見て驚いたように目を見開く。

「もしかして、同じ学校ですか？」

綺麗にハモった。

「ふふっ」

「はははっ」

「でも、どうしたんですか？確かリーデルトって人はいなかったはずですが……」

「ええ。今日から一年部に転入してきたんですよ。あと私はアリシアで結構です」

「なるほど。ならアリシアさんで」

「はい。改めてよろしくお願いします。晶菜」

そう言って手を差し出すアリシア。

「あ……こちらこそよろしくお願いします」

最初は手を差し出された事に挙動不審だった晶菜も恐る恐ると言った感じで手を握る。

だが、握ったときに少しだけ見せた笑顔はとても綺麗で美しかったとアリシアは後に語っている。

そんな感じで仲良くなった二人はマンションを降りながら談笑して楽しんでいた。

「もう本当に止めてくださいよ？あのお土産は二度と止めてください」

「そうですか？私の故郷では結構有名なんです」

二人が話しているのは多分あの赤い物体の事だろう。

晶菜はあの物体の事を再び思い出したのか身を震わせている。

「というか、あのお土産の名前は何て言うんですか？」

「あのお土産の名前はですね……」

口を開け言葉途中で制止するアリシア

それを訝しむように見つめる晶菜

しかし、よくアリシアを見ているとある一か所に視線が止まっていることに気付く。

晶菜もそちらに目を向けると丁度向かいのマンションから出てきた男女

男性の方はどちらかと言えばかつこいい部類に入るだろ。

鋭い目つきに引きしまった顔、少し癖のありそうな髪の毛だがソレがとても似合っている。

次に女性の方に目を向けると思わず息が止まってしまった。それほど美しい、否美しすぎるのだ。

透き通るような銀色の瞳、白磁のような綺麗な肌、だがその一つ一つの部品を差し置いて一番心を惹きつけるのはその腰まで伸びた銀髪だろう。太陽の陽光によって煌びやかに光を発し何処か幻想的な雰囲気醸し出している。

そんな女性を見ていると存在の格自体が違うような錯覚に襲われる。隣のアリシアも充分綺麗すぎる部類に入るが、それと同等かそれ以上に彼女は美しかった。

これならアリシアが魅入るのも頷けたのだが、アリシアを見ているとどうやらその隣の男性を見ているようだった。

するとアリシアは一步踏み出したかと思うと凄まじい速さで男性へと駆けて行った。

晶菜はその姿を呆然と見送るしかなかった。

それは突然やってきた。

シェリルに色々と学校の説明をしているとシェリルが突然顔色を変えて

「廉也様アレは……………」

「んー、なんだ？……………っ！ぐはっ！！！」

突如体に訪れた凄まじい衝撃

なんとか男の意地として倒れるのは免れたが、痛みがこれまた凄ま

じい。

胃からせり上がってくるものを堪え、その衝撃の正体へと視線を移す。

その物体は人型で腹辺りに抱きついており頭に当たる部分をグリグリと押しつけている。

廉也は何となくその姿に見覚えがあった。

「……あ、アリシアか？」

次の瞬間その言葉に反応したのかピクリと体を動かししばらくモゾモゾした後、バツと化顔を上げた。

少女の顔に張り付いているのは満面の笑み。それとは逆に廉也は泣きなくなってきた。

主に痛みとやはりその少女はアリシアであったのだからまた戦わないといけないのか？という思いの方で

「名前……覚えてくれたんですか？」

「ん、もちろん。一度聴いたらそうそう忘れないからな」
「嬉しいです」

……

「いや、あのアリシア？そろそろ離してくれないかな？」
「嫌です」

アリシアに即答された廉也はシェリルへと救援信号を送るべく視線を移す。

そこには頬を膨らませて少しご機嫌斜めなシェリルがいた。

「あの……シェリル？」

「絶対的に拒否します」

最後の砦を失った廉也は無理やり離すべく行動を開始する。

「ア・リ・シ・ア・・・！いい加減離せ！！」

「むう、仕方ないですね」

かなりの激戦になると予測していた廉也にとってこれはかなり予想を裏切られた形となった。

もちろん嬉しい意味だが・・・・・・多分

「どうしたんですか、また抱きついてほしいんですかあ？」

「いや、それは勘弁してくれ。ってそれよりもどうしたんだその服」

廉也はいち早くアリシアが来ている服に気付いていた。

それは紛れもなく名門明桜学園の制服であった。

「ふふつ、私も今日入学することになったんですよ？これでいつでも戦えますね」

彼女を見ていると本当に頭が痛くなる錯覚を起こす。
改めて戦闘狂だと認識した廉也であった。

しばらく二人でコント染みた事をやっているともう一人走って近づいてくる影に気付く。

「は・・・あ・・・はあ、ア・・・リ・・・シアちゃん・・・速・・・過ぎ・・・だ・・・よ」

手を両ひざに着き息を切らしながら途切れ途切れではあるが言葉を紡ぐ少女

どうやらアリシアの知り合いらしいが、アリシア達がいた所と個々

とでは50mと離れていない。

たったそれだけの距離で息を切らしているのだからどれだけ体力が無いのだろうと廉也は心の隅っこでそんな気持ちを抱いていた。

「ああ、こちら私の友達晶菜です」

未だ息を切らしてハアハアしている晶菜という少女を尻目に自己紹介をし終えるアリシア。

「はじ……め……まして。北条晶菜で……す。あ、ありがとうございます」

シエリルも心配したのか優しく背中を擦っている。

その光景は何処となく微笑ましく感じた。

「北条さんかな？はじめまして、俺は神崎廉也だ」

「はじめまして、シエリルです」

廉也の名前を聞いた時驚いたように晶菜が顔を上げる。

その顔を見る限りまだ完全ではなさそうだが、さっきよりは幾分顔色が良くなっている。

「あの、つかぬことをお聞きますが、あの学園常時一位で生徒会に入っているあの神崎廉也くん？」

「ははっ、多分その神崎廉也だよ」

困ったような反応を見せるこの中でただ一人の男性とは裏腹に晶菜は顔を赤く膨張させる。

「……っどうしたんですか、晶菜？」

廉也と同様に晶菜の反応に追いつけないアリシアが顔を赤くさせている晶菜に尋ねる。

「憧れなんです……学園一位で生徒会に入っている廉也くん

が」

「廉也は有名人なの？」

アリシアはもしかしたら廉也はこちらの世界ではとんでもない有名人なのかもしれないと考えを新たに持つ。

「違う！ただのしがない学生だよ」

「・・・・・・・・・・」

実際はその後ろに選ばれし者と着くのだが、一般人もいるので気軽には言えないのである。

ちなみに今黙りながらもジト目で廉也を睨んでいたのは紛れもないシェリルであった。

「なーんだ、少し残念」

いつの間にか砕け口調になっているアリシア

彼、廉也としても敬語はやめてほしいと思っていたのでこれは素直に嬉しかった。

「廉也様、時間は大丈夫なのでしょうか？」

ふと腕時計に目をやると時刻は50分を差している。

「やばい！三人とも急ぐぞ！！」

急いで学校に向かおうとするが生憎一人だけ体力が絶望的な子がいたのを思い出す。

彼女に合わせていれば時間がいくらあっても足りない。

アリシアもシェリルも転校初日とあって遅刻だけは拙いだろう。しょうがない、と廉也は最終手段を施行する。

「北条！すまん！」

「え？きやつ！」

廉也はそう言つと晶菜を御姫様抱っこする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言の重圧を捧げる二人組

「どうした、二人とも。急がないと遅刻するぞ！」

「はあ・・・・・・・・・・」

何故か釈然としないものを感じながらも御姫様抱っこされテンパっている晶菜を含む四人は一瞬でその場から消えた――

こうしてなんとか遅刻を免れた四人であつた。

付け加えるならばあまりの速さで晶菜はしばらく気絶していたそう
な・・・・・・・・・・

第十六話運命の螺旋（後書き）

次話から戦闘も織り交ぜて行きたいと思います。
多分ね・・・・・・・・・・・・・・・・W

第十七話（墮）天使の囁き（前書き）

改行入りますかね？

第十七話（墮）天使の囁き

「はあ、何とか間に合ったか」

青年は急いできたように見えるが、その実汗や、息をまったく切らしていなかった。

ただ疲れたそんな表情が浮かんでいた。

なんとなく、教室を見渡せば白の半袖を基調とした制服に身を包んだ生徒が大半だ。

その風景を見ているだけでまだ夏と言う事を頭の中に連想させる。

「廉也、久しぶりっ！」

聞き覚えのある声に振りかえろうとした時

突然背後から抱きついてきた物体

黒姫愛華、黒く短いモブカットヘアに、くりくりとした瞳、明るく顔も良い事で知られ男子女子問わず高い人気を誇っている。

「はいはい、久しぶり。ていうか降りろ。視線が痛いから」

主に男子から視線のと言う名の殺気の集中砲火を喰らっている。

「駄目だぞ」。廉也夏休みは一度も会いに来てくれなかったんだから」

「当たり前だ。用もないのに会いに行くか」

後ろからムツとした雰囲気伝わってくる。

「な、なんでよ……あんなことまでした中なのに……」

廉也の背中から降りてわざわざ泣きまねをする愛華にさすがの廉也も顔を引き攣らせる。

「ハイハイ、じゃあ絶交するわ。じゃあな」

「あー、待つてよ！冗談だから！それだけは」

自分の席へ着こうとする廉也に愛華が必死にすがりつく。

「……それこそ、冗談だから。ていうか継り付くふりして抱きつこうとするな」

ベシッ愛華の頭から軽快な音が鳴る。

愛華の頭を叩いた後、辟易したような表情で席に着く廉也。

周りはいつもの事かと特に気にした様子もない。

そうコレはほぼ毎日教室で繰り返されている事なのだ。

主に愛華と実がふざけたり、廉也が実をいじり倒したりなど夏休み前（一学期）に繰り返されたコントの数々はこのクラスの名物と化している。

「うゝ、痛いゝ」

涙目の上目ずかいで廉也に訴えかけてくる絵は中々に破壊力は高いが、廉也の日頃から培われてきた免疫はビクともしない。

「当然の結果だ。少しは反省しろ」

もちろん廉也とて真面目に言っている訳ではない。

こんなセリフ腐るほど行って来たのだ。

それでも治らない愛華の場合、一つの個性としてみんなに受け入れられている……のか？

「むうー。あ！そうだ！今日転入生が来るんだって！」

「ふーん、そうなのか」

あくまでポーカーフェイスを貫く廉也だが内心はかなり焦っていた。ソレもそのはず。

シエリルの転入が決まったのは昨日今日の話なのだ。

愛華のその人気から来る情報網は侮ってはいけないと思っていたがまさかここまでとは。

廉也は微かに戦慄を覚えた。

「あれ、そんなに感心しないの？転校生だよ？この高校生生活に数えるほどこ来ない転入生だよ？」

「いや、そう言われても。じゃあ、逆に聞くがどう反応すればいいんだ？」

「………うわお！それはとてもHappyな知らせだね！みたいなの？」

「もついい。お前に聞いた俺がバカだったわ」

はあとため息を吐いた廉也は実がここにいないことに気付き、愛華に聞こうとした時。

ガラガラ

教室のドアが開くとともに担任の岩倉友則いわくらともすけが入ってきた
「お前ら席につけ。ホームルーム始めるぞ」

「つと今日はここまでにしようか。お前らに紹介したい転入生がいる。入っていいぞ」

その言葉に明らかに色めき立つ男子と女子
一気に教室中が騒然とする中、綺麗な銀髪を靡かせながら少女が教室のドアをくぐった。

曰く——この世にこのような芸術が存在するのかと。

先ほどまでの騒然とした空気とはうって変わり皆が皆その芸術に見惚れていた。

銀河を思わせるような淡く輝きを放つ銀髪に初雪のような白い肌。
唇は赤く控えめな大きさで保ちながらも何事もはつきりと自己主張を表現するに相応しいラインを持ち合わせている。瞳は全てを飲み込むような青。大河、大空そんな生半可なものでは代用が利かないほどだ。

「はじめまして。今日からこのクラス転入してきましたシエリルと言います。みなさんとは仲良くできればいいなと思っていますのでこれからよろしくお願いします」

紡ぎだされるはよく透き通った声

今人気のアナウンサーでも比較できないほど綺麗な声。

担任の友則でさえその存在に気圧されていた。

「ね、ねえ。あの子すごすぎない？」

廉也の後ろの席にいる愛華が小声で話してくるが、いつもの音量になっっている。

本人は気付いていないらしいが。

だが、愛華の言葉を起爆剤にクラスの人々は思い思いの事を口にする。

騒然とする教室にとりあえずといったふうに担任の友則がシェリルを席へ促す。

席の場所は廉也の斜め右上ちょうど愛華の隣だった。

「よろしくね、シェリルちゃん。私は黒姫愛華。愛華でいいよ」

「はい、よろしく願います。愛華」

笑顔で握手し合うシェリルと愛華はクラスの注目の的になっていた。そこにその空気を打ち壊すヤツが現れた。

バシャン！

教室の扉が思いっきり開かれる。

「すみません！おくれましたー！！」

この時教室の生徒たちの気持ちは一つとなっていた。

『ああ、やっぱり実だなと』

「やっと終わったー！！！！」

四時限目終了後、実の咆哮が教室に木霊す。

それを鬱陶しそうな目で見つめる生徒達（全員）

この光景を見る限り未だ朝の件は尾を引いているようだ。

「^{バカ}実うるさい」

だが無視されただけこのクラスの仲が窺える。

「う、ていうか飯食おうぜ？腹減ったし」

「・・・そうね。あ、そうだ！！シエリルさんも一緒に昼食どうかな？みんなもいいよね？」

「ああ、構わない」「俺もいいぞー」

廉也と実の同意を得た愛華はシエリルに提案する。

「私こそ構いませんが」

「よし！じゃあ屋上いこう！ここじゃあ、視線があれだしね」
後半の弦きにもとれる言動は最もな事だった。

現在廉也達は教室中から注目の的なのだ。

恐らくはシエリルがこの現状を作りだしたのに等しいだろう。
シエリルの存在は嫌でも人の目を惹く。

（でも本当によろしいのですか廉也様？学校では他人のふりをするのでは？）

秘密裏にシエリルの念話が廉也の脳に届く。

（別にいいんじゃないか？一緒にいる方が好都合だしな）

（そうですか・・・ではそのように）

ちやうど屋上へ移動すると言ったので廉也とシエリルは
念話を遮断した。

放課後の屋上

今の時間帯、秋ならば夕日という一つの景色を堪能できる絶好の場所だが、まだ夏という事もあって陽は高く日差しも強い。

周りを見渡しても誰もいる雰囲気ではないが、ただ一か所だけ誰も気づかない具合に歪んでいた。

その歪んだ空間の中
少年と少女は対峙していた。

「じゃあ、いつでもいいわよ？全力で来て」

美鈴の凜とした声が鳴り、廉也がそれに頷くと辺り一面に強力な磁場が発生する。

廉也のまわりに立ち込める真紅の雷光

その光は着実に彼の目の前へと集束されていく。

連想されるは紅く輝きを放つ巨大な宝石^{ルビー}

「いきますよ——」

一瞬大気が震えた。

続いて鳴り響くは空をも穿つほどの轟音とレーザーガン

その方向性は絶対的に美鈴へと向いている。

ただの人が当たればそれこそ何千回でも殺せるほどの威力を持つレーザーガンに美鈴は片手を出すだけで済まず。

皆が啞然とする中、光速の速さで迫るレーザーガンが美鈴を捉えた。

刹那——光が消えた。

「うーん、おかしいわね」

この理不尽な結果に啞然とする廉也、シェリル、アリシアを余所に美鈴は不満かもしくは不思議そうに首を傾げる。

「…………先輩の方がおかしいのでは？」

「だいじょうぶよ？これ私の能力だから」

「美鈴はどんな能力をもってるのですか？」

今までの工程を見学していたアリシアが興味津々といった感じに美鈴に聞く。

「んー、なんていうのかしらね。あえて言うのなら、全ての法則、原理、力、異能力を無効化にできる事が私の能力かしら？」

その無茶苦茶な能力に

「『化けものですね』」

綺麗なハーモニーを奏でた三人であつた。

だが、化け物扱いされた美鈴は不服そうに

「あら？一般人からみれば貴方達だって充分化け物よ？」

それに、と美鈴は続ける。

「廉也君に至つては何れ私を越える化け物になるんですから。あと廉也君までとは行かなくてもアリシアちゃん貴方もね」

「本気ですか？」

「ええ、もちろん。って話がずれちゃったわね。本題に戻すけど先ほど感じた違和感。それはシェリルちゃんと廉也君の契約の不完全差から来ているのよ。かなり中途半端にね」

だがそれにシェリルが疑問を投げかける。

「ですが、ちゃんと契約はしましたが？」

「その契約が不完全なのよ。シェリルちゃん貴女どういうふうに契約した？」

途端、無表情に近い顔から一変して顔を赤くさせるシェリルその表情、いつもは真っ白い肌に赤というアクセントが加わりより一層妖艶さ演出している。

「そ、それは・・・その。ち、互いの血・・・を」

「聞こえないわよ？」

かなり珍しくまごまごしているシェリルに対し美鈴は意地悪気に微笑む。

ちなみに廉也はこの件に関して一切の干渉を誓っていた。

もしここでシェリルを思つて口を挟んでしまったら自分が攻撃対象に変わるのには目に見えているからだ。

故にシェリルが潤んだ瞳で必死に助けを求めているも目を逸らすことしかできない。

目を逸らしたついでにアリシアを見れば寝て起きてを繰り返していた。

動きのにえば猫に等しくまた世の男たちが見ればほとんどの者が庇護欲をそそられる光景だろう。

（ていうか、寝ちゃ駄目だろ）

「あの・・・だからその・・・互いの血を飲むことで契約を完了したんです！！」

シェリルの悲痛の声が亜空間に響く。

「そう。やっぱりそれじゃ駄目ね。つながりが弱すぎるわ」

「では、そうすれば？」

今まで黙っていた廉也が前に出る。

「ヤルしかないでしょ？」

「「は？」」

「だからヤルしかないでしょうって」

「や、ヤルって何を？」

「交尾に決まってるじゃない」

「はあああああ！？」

「！？ どうしたんですか？」

廉也の大声にびっくりしたように目覚めるアリシア

垂れていた涎を必死に拭っている。

「まあ。今しろって訳じゃないから安心して。でもそうしないと100%の力は出せないわよ？魔界でいえば魔王はおるか特級悪魔でさえ、天界でいえば最高神と上級神と天使長にさえ勝てないわ」

「・・・そうですね」

「100%出せるのならシェリルちゃんを通して原初システムから欠片を引き出すっていうのが手つとり早い方法だったんだけどそれは無理ね。使えるのは現状として魔力のみ。せめて全属性を覚えなるときつかしらね」

「ぜ、全属性ですか・・・」

アリシアがドン引きした声に廉也は自分の血の気が引いていくのを

感じていた。

「それはどのくらい掛かるもので？」

恐る恐るといった感じに廉也が美鈴に聞く。

「大丈夫。原初と繋がっているんだから全てにおいて天賜級の才能を持っているわ。直ぐよすぐ」

ニッコリとわざとか天然か、凄惨な笑みを浮かべる、美鈴に全員が後ずさる。

「あとは・・・アリシアちゃんね」

廉也は何故アリシアがここにいるのだろうか？と疑問に思っていたがこのことかと納得する。

「あとは・・・アリシアちゃんね」

アリシアは美鈴に無理やり連れてこられたとはいえここに来たことを激しく後悔していた。

あの時、断っておけば・・・とあの時興味に駆られて付いてきた自分がこの上なく憎い。

「は、はい。何でしょう？」

自分でも分かるほど声が上ずっている。

今にも逃げ出したい所だが、この亜空間を突き破って逃げる自信はアリシアにはない。

「ここに貴女を呼んだのは、ほかでもないわ。その眼。魔眼の事よ」
まだ覚醒していないけれど、と付け足す。

「ま、魔眼ですか？」

「そう、魔眼よ。特性は多分未来視の魔眼ね。それも完全未来予測と予期。予測と予期でかなり正確な未来を見ることが出来るわ。一万年に一人出るかどうかの逸材といった所かしら。その代わり使い

こなすのには相当な技術が必要よ」

「それを・・・何故私に？」

確かにこれはアリシアにとって魅力的な発見だった。

だがこれは美鈴に対してあまりにもリミットが無いのではないだろうか。

それに美鈴からの口ぶりは自分がその使い方を教えて上げる、と言ってるようなものだ。

「疑問に思うのももつともな事だけれど、私はただ面白ければいいのよ？ ホントにただそれだけ。それに私だって魔眼を持っているわ」

「まさか・・・？」

アリシアの目が見開かれる。

美鈴は一呼吸置いた後

「そう、貴女と同じ魔眼よ」

静かにそう告げた。

第十七話（墮）天使の囁き（後書き）

気になる用語が出てきたと思いますが後々話にて説明が出てきますので楽しみに！

感想、批判、誤字脱字ありましたらコメントよろしくです

第十八話 天界と魔界（前書き）

ノリで書いた。

第十八話 天界と魔界

莊嚴で偉大

それがよく人間界でイメージされている天界の姿だが果たしてそうと言えるだろうか？

神は基本暇である。

魔界の魔物や悪魔のように戦闘狂で戦う事が日常茶飯事ではないし、人間界のように自らわざわざ責任を冒して仕事する訳でもない。だから暇なのだ。

昔ならば魔界との常時戦争状態で暇とか言える状況ではなかったが今は、ひと時とはいえ和平を結んでいるので戦争が起こる心配も少なからずではあるが無い。

「最高神様、暇です」

「うん、僕も暇だよ？」

「構ってください」

「ええ、寝たいよ」

そう言って布団に包まる最高神ことアルゼウス

さつきから構えを連呼しているのは天使長ラファエル

「あれですか。最高神様は人間界でいうニートというやつですか」

「ぶっ！何処でそんな言葉を！？」

「最近人間界で覚えました。おもに極東の島国、日本でしか使われていませんが」

「……人間界で覚えた？」

「あ……」

自分の失言に気付いたのか慌てて口を手で閉じているが、無駄な努力でしかない。

「……はあ。今回は許すよ。でも今度からは駄目だからね。わかった？」

「はい！」

ラファエルは怒られると思っていたらしく少し怯えている様子だったが、そんな姿を見せられたら怒る気にもなれない。

本人も反省していることだしアルゼウスは今回だけ（・・・）は（・・・）ラファエルを許すことにした。

「それにしても何処に行こうか・・・」

ベットから渋々降りたアルゼウスはうーんと唸る。

それに応じてラファエルも唸る。

「いや、ラファエルは真似しなくていいから」

「ですが、父様」

「ああー、ラファエル。他の天使の前でそれは厳禁ね。みんなそう呼んじゃうから」

「私と父様だけの秘密ですか？」

何故か希望に満ちた声と瞳で問うラファエルにアルゼウスは恥ずかしげに頬を掻く。

「うん。まあ、そうかな」

「言いません、ぜったいに！私と父様だけの秘密です！」

がばつとアルゼウスの腕に抱きついて秘密と言う単語に「ご満悦のラファエル

そこまで嬉しいことなのだろうか？

アルゼウスは苦笑しながらも先ほど言ったことを噛みしめる。

そう彼女たちは創られた存在なのだ。

いや創られたというのならば神とて、魔物や魔人、果ては人類、支配者も同じなのかもしれない。

だがアルゼウスは彼女達を見るたびに心が痛んだ。

彼女達すなわち天使たちは最高神アルゼウスの手によって創られた存在だからだ。

勿論、最高神であっても無から有を創りだすことは不可能。

そんなことは支配者にしか出来ない。

天使達はアルゼウスの力の一部を使ってこの世に具現化している

のだ。

それはある意味一心同体

父と子の関係

これが人間界ならばどれほど幸せだったことか

彼女たちにもきつと様々な運命の元、それ相応の人生を送れたのかもしれない。

だが、この天界に生まれてしまった。

否、創りだされてしまった。

ただの戦う（戦闘）存在（兵器）として

いわば捨て駒、神を守るだけの盾

天使達は死んだとしても魂は再びアルゼウスの元に戻る。

アルゼウスの力に還元されて。

故に神たちの間では捨て駒とみられている。

そうなのかもしれない。

そう割り切れれば良かったのかもしれない。

だが、アルゼウスは割り切れなかった。

彼女たちを創りだした存在として

彼女たちをただの戦うためだけの存在としないため。

彼は生まれて初めて自分自身に罪を賭した。

彼女たちをなるべく幸せにしてあげよう。

これが彼が戦争を起こさない最大の理由

もちろん他にも理由は山ほどある。

ただ今だけは、少しでも多く彼女たちが笑っていられる為に

これから先は決して笑えないだろう

これは最高神としての勘

待ちつけるは最大級の異次元戦争

阿鼻叫喚の地獄絵図。

遠くもない未来それは必ず来る。

（その時僕は彼女たちをただの捨て駒として、戦闘兵器として使う

だろう。一類の涙なく、一瞬の憐み もなく僕はただ淡々と君達に
”死ね”と命令するのだろう)

「とお・・・さま？」

いつの間にか考えにふけっていたのだろう。

ラファエルが心配そうな瞳でアルゼウスを見上げていた。

アルゼウスはラファエルの頭を優しく撫でて、大丈夫と付け加える。

「じゃあ、魔界にでも行こうか！久しぶりにルシファーにも会いたいし」

「はあ！？正気ですか!？」

信じられない、とても言いたげな表情をするラファエル

「うん、正気。もうこれ決定事項ね。よいいこう。今すぐ行こう」

「ちよつと・・・父様。まだ心の準備が・・・って何本気で
こうとしてるんですか!」

異次元の扉を抉じ開けたアルゼウスは「早く来なよ」、とだけ
言うたさつさと一人で行ってしまった。

残されたのはラファエルと異次元の扉のみ

(ゴクリ・・・)

「わかりました！行きますよ！行けばいいんでしょう!」

言いだしっぺは自分なのだ。

その責任が今はズッシリと重く感じる。

威を決して異次元の扉に乗り込んだ刹那——目に飛び込んで
きたのは紛れもない地面だった。

「・・・大丈夫？」

「ひつく・・・痛いです」

先ほどからその会話が何度も繰り返されていた。

ラファエルのおでこには大きなたんこぶ

異次元の扉に飛び込んだのがいけなかったのか、顔からスライディングしたのだ。

幸い怪我したのはおでこのみ

(・・・これは幸いというべきなのだろうか？)

怪我を直してやりたいのは山々だが、神に使えるのは神気のみ、魔界は魔力しか使えないもし使ったのなら一発で捕捉されてしまう。

しかもいるのは天界のトップ最高神と天使のトップ天使長なのだ。最悪宣戦布告と捉えかねない。

「ふむ、魔界も栄えているようだね。天界とは大違いだ」

整然とした魔界の街並みに思わず感嘆の声を漏らす。

「まあ天界はアレですからね。進化を必要としない神が多いですから。暇になれば人間界に降りればいいし」

「それはそれで問題なんだけどね。今は人間界も物騒だ。神殺しもいるし、妖怪、魔界から派生した魔物の亜種、堕神もいる。最近でも一人堕ちなかったっけ？」

ラファエルの方を見ると苦渋に満ちた表情でこちらを見つめ返してきた。

「なんでそんなこともしらないんですか。堕ちたのは上級神・・・死神です」

「・・・それって。やばくない？」

「ヤバいです。すごく危険です。殺人は死神の生理現象。よって意味ある殺人として秩序は働きません」

死神は基本死を捕食する。死神は天界にとっても特別な存在なのだ。

この世界で唯一、死を捕食する存在

この世の真理と呼ばれて未だ謎の原初システムと死と言う意味で共通している者。

普通死んだ者の魂は原初システムにより浄化され再び転生する仕組みとなっている。

だが、一部分のみ原初システムにたどり着かない魂がある。

辿り着かなかった魂は全て死神の元に集まり捕食されるのだ。

よって死神という存在はある意味人々の憎悪や悲しみの塊
毎回死神になるやつは碌でもない奴らばかりだ。

特に今回墮とされた死神は過去最悪の性格をしている。

「まっ・・・考えても仕方ないか」

「そうですね。何だかんだいって人間界は滅びたことありませんからね」

そこでこの会話は打ち切られた。

「ほえー、魔王城は大きいんですね」

ラファエルは天空にも達するかと思うほど高い魔王城を見上げ感動を口にする。

「そうか、ラファエルは初めてだったね。というか入ろう。中もすごいよ」

「大丈夫でしょうか？気付かれませんか？」

「大丈夫、大丈夫。阻害認識を使っているから」

そうアルゼウスとラファエルがここまで来るのに気付かれなかったのもこの阻害認識にある。

阻害認識とは神々にとって当たり前の特性である。

よって神気も使わないし、力が強ければ強いほどより強力なものになる。

たつたいま一級悪魔らしい悪魔が真横を通り過ぎたがまったく気付かれなかった。

ラファエルはいつばれるかと内心冷や冷やしていた。

無意識にアルゼウスの腕を掴んで離さない。

「ふう、やっとついた。流石に広いね」

「こ、ここは？」

「魔王の私室」

そう一言だけ言ってアルゼウスは扉を開けた。

扉を開けた先には平常時なのだろうが凄まじいプレッシャーを放つ男と絶世の美女ともいえる妖艶な女性が茶を嗜んでいた。

その凄まじいプレッシャーを放つ男がこちらに気付いた。

一瞬、目があった。

それだけでラファエルは倒れそうになるが寸前でアルゼウスに体を支えられる。

プレッシャーを放つ男は暫し硬直しているといきなり口に含んでいた茶を盛大に吹いた。

「ぶーー！ ごほつごほつ！ な、なんでお前がいるんだよ！？ バカなの！？ ねえバカなの！？」

噓せ返りながらも抗議する魔王という存在にラファエルは何故か親近感を得てしまった。

「いやー、単なる暇つぶしかな？」

「陛下、こちらの御二方は？」

「……最高神アルゼウスと天使長ラファエルだ」

「まあ。すごいわね」

魔王が一瞬で自分達の正体を看破したのには驚いたが、その隣の美女がすごいわねだけで終わったのにはもつと驚いた。

「はじめまして。ドルカス・マジステイル・リーデルトと申します。ちなみに特級悪魔を務めさせていただいています。アルゼウス様とは何度かお会いしましたね」

特級悪魔という単語にラファエルが目を見開く。

「はい、お久しぶりですね。ドルカス殿。今日もお綺麗で何よりです」

丁寧な賛辞を述べた後、平然と席へ座る。

それを立ったまま呆然とラファエルが見つめる。

「いや、何で座る」

「え？駄目かな？」

「いいじゃないですか。あなた」

「まあお前が言うなら別にいいが……ていうかその天使長も何突っ立っている。早く座れ」

ルシファアは何処からともなく出現したイスを勧める。

ラファエルとしてはこのままずっと立っていたが、どうも断られる雰囲気ではなかったので多少 挙動不審になりながらも座る。

「んで、何しに来たんだ？」

ルシファアは全員に茶が回ったことを確認すると開口一番に質問した。

「いつもはルシファアが突拍子もなくこっちへ来るからね。今回は僕が突拍子もなくこっちに来ただけさ」

さも当然のように言うアルゼウスにルシファアは深々とため息を吐く。

「はあ、まさかこの状況で来るとは……流石の俺も油断してたぞ」

「ふふん。だから来たんだよ。というかアリシアちゃんは？いつも

一緒じゃなかったけ？とうとう嫌われた？」

「そんな訳あるか！アリシアは今、人間界だ」

アルゼウスは一瞬きよとした表情をする。

理解出来なかったのだ。

「なんで？」

「学校に通わせている。こっちの学校は戦闘技術しかや学ばないからな。それにアリシアと同年代の子じゃ力の差が大きすぎる」

アルゼウスはラファエルの方をちらりと見つめる。

顔がかなり強張っており目の焦点が合っていない。

それもそうだろうとアルゼウスは思う。

魔界のトップ魔王とトップ2の特級悪魔がいるのだ。

緊張しない方がおかしい。

「何処の学校言ってるの？」

「確か——何だったっけ？ダルカス」

「明桜学園です。自分の娘の行っている学校ぐらい覚えていてください」

ダルカスの心底呆れた顔にルシファーは謝りを入れた。

「まあ、そんな学校だ」

「へえ、あの娘を溺愛していたお前が異世界に送り出すなんて頭が狂ったかと思っただが神崎廉也のいる学校なら納得だ」

だがそこにいいや、とルシファーが付け加える。

「いるのは神崎廉也だけではない。あの学校は元々多数の魔族と妖怪で占められている。それに天上の担い手がその学校で生きていた」

途端表情を変える二人

「そつか……やはり生きていたか」

一人は真剣な表情

「え、生きてたって……前の最高神様が天上の担い手を倒したんじゃないんですか？」

もう一人は不安を露わに

「ああ、そのはずだったんだけどね。なんせその戦いで最高神が死

なんだから。でも生きていたとなると・・・」

天上の担い手その言葉がアルゼウスの脳内で反響して響き渡る。
意味するは恐怖

あの存在を思い出すだけで顔から血の気がひいていく。

この世界には王と呼ばれる者とは別に管理者と呼ばれる者達が存在する。

その者達の役目は種族の監視と粛清

一つの世界の崩壊を食い止める抑止力なのだ。

なので絶対的な力を保持している。

しかし、それとて管理者も創られた存在であり無敵ではない。

殺す事も可能なのだ。

現にこの魔界では管理者は殺されている。

魔王ルシファ―唯一人の手によって

天界でも同様、この動きに乗じて管理者を抹殺しようと動き出し
ていた。

それほど管理者は耳触りな存在だったのだ。

激戦の末、最高神1名、上級神20名 中級神半数 下級神皆殺
し、という目を覆いたくなるほどの結果に終わった。

この戦いで天全てが血に染まったと伝えられている。

「はあ、面倒だな・・・あ、そうかだから神崎廉也を視ることが
出来ないのかな？」

「そんなこと言ってる場合なのですか！？何か手を打たなければ・
・・・」

ラファエルは明らかに焦っているがそれに比べアルゼウスはいた
って冷静だ。

「いや、ラファエル。動かない方が良い」

「で、ですが・・・！」

「ふむ。じゃあ逆に聞くけど、僕らに何ができる？天界総出で彼女
を殺しにいくのか？それで殺せると 思うのか？相手は数多くの神
を相手に殺戮を演じた相手だよ？」

「あ……う」

勢いが衰えて来たラファエルにさらに追い打ちを掛ける。

「はつきり言つて僕らの手に余る存在だ。僕が全力を出して斃せるかどうかの相手だろう」

それだけ言い終えるとアルゼウスは先ほどの厳しい表情とは打って変わり優しく微笑む。

「まあ、そんな相手だ。だから軽く見てはいけない」

「くくくつ、甘ちゃんだったお前が言うようになったな」

魔王が面白げに言葉を震わす。

「そうだね。甘いなりにちゃんとけじめをつけないとね。取り返しがつかなくなるから」

「あつはつはつ！！ああ愉快だ。久しぶりに戦う（ヤル）か？」

「止めとく。戦争になるから」

彼は一生を費やしても戦闘狂の癖は直らないなと思ったアルゼウスであつた。

「ねえ、ラファエル」

ラファエルとドルカスはすっかり打ち解けたようでは話題に花を咲かせていた。

「はい、何でしょうか？」

サラサラで綺麗な金髪がふわりと摩く。

「君も学園行かないか？」

「は??？」

これにはラファエルのみならずルシファーとドルカスも驚いていた。

アルゼウスとて軽はずみで取った言動ではない。

悩みに悩みぬいた末に出した結論なのだ。

「いや、だから明桜学園行かない？って」

「は、あ、いえ。そりゃ行きたいとは思いますが……天上の担い手がいるんですよ？」

「あー、アイツなら多分大丈夫だろ。俺の時もあいつが協力したし？」

「え？そうなの？」

「ああ、面白そうだからって」

そこでアルゼウスはまたもや悩む。

はつきりいつてラファエルが学園に入って面白い要因など一つもない。

口下手で男性恐怖症で上がり性

天上の担い手と対峙しても緊張でカチンコチンにかたまって一言も喋れないだろう。

暫く考える。そして思いついた面白そうなことを

「ねえ。僕が土下座したら面白いんじゃない？」

「「「は？」」「」」

『コイツ、バカなの？』

天使と悪魔が初めて共通した思いであった。

第十八話 天界と魔界（後書き）

続く・・・のか？

第十九話 平然、必然

力とは何か？

権力か欲望か希望か絶望か暴力か又は利益か

それは人によって千差万別の意味をもたらすものであろう。

力とは時に暴力となり災いを降り注ぐ事もある。

しかしその逆も然り

人はその力の真の意味を見出した時、本当の力を知るのだらう。

黒い闇に一人

血塗られた少女は微笑んだ。

魔法、それは魔力を持つ者のみに許された一種の奇跡

この世界にある『何か』を媒体とし幻想から物体へと昇華させる。

その『何か』は世界によって様々な捉え方があり、一番ポピュラ

ーなのは精霊だろう。

確かに精霊は存在しえる。

しかし、精霊もまた一つの『』の中に捉われているにすぎない。

もしこの世で『何か』を見つけることが出来たのならば気をつけるといい。

『はいつか君を喰らい尽くすだろう』

頭の中には数百数千のありとあらゆる数式と言葉の羅列

それは規則正しく蠢く秩序と魔法の法則

頭が潰れそうになる錯覚を覚えながらも一言一句を解読、次に理解。そして噛み砕く。

上から下へ、頭から体へと何かが流れこんでくる感触がする。これも不快極まりない。

その感触は体中を舐めまわす様に移動するとやがてしみ込むように消えていく。

苦痛という苦痛は今のところ無いが不快感と吐き気が回り気分が悪くなってきた。

（いや、この不快感はすでに苦痛なのだろうか？）

何千という魔法の解析が終わった頃、ほんの一瞬――刹那の時間を使い下らない事を考える。

ふと、周りを見渡してみるとシェリルがうとうとしながらも寝ないよう頑張っている姿が目に見え。

うとうとするのも当たり前だろう、すでにこの世界の時刻は深夜を通り過ぎていてる筈だ。

普通だったらとくに眠っているはずなのだが、廉也の魔法の練習にずっと付き合ってくれているのだ。

「ふう、今日はここまでで終わるか」

首をコキリと鳴らし、シェリルに向く。

「あ、ふあい。では元に戻しますね」

寝ぼけた声で返事をしたシェリルは指をパチンと鳴らすと亜空間を解く。

辺りは暗く良く見えないが、どうやらここは廉也達の部屋であった。

廉也はシェリルにシャワー浴びてくると伝えバスルームへと移動

した。

バスルームへ着き蛇口を軽くひねると温かい水が体を打つ。

心の中まで洗い流されるような感覚に捉われて思わずほうと息づいてしまう。

ある程度汗を流した所で廉也は思考を切り替える。

ここまで魔法を覚えるのに一週間ほどかかってしまった。

といっても全ての魔法を覚えたわけだが……

魔力に関してもある程度力の引き出し方を覚えたおかげか無尽蔵ともいえる魔力を放出出来るようになった。

しかし、それでもまだ足りない。

美鈴には相変わらず足元にも及ばないし（触れることすらできない）アリシアに関して魔眼を開眼させてから前回とは比べ物にならないほど強くなった。

今のところは廉也の方が勝っているがこれからはどうなるかは分からないだろう。

（はあ、別に張り合うつもりはないんだけどなあ）

なんだかアリシアが強くなるのを見ていると自分も頑張らねばと思ってしまう。

（まさか、先輩はこのことを狙ったんじゃないか……？）

これはこれでありえてしまうから末恐ろしい。

しばらくシャワーに当たった後、バスルームから出る。

タオルで頭を拭きながらリビングへの扉を開けると、そこにはすでにベッドで寝入ってるシェリルの姿が。

廉也は少し苦笑を洩らしながらもシェリルに布団を被せ、頭を撫でる。

綺麗な銀髪が月光に照らされて淡く光り輝いてとても神秘的な雰囲気醸し出す。

(偉いな……)

そう廉也は思ってしまった。

少し力を入れて触れてしまえば一度で崩れてしまいそうなほど白く華奢な体

思わず守らなければと使命立てられる。

「はあ、何考えてるんだ俺。早く寝よ」

頭を左右に振り考えを否定する。

しかし、寝ると言っても廉也のベッドはシェリルが占領してしまっているので仕方なしに廉也は隣の部屋のベッドで寝ることになった。ちなみに隣の部屋はいつもシェリルが使っている。

ベッドに入ってから魔力の巡回を忘れない。

最初は意識的にやっていたけどかなり苦勞を強いられたがここ2、3日で大分慣れてきた。

慣れるとほぼ無意識下で出来、疲勞回復や魔力増強などの効果が出てくる。

それに魔力を巡回させていれば一週間不眠不休でも大丈夫のようだ。

まあコレも全て美鈴に指示された事な訳だが……

しばらく思考に耽っていた為か、それとも疲勞からかは分からないが心地よい眠氣が廉也を襲う。

そのまま睡魔に身を委ねるようにして廉也は意識を失った。

翌朝の生徒会室

今日は朝早くから仕事があるという事だったので生徒会のメンバ

ーが勢ぞろいしていた。

ちなみにアリシアとシェリルも生徒会メンバーに入れてもらう事になった。

美鈴曰く何かと都合が良いからという事らしい。

残り生徒会長水野信哉と書記の柊葵も事情を知っているため問題ない。

と言う訳で………仕事が一通り片付いてきたので皆休憩に入る。

「うがーーーーー、やっと終わった!!」

「うるさい。毛むくじゃら。みんな疲れているんだから静かにしてよ」

前者は狼（男）の遠吠え、後者は吸血鬼の突っこみ。

葵の場合突っ込みというより罵倒に近い。

「……………」

ジーと二人をまじまじと無機質な目で見つめるシェリル
何を考えているのか分からないその無機質な眼は知らず知らずのうちに辺り一面に緊張を振りまく。

「な、なにかな。シェリル」

その視線に気づいたのか、葵が顔を強張らせながらシェリルに問いかけた。

「……ああ、いえ。二人はウェアウルフとヴァンパイヤなんですよね？」

「そうだが」

「そうだけど？」

「何故、名前が日本名何ですか？」

「……………」

どうやら二人とも今までそんなこと疑問にすら思わなかったらしい。

今、二人は神妙な顔つきでそう言えばとそうだと考え込んでいる。

「……うーん……………」

「いや、二人とも。何もそこまで考えなくてもいいんじゃないですか？名前なんて日本に長く住んでいればそれ相応の名前がつくでしょう？」

結構長い時間二人が悩んでいたので廉也がテコ入れを図る。

このままだとずつと悩んでいそうだったからだ。

「それも、そうか」

ある意味息ピッタリでアッサリした二人組であった。

なんとなく、アリシアが会話に加わらないなと思い廉也はアリシアの方へと視線を移す。

何やら美鈴と一緒にテレビに釘付けになっている様子。

「吸血鬼事件……ですか？」

そうテレビのタイトルには書かれていた。

最近、この街でよく殺人事件が起こっており、被害を受けた死体からは皆首筋に歯形が残っていた事から巷では吸血鬼の仕業だと噂されているらしい。

「でも吸血鬼って……」

「そうねえ」

そう言ってみんなが葵を見る。

「な、なによ」

「おいおいまさか……葵やっちまったのか」

ピシリ、と何かがひび割れた音が部屋に奔る。

「なにみてんだ、てめえ。ああ？」

青筋を額に浮かべ静かに？激怒する葵。

信哉は拙い……という表情、アリシアとシェリルは突然言葉づかいが変わった葵に戸惑い気味、美鈴は唯一楽しそうにクスクスと笑っている（恐らく確信犯）廉也は二人の間に入ろうとはせず無干渉を貫く。

「おい、その毛むくじゃら。ちよつとそこに直れ」

「いや、あの、ホントすみません」

「てめえ、反省してねえだろうが。その臭い毛全部耨り取ってやる

うか、ああ？」

「え、いやその、ほんとそんな毛引つ張らないでください……。私めがわたくしめが悪かったでございますから……。ってぎゃああああああああー」

「ど、どうしんですか。葵は」

あまりの豹変ぶりにアリシアがうるたえながら美鈴と廉也に説明を求める。

「ああ——まあなんというか。たまに結構あなることが多いから気にしなくていい。むしろ会長にしかアレ発動しないから」

アレの部分を意味する葵を指さしながら廉也は説明した。

ちようど信哉が毛をむしられているシーンだったが。

「なるほど……。なら安心ですね」

何が安心するのかよく分からなかったが、一応納得してくれたようなので廉也はあまり追及はしないことにした。

いや、むしろ無理やりにも納得してくれないとこっち逆に困る事になった。

何故ならば葵ですらも怒った後は記憶を失ったように覚えていないのだ。

何があつたか聞かされてもまるで他人事のように「そんなことがあつたんですか」という始末。

正直お手上げ状態だ。

「まあ、それはおいといて。殺人事件なんて物騒だな。それもこの街でとなると」

「そうねえ。面白そうね」

ニヤリと唇が付き上がる美鈴に廉也の顔が引きつる。

「先輩また何か？」

なんとなく悪いことを考えているように見えた。

「あら、失礼ね。別に悪いことなんて考えて無いわよ。それに殺人なんて今の貴方からすると少し生温いんじゃないかしら？」

意地悪気に笑って見せる美鈴に廉也は再三のため息を吐く。

「今まで人なんて殺したことですから、生温いとかどうとかは分かりませんよ。まあ、殺しかけた時はありますが……」

「ああ、あの夏休みの時の？」

そうあの夏休みに楓に絡んできたナンパ不良共

思い出したくもないことだが、あの時の廉也は幸か不幸か魔法の扱いが未熟であった。

よってあの時かけた精神魔法（これに分類されるらしい）は様々な綻びが発生し、一時的な効果に止まったのである。現にあの後、廉也達はばったりナンパ不良共に遭遇した。

楓は少し怯えた様子だったが、それ以上に不良共の方が深刻だった。

廉也を見た瞬間奇声を上げて自分達が歩いて来た道を全力疾走。美鈴以外は全員頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

「確かにアレも面白かったわねえ」

あの時の事を思い出したのか手を口元にあてて上品に美鈴が嗤う。笑う要因など何一つ無いと思うのだが、この先輩は周りよりもある意味頭何個分も飛び抜けている。

その頭の意味もある意味多彩に渡るが、ここで言ってしまったら絶対的に不利になりそうなので廉也は口を固く閉ざす。

「……廉也君が何か失礼な事を考えてるっぽいけどまあいいわ。それよりもそろそろ昼食にしましょうか」

ビクツと廉也の体が跳ね上がる。

表情ではなるべく笑いで誤魔化いたけれど背中では冷や汗でしっとりと濡れていた。

時刻はちょうど太陽が真上に到達する昼ごろ

生徒会役員達はそれぞれ持ってきたお弁当を取り出す。

ちなみに廉也はシェリルお手製弁当である。

最早今、シェリルの料理の腕前はプロ並みで廉也などアウトオブ眼中。

いやまあ眼中に入れてもらう方が困るのだが。

「……あれ、先輩は食べないんですか？」

一人だけ（正確に言うと二人だが、後一人は紅い血だまりの中で沈んでいる）弁当を広げていない女性言わずもかな美鈴である。

「ん？ああ私はいつも食べてから気にしないでいいわよ。食べなくても生きていける体だから」

それを不老不死と言うのでは？言いかけた言葉を飲み込む。

「そ、そうですか。でも食べてみたら案外嵌ると思いますよ？これシェリルが作ったものですが良かったら一つどうぞ」

「あら、そう？なら貰おうかしら」

廉也が肉に野菜を巻いたおかずを箸に取って美鈴の口に運ぶ。

あのカップルが良くやる「あーん、どう？おいちい？」「うん、おいちいよー」というやつである。

美鈴は最初から気付いていたが敢えて言わなかった。

廉也はやった後になって自分がしたことに気がつき、恥ずかしさで悶える事になる。

そして、空気がギョルリと歪む。

恨みか、嫉妬か、妬みか。

理由は定かではないが、明らかに空気が変わった。

「廉也様、私も……」

「いや、お前は俺と同じ弁当だろ」

「廉也私の食べて」

「その赤い物体を近づけないでくれ。ちょっと臭うから」

「神崎くん、私のを……」

「いや、柊先輩。俺トマト嫌いなんでトマトジュース飲めませんか」

結果全員轟沈

「ふふふつ、今日も愉快ね」

勝者の余裕か、美鈴だけが面白げにいつもの風景を楽しんでいた。

第十九話 平然、必然（後書き）

すみません。

かなり更新遅れました。

まあそれは置いて！！（駄目だろ）
はつきり言います！

スランプです！！！！！！

でも頑張ります！死ぬまで頑張ります！いや、嘘です。死ぬまでは嘘です、スミマセン。

次は20話！遊びます！（多分！）

第二十話吸血鬼考案1（前書き）

面白い話書こうと思ったんですが、やっぱり本編やった方がいいかなと思います。

ああ——すらんぷきつい

第二十話吸血鬼考案1

ピチャリ。

雫が垂れ落ちる。

ペチャ、ペチャペチャペチャ、バシャリ――

雫は時を置くごとに勢いを増し、最後にひと際大きな物が地面に音をたてて崩れ落ちた。

地は見る限り赤、赤、赤。

赤く、紅く、血で染っている。

「くつくつく。ふふふふふふ、あははははははははははは」

満月を背に妙に痩せこけた男が笑い狂う。

目は紅く鈍く光り、凶器のような鋭く尖った犬歯に口からは紅い液体が滴り落ちる。

顕わすならば狂気。

「ああ―― いけないな。血を見るとどうも我を失ってしま
う」

男が背にしたマントを翻すと地面に拡がっていた血液が、ある一定の方向性を持ったかのように男に集まって行く。

「くくくつ、腹も膨れたことだ。今夜はこのぐらいにしておくか」

再三――マントを翻し闇の中へと踵を返す。

男が去った後、そこには血も肉片となった物も元から存在しなかったかのように消え去っていた。

「おはようございます、本日のニュースです。今日午前2時頃神奈

川県横浜市で一人の男性の遺体が発見されました。警察は最近起きている連続殺人事件との関連性があると見て調査するとともに――

朝、いつも通りニュースキャスターが淡々とニュースの原文を読み上げる。

「これは、吸血鬼事件……でしたっけ？」

シェリルが出来上がった朝食を運びながらイスに座ってテレビのニュースを見ている廉也に問いかける。

「ああ。巷ではそう言われているらしいな。真相は分らんが」

この事件が吸血鬼事件と呼ばれるようになって何週間かたっていたが未だ犯人が捕まっておらず犠牲者は増えるばかりだった。

警察は血眼になって犯人を探しているが今日の今日まで何一つ証拠や凶器すら見つからずほとんどお手上げ状態であった。

最後の料理を運び終えたシェリルが向かい側の席に着いたのを確認してから、二人揃って「いただきます」を合い図に朝食を食べ始める。

「ところで今日は何しようか。暇だし何処か出かけるか？」

今日は日曜日。

珍しく生徒会の仕事が無かったので予定がスカスカになってしまったのだ。

なので廉也は久しぶりに、と二人で遊びに行くことを提案する。

「……それはデートというやつですか？」

その瞬間、時間が止まった。

……

(……え？)

「……え？」

頭の中の思考と確認のため口にした言語

自分でも分かっていた。

完全に思考停止している。もとい焦っている事に。

「……ってお前何言ってるんだよ！　というか何処でそんな

言葉覚えた！？」

「いえ、覚えたというより私の脳内に保管されている初期言語から適切な言葉を抜擢しただけですが？ それよりも廉也様これはデ―

」

「よし！シエリル。これから十五分後に出発するから準備しておけよ。わかったな？俺は隣の部屋で準備してくるから何かあったら呼んでくれ」

これ以上は何か色々拙い。そう感じた廉也は話題を強引に終わらすとさっさと隣の部屋へ移動した。

しかし、その時。一瞬だけシエリルが残念そうな表情を浮かべていたとは気付かずに。

あれから数分後、準備も終わり玄関で待っていた廉也は暇だったので携帯で例の吸血鬼事件の事を調べていた。

（被害者全てに関連されているのは首筋についた小さな二つの穴。それと血がほとんどなくなっているという事。後は目撃者も未だ無し、と言った所か）

これなら吸血鬼事件と言われるのも頷けるものだ。

（けど、血を全部抜くことは普通に考えて可能な事なのだろうか・・・？）

機械でやるにしても首筋についた二つの穴以外外傷がないのならそれは不可能だろう。

それに抵抗した痕跡が何一つないというのがおかしい。

「うーん、葵さんに聞いてみるかな」

「何を聞いてみるんですか？」

そこで準備を終えたシエリルが歩いてきた。

「うん。いや、なんだ。例の吸血鬼事件に関して葵さん聞こうと思
ってな」

「………何故です？」

「葵先輩は吸血鬼だろ？何か知っているかもしれないと思ってな」

「いえ。ですから何故そのようなことを？」

今更ながら廉也は気付いた。

シェリルの表情が若干不満気になっている事に。

「あー、ただの興味本位だよ。そんな無理に首を突っ込もうとはし
ないから」

だが、シェリルはまだ釈然としていないのか不機嫌な表情を崩さ
ない。

（………どうしたらいいんだ。俺は）

自分が悪いのは分かっていたがまさかここまで機嫌が悪くなると思
っててもみなかった。

というかシェリルがこれほどまで不機嫌になること自体、過去を振
り返っても無いことだったので廉也はどうしようかと、手を拱こまねいて
いた。

その時、玄関の外でドカドカと駆けてくる音が聞こえてくる。

最初は遠く、しかしだんだんと近づいてくるソレは廉也とシェリル
のドアの前でピタリと止んだ。

いや、止まったという方が正しいのかもしれない。

廉也とシェリル、二人が無言で顔を見合わせる中、扉は勢いよく開
かれた。

次に飛び出したのは元気なそれでいて聞き覚えのある懐かしい声。

「廉也！遊ぼう………ってあれ？どうしたんですか、二人と
も。玄関前で固まって」

艶やかな黒髪を後ろで一つに束ね、元気潑刺といった表現が良く似
合う少女、アリシアが玄関前で固まっていた二人に対してキョトン
と首を傾げた。

第二十話吸血鬼考案1（後書き）

スランプが直らない。

文章がおかしい。

泣きそう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0096q/>

あなたは今日から魔神サマ！

2011年4月27日16時14分発行